

涼宮ハルヒのイチャイ
チャ

バビロンンロビバ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

青春の甘酸っぱさがエスカレートしていき……
ハルヒはどんどんHな子に
ハルヒ「超監督である私が編集してるのよっ あ 編集は奴隷のキョンだったわ
と とにかくありがたく読みなさいよね」

目次

イチャイチャスタート	1
イチャイチャスタート2	23
次の日の学校	36
土曜日	50
土曜日セカンド	72
土曜日サード	91
土曜日 時々お仕置き	108
また学校	129
まだ学校	144
キャン普	161
キャン普で悪魔	177
マンション	198

サイコパス	220
またイチャイチャスタートよ	243
独り言	275
セカンドロスト	281
ラブラブ調教	300
ラブラブ調教2	319
海よ	334

イチヤイチヤスタート

朝っぱからピーンポンじゃねーよ

毎週毎週毎週日曜日 しつこい たまには惰眠を貪りたいわ

妹がハルヒを連れてきた

キヨン「今日も早いな」

ハルヒ「別にいいでしょ」

キヨン「朝飯食ったか？」

ハルヒ「食べてないわよ」

キヨン「食べるか？」

ハルヒ「食べる」

キヨン母「ハルヒちゃんいっぱい食べてね」

最近、これが日常 思うところもあるけど 考えない 考えたらいけない気がする

だってそうだろ？こんなの非日常 あーそうさ 童貞だ

最初はドキドキしたさ でも考えない ハルヒに負けた気がする

好き？わからない でも、悪くない。この関係は崩したくないかもな

妹「はるにやんの服いつもかわいい」

ハルヒ「ありがとう！良かったらおさがりあげるからね」

おいおい定期的に着なくなった服持って来る口実だろ 勘弁してくれ まっサイズ的にまだ先の話だな

しかし、毎回毎回違う服だよな 誰もが振り向くビュジュアル そうかわいい

だが、性格 嫌だ 下っ端 奴隷 雑用係 引っ張る 首痛い 普通な言動出来ないもんかね

部屋

ハルヒ「続き気になるわねこの漫画」

キヨン「貸してやるぞ」

ハルヒ「いい」

なんでだよ 家で読めよ

ハルヒ「重いじゃない」

キヨン「お前ごと家まで自転車で輸送してやるよ」

ハルヒ「暑くなるからいい」

やれやれ全くもって意味がわからない

では、どうやって俺の部屋まで来てるんだよ

来るまで暑いだろ 徒歩だろ スタミナ無限だろ 意地悪か？

つーか見えるんだよ どんだけ気を使って努力してると思ってるんだ 17歳だぞ

ニーソ タイトスカート 天使か はっ違った朝比奈さんだった天使は

じゃこいつは あー神だったか笑

ん？待てよ 神はゼウスつまり男 女神か！しつくりくる

はは まさか 古泉 朗報だ神ではないぞ

コンコン

妹「キヨーン君」

キヨン「どうした？」

妹「お母さんとイオン行ってくるね」

キヨン「ああ 気をつけてな」

妹「ヘーキ」

キヨン「ダメだぞ ニュース見るだろ？世の中危険だ」

妹「はいはい」

ハルヒ「気をつけていってらっしゃい」

妹「はるにゃんありがとうっ そーいえばお母さんが夕御飯も食べてくって？」

ハルヒ「もちろんよ」

おいおい　いつまで居る気だよ　帰れよ

休まないんだけど　これがブラックか　ブラック企業なのか

あー寝ても寝ても眠い　寝たい　ベット占領するな　うつ伏せで足バタバタさせる
なっ　自分家じゃねーんだぞ　靴下脱げよ　ニーソ……………

ハルヒ「あー暇ね」

そりや毎週来てたらやることないだろ

ハルヒ「キョン　Hな本隠してるんでしょ」

キョン「はは　ないない　妹も勝手に部屋入るし　あり得んな」

ハルヒ「じゃー妹居なかつたらあるの？」

キョン「ないない　そんな暇あつたら寝る」

余裕余裕　なぜならインターネットのエロ動画でな　うむ

ハルヒ「じゃーどーやってんのよ」

キョン「なにがだ」

ハルヒ「あれよあれ」

掘り下げるなよ　そして自分から聞いというて赤くなるな

表情は見えないが耳赤いんだよ

キヨン「やれやれ」

ハルヒ「ちやんと答えなさいよね」

しつこいんだけど 聞いてどうするんだ 言わない 流石にキツイ 童貞舐めるな

キヨン「ハルヒはどうなんだ」

ハルヒ「なにがよ」

キヨン「あれよあれ」

ハルヒ「はー変態ね 女の子になに聞いているのよ サイトー」

キヨン「やれやれ」

ハルヒ「そういえばお母さん出かけたけど あんた昼ごはんは？」

キヨン「残り物やら納豆でいいだろ」

ハルヒ「ダメよしっかり食べなきや そんなんじや団活に支障をきたすわ」

一食抜いただけで大丈夫だ 朝ごはんをしっかりと食べたし

キヨン「つつてもなー」

ハルヒ「しょうがないわね なんとか用意してあげるわ」

キヨン「そりやどうも そうゆうことも出来るんだな」

ハルヒ「当たり前でしょ 当然よト ウゼン」

やれやれ まあせつかくだし頂くとしよう

キヨン「こりや楽しみだ」

ハルヒ「ちよ そうはいつても冷蔵庫の中身次第なんだからね」

キヨン「自信ありげだったから」

ハルヒ「つべこべ言わず食べなさいよ せっかく私が作るんだから」

キヨン「ますます楽しみだな」

ハルヒ「… はいはい」

ん 待てよ 俺はこいつが 毎週毎週来るのが嫌だから…:

そうだ なぜ気付かなかった来づらくしよう 微妙な空気にさせよう

んーさてどうするか エロ系はダメだろ普通に考えて怒るだろうし 要求しても断

るだろう

むしろカウンターを食らう恐れがあるな

罰ゲームだったら要求を呑むか？ 普段俺に罰金やらなにかしら言ってくるし 約

束は反故にはしないだろう

しかしだ、ゲームしてもなにかとハルヒルール発動するしな どんだけ負けず嫌いな

んだか

ハルヒ「ちよつとなにか言いなさいよ」

キヨン「罰ゲームだ」

ハルヒ「昼ごはんが美味しくなかったら？」

キヨン「違う罰ゲームだ」

ハルヒ「は？」

キヨン「だってそうだろう　いつもいつも奢らせられたり雑用をさせられる　理不尽だ」

ハルヒ「SOS団の雑用係なんだからしょうがないでしょ」

キヨン「それが理不尽だ　お前もたまには嫌な思いをしろ」

ハルヒ「嫌だわなんで私が」

キヨン「ほー逃げるのか」

ハルヒ「罰ゲームだったらなにか勝負でもするのかしら　一応聞いてあげるわ」

キヨン「俺がなんの罰ゲームをハルヒにさせるか当てるゲームだ」

ハルヒ「私が不利過ぎるじゃない　そもそも答え変えられるし」

キヨン「やれやれそんなズルを俺がするとでも」

ハルヒ「信用出来ないわね」

キヨン「3文字だ」

ハルヒ「なにがよ」

キヨン「罰ゲームだ」

ハルヒ 「勝手に進めてるんじゃないわよ」

キヨン 「これで後から変えてない事がわかるだろ」

ハルヒ 「だから勝手に進めないでよ。そもそもやるって言ってないし」

キヨン 「逃げるのか」

ハルヒ 「頑なに強引ね。そんなにその罰ゲームをやらせたい訳。サイテー」

キヨン 「わからないだろ」

ハルヒ 「当たり前じゃない。あんたの出来の悪い脳みその考えた事なんて」

ウザい 「ウザいがノツてきたな。圧倒的優勢」

ハルヒ 「んでその罰ゲームは今日出来るもの？」

キヨン 「今日実行する」

ハルヒ 「部屋で出来るものなの？」

キヨン 「室内が望ましいな」

ハルヒ 「あんたまさかエロい事じゃないでしょーね」

キヨン 「もちろんだ。そんなに信用出来ないかね」

ハルヒ 「ん。ま。いいわ。どんぐらい続ける内容よ」

キヨン 「特にないがハルヒが嫌になるまでは続ける予定だ」

ハルヒ 「サイテー」

キヨン「罰ゲームだからな」

ハルヒ「それは私以外にした事ある？」

キヨン「……ないと思う ほぼないと思う」

ハルヒ「なにその言い方」

キヨン「ほぼないと思う」

ハルヒ「それは私にやらせたら恥ずかしい？」

キヨン「相手によるんじゃないか」

ハルヒ「今日だったらあんたしかいないじゃないの」

キヨン「そうだが 俺は問題ない」

ハルヒ「……」

考えてる考えてる わかっても言えまい 当てても言う事が恥ずかしい

当てられたら実行し恥ずかしい思いをする 正に二重の構え そして俺は被害がな

い 勝ったどちらに転んでも

キヨン「ギブアップか？」

ハルヒ「うるさいわね 私が不利過ぎるわ 答えの範囲が多い」

キヨン「そうでもないだろ 的確に返答してるが」

ハルヒ「あんた団長であるこの私に罰ゲームさせるんだから あんたも罰ゲームしな

さいよね」

キヨン「断るが」

ハルヒ「ダメよ 私はその罰ゲームに臨んでやるわ だからあんたにも罰ゲームよ」

キヨン「じ じゃゲームなし」

ハルヒ「は？ 一度言つた事を反故する気 もう時間を浪費してるの 貴重な私の時間
があんたによって 逃げられるとでも」

なぜだ なぜここでカウンター

俺が有利だっただはずだ

そもそも貴重な時間ってなんだ

俺のベツトで漫画読んでただけだろ 逃げられるとでも？

…………… 逃げられた事ないな

う
しかしだ俺の罰ゲームが先に実行の流れだ そうすれば恥ずかしくなつて帰るだろ

キヨン「ま いいだろう 罰ゲーム実行でいいんだな？」

ハルヒ「別にいいわよ 二人で室内なら他の人に見られないし」

キヨン「だっこ だ」

ハルヒ「あつそう」

キヨン「腕を伸ばせ」

ハルヒ「はいはい 変なところ触ったら死刑よ」

キヨン「まさか」

ギユ ダキツ

キヨン「よいしょつと」

ハルヒ「……」

キヨン「恥ずかしいだろ」

ハルヒ「別に」

耳赤いんだよ 恥ずかしいんだろ

ちよつと待てよ めつちやいい匂いする

なんだ シャンプーの匂いか そして柔らかい 思ってたより軽い こんな体であ

のエネルギーは凄いな

俺の事グイグイ引つ張るもんな

ちよ待てよ だっこ中の自分を考えてなかつた

やばい やばいぞ この柔らかさと匂い 恥ずかしい

俺が恥ずかしい 顔が赤くなってるかもしれない 髪触りたい

ナデナデ

ハルヒ「ちよつとなにするのよ／／／／」

キヨン「す すまん」

ハルヒ「べ 別にいいわよ」

ナデナデ

ハルヒ「……／／／／」

キヨン「……」

ハルヒ「こ これが罰ゲーム？それともあんたの趣味？」

上目遣いでこつちを見るな ぶらさがりな感じで正面に来るな やばいぞこれ

ハルヒ「こつち向きなさいよ」

キヨン「ハルヒに恥ずかしい思いをさせる罰ゲームの予定だった／／／／」

ハルヒ「ふーん ま 別に悪くないわね／／／／」

ダキツ

ハルヒ「頭撫でなさいよ」

ナデナデ

ハルヒ「／／／／／／」

キヨン「ハ ハルヒっていい匂いする」

ハルヒ「そう」

キヨン「……／／／／／」

ハルヒ「ちよ耳元に顔を擦り付けるな」

キヨン「す すまん」

カプ

キヨン「!!!」

ハルヒ「へへ」

カプ ペロペロ

ハルヒ「どう?」

キヨン「な な なんともないが」

ハルヒ「じゃ逆も」

カプ カプ カプ ペロペロ ペロペロ

キヨン「／／／／／」

ダキッ

ハルヒ「わ 私にもやってみて」

キヨン「断る」

ハルヒ「断る事を断る／／／」

カプ ペロペロ

うおーたまらん ペロペロ ペロペロ ずっと出来る なんてだ 美味し いい匂
い はあはあペロペロ 首筋も あー吸い付きたい おもいつきり 耳もカプカプ
ペロペロ

ハルヒ「はあ はあ いや ちよ／／／ キヨ キヨン ぎや逆も／／／／／」

クビを舐めまわし逆サイドもカプペロペロ ペロペロ カプ

ハルヒ「み 耳は だ ダメよ ／／／ あ キモチいい／／／そ そんな甘噛み
キヨ キヨンつてば」

キヨン「はあはあすまん 俺も気持ちよくて」

カプカプ ペロペロ チュチュツチュツ

ハルヒ「す すまんて思っでないでしょ もう」プクー

ナデナデ ナデナデ チュツチュツ

ハルヒ「ね、ねーつてば／／／／」

トロ／／

ナデナデ

キヨン「な なに」

ハルヒ「そ その口は」カア／／／／／／／／

キヨン「良いのか？」カア／／／／／／／／

ハルヒ「こ この罰ゲームは私にだけ？」

キヨン「あ 当たり前だ」

ハルヒ「／／／／／／／／」

ウワメズカイ メ トジ

チュ チュ チュツーン クチュ クチュ ネチャ ネチャ レロレロ

ハルヒ「あつ あんつ ちよ はあはあ」

トロ〜ン

クチュクチュ チュツ レロレロ ピチャピチャ チュー

ダエキ トロ〜

ハルヒ「もつと／／／／／／」デレデレ

ナデナデ

キヨン「ハ ハルヒ 目を瞑って だっこをずつとしてるから 倒れちゃうかもしれ

ん 危ない」

チュツ チュツ テローン チュツ ペチャンコペチャ クチュ クチュ

ハルヒ「はあはあ で でも／／／／／」

ダキッ

ベットにハルヒを降ろそうとした 足でガツチリホールドされてる

ダキッ ギュー ペロペロ カブ ペロペロ チュー

ハルヒ「あんっ 耳元 あっ あん だ だめ はあはあ ああん／／／／／」

気づいたらお互い横向きで抱き合い 舐めまくってる

もうキスどころではない デイープだ

こんなに気持ちいいのか ギンギンだ 時折当たる バレてるだろう

執拗にハルヒからもデープレロレロ攻撃がくる たまらん

つかハルヒの吐息や声がヤバイ ジンジンする 気持ち良すぎる

無意識に太腿や背中を優しく触ってしまう スベスベ 白く透き通った肌を

こんな美少女の身体を触りまくり ハルヒはハルヒで時折 腰が動いてる

基本的に全体が動いているが 腰が動く時が感じてるのか 色っぽさに拍車をかけ

る

なんで俺が冷静って？ 冷静ではないが もうどれくらい時間が経ったかわからな

い

ずっとだ ずっと たぶん

キヨン「ハ ハルヒ？」

ナデナデ

ハルヒ「ん」

キョン「今日の昼ごはんは世界一美味しいハルヒだな」

カア「—————」

ハルヒ「わ 私はキョ キョンね／／／／」

チュウ

ハルヒ「ね ねキョン／／／」

キョン「なんだハルヒ」

ハルヒ「もつと私の身体触りたい？／／／」

キョン「ま まーな」

ハルヒ「で、でもこれ以上は そ そのー」モジモジ

ナデナデ

キョン「そそそ そうだな」

ハルヒ「……………／／／／／／／／／／」

ギューつとっしててるが 沈黙が流れる

俺もそう思う これ以上は これ以上は？

あーそうか つまり恋人 彼女の仲じやなきやな 俺はハルヒが好きなのか？

……正直 長門や朝比奈さんところはならない

好きだが 付き合うとかそう言う好きじゃない

じゃーハルヒは？同じ感じだったと思う いや違うな好きだったんだな だからキスをした

つまりハルヒも俺が好きになってことか？思えば色々あったな

今年は更に楽しくなりそうだ

キヨン「……………ハルヒ」

ハルヒ「ん」

キヨン「好きだ 大好きだ 世界でハルヒが一番好きだ」

ハルヒ「ん 好き／／」

ギュー ナデナデ

ハルヒ「そ そのエツチな事したいから？／／／／」

キヨン「このまま なにもしなくても ハルヒの事が好きだぞ」

ハルヒ「ほんと？」 チュー チュツ チュツ レロレロ

ウワメズカイ ギュー

キヨン「本当だ」

ハルヒ「キスしたいから？／／／／」

キヨン「違うって ハルヒ まあキスもしたいが まず聞け 俺の本気を信用してないみたいだが、ハルヒは無茶もあつた 性格もなかなかだと思つた だが、なによりもハルヒと一緒にだと楽しいんだよ 別に付き合わなくても今まで通りかもしれない だが表現が難しいんだが

はは 大好きつてことだ」

ハルヒ「い 一生？／／／」

キヨン「もちろんだ」

ハルヒ「私の側から離れたら承知しないんだからねっ」

キヨン「もちろんだ」

ハルヒ「浮気もダメよ 絶対 許さない」

キヨン「まさか 信用した上で俺の事が好きなんだろう？」

ハルヒ「ん 好き／／／」

ナデナデ

ハルヒ「ずっと好き／／／」

チュツ

キヨン「な なあーハルヒ」

ハルヒ「ん」

キヨン「好きな人とイチャイチャするの　なんか　気持ちいいよな」

ハルヒ「ふふ」

キヨン「どうだった」

ハルヒ「ふふ」

キヨン「はぐらかすなよ」

ハルヒ「凄かった　頭も身体もジンジンしたの／＼」

キヨン「俺も」

ハルヒ「女の子になに言わせるのよ」

チュツチュツレロレロ

キヨン「気になるじゃん」

ハルヒ「二人だけの内緒よ」

キヨン「あーそうだなー」

ハルヒ「谷口とかに言わないでよね」

キヨン「もちろんだ」

ハルヒ「あ　あと……　一人でするのもダメよ」

キヨン「なにかだ」

ハルヒ「そその　あれよ　あれ」

キヨン「言わなきやわからないよ　ハルヒ　ハルヒの口から聞きたいな」
ナデナデ

ハルヒ「つーーーーその　あの　Hな本とかで一人でするあれよ　浮気だから
私以外の女で一瞬でもそう思ったら浮気だから　そ　そう　だからダメよ」

キヨン「わかった　ハルヒも一人でしたらダメってことだな？」

ハルヒ「べ　別に私は　その　し　したことないわよ　興味　ないのよ」
キヨン「そういう事にしよう」

ハルヒ「エロキヨンね」

キヨン「ハルヒはもう俺の彼女だからな　彼女の事は色々知りたいたいぞ」

ハルヒ「／／／／／／／／／／」

キヨン「可愛いよハルヒ」

ハルヒ「ね　ねえー」

キヨン「どうした」

ハルヒ「好き」

キヨン「あー好きだ」

ハルヒ「そ　その私の胸みたい？」　／／／／／

キヨン「恥ずかしい」

ハルヒ「私もよ」

キヨン「見て揉んで耳元みたいにペロペロしたい」

ハルヒ「す 素直ね／／／」

キヨン「俺だけのおっぱいだからな」

ハルヒ「つー／／／／／／で でもね わ 私もHな気分させられて そそ

の我慢出来ないかも」

キヨン「素直なハルヒ可愛いな」

イチヤイチヤスタート2

よりによってタイトなTシャツ ボデイラインがはつきりしている

丰满な胸 DかEカップなのか

キヨン「いつ 一回立って は 裸にならないか そう産まれたての姿だ」

ハルヒ「見ないでね／＼」

キヨン「バンザイしてみて」

ゆつくりとTシャツを脱がし可愛いブラのホックを外す

ハルヒ「キヨ キヨンもバンザイしなさい／＼」

そう言つて脱がされた 抱きしめ ベットに再び横になる 恥ずかしそうに手ブラしてゐる ニーソは履いたままだ
 ニーソ……にパンティ姿……

口から耳 首元へ向かう 手ブラは外れ 腰に手を回されてゐる

胸元を愛撫しながら 目的地を目指す 右の乳首周りの乳輪をレロツと舐め回し

乳首を舐め始めた

ハルヒ「み 見nいああん」

綺麗な左胸のピンクの乳首を軽く触れる 2センチ程勃起する

ハルヒの身体が振れる この行為だけで逆に俺がイキそうだ

ハルヒ「あ ああん だd@・め はあh///」

左手で左の乳首を弄り続け おへそ辺りへ移行し舐め回す

身体がビクビクして凄いい反応だ 一旦口へ戻り

より激しくディープなキスをする

ハルヒ「ky はx あんはxh」

内腿を触り始める スベスベした美しい肌を優しく触る 中心へ向ける度に ハル

ヒの腰が浮いたりする

ハルヒ「わ わsmもキヨンの///」

そういつて俺の乳首を舐めてきた ちよつと頭を乳首に抑えつけるように抱く

苦しそうだが気持ち良くてやめられない

ハルヒ「んんn〃〃」

顔が赤くなり涙目のハルヒの乳首を舐めながら 我慢出来ずアソコを触ろうとした

意を決して

タイトなミニスカのチャックを下ろす

上下お揃いの純白なパンティが見えた ドキドキが止まらない ミニスカを脱がせ

ハルヒの顔を確認する真つ赤だ 思わず抱きながらキスをした

ハルヒ「はあjあ もう だ ⊠ b & a m p ;」

キスをしながら下ろそした ゆっくりと

綺麗なアソコの毛が見え

その下に差し掛かった瞬間 !!!糸を引いていた

エロの衝撃 理性は飛んだ アソコを舐め回した そう顔を埋める程に

ハルヒの艶やかな声が大きくなつてく

ハルヒ「ちよはあky も もー／／だ」

ビクンビクン

キヨン「い イツたつてやつ？わ わからなくて」

ハルヒ「た たぶn わからnないけど はあhあ／／」

キヨン「そ その気持ち良かった？」ドキドキ

ハルヒ「う うん／／凄く恥ずかしいケド／／」ウルウル

ハルヒ「う うーキヨンに襲われた／／」

キヨン「す すまん」

ハルヒ「今度は わ わ 私が／／」

そう言つてハーパンごとパンツを下された

カプツ レロレロ

ハルヒ「仕返しよ／＼／」

チュパ チュチュ チュパ レロレロ

ハルヒの手は俺の太腿を掴んで 頭をゆっくり前後させている

俺には耐えれなかった 女神の攻撃を 気づいたらハルヒの頭を両手で押さえ 出した ギネスだ とんでもない量だ 思わずハルヒの顔が離れる 目や鼻 髪に飛んでしまった

美しい黒髪を左手でアソコに巻き付けながら擦り 余韻を完了させる

ハルヒが苦しうに床にだらしなく垂らしてる

ハルヒ「げ げほっ げほっ」タラー

キヨン「だ 大丈夫か？」

ハルヒ「辛い状況よ hあはああ」

裸のハルヒを抱き寄せダッコした これ以上 家に痕跡を残さないよう冷静に 風呂場へ向かう 流石に匂うがそれ以上に興奮していた

シャワーの温度を調整してハルヒの髪や顔についたドロドロしたモノを流してあげる

うがいもさせた

シャンプーをしてあげる 顔もそのまま洗ってあげる 何か文句を言ってるが緊急事態だ

しやがませ 後ろから抱くように座った ハルヒの耳が赤い

スポンジにボディソープを泡立たせて 首から腕へ優しく洗ってあげる 気持ち良さそうだ 一旦背中へ行き つま先も念入りに洗ってあげる

股を閉じないように 俺の足を内腿に入れて全開に開く 内腿から中心に向け 優しく洗う

気づいたらまたディープキスをしている 無意識だ

スポンジでアソコを上下させる 身体が反応してる

脚を閉じようとしてくるが

俺がすっかり股を広げているので閉じれない

右手でスポンジを上下させながら左手はハルヒの綺麗な胸を揉んだり乳首を弄ったりしてる

ハルヒ「ま m ってよ ま またああん／／／」

ビクビクとまたイッようだ 優しく後ろから抱きしめる

キヨン「どこ触られてイッたのかな？」

ハルヒ「はあはあ く クリ／／／」

キヨン「ちゃんと聞きたいな」

ハルヒ「クリトリスよっ／＼／＼」

キヨン「ハルにゃんは何回イッたのかい」

ハルヒ「に 二回も／＼／＼」

ナデナデ

シャワーで洗い流し

バスタオルで吹いてあげる

ドライヤーで綺麗な髪を乾かしながら 体を洗つてくると告げた

出ると女神がバスタオルを持って待っててくれ

体を拭いてくれた

バスタオルと洗濯ネットに入れたニーソを洗濯機に投げた 選択肢がない ハルヒ

は気にしてないようだ

ハルヒ「だっこ／＼／＼」

頭を撫でてやり

キヨン「だっこ好きだな」

ハルヒ「う うん」

歯磨きした ゴシゴシ

部屋

ハルヒをベツトに横にさせ 床をボディーペーパーで拭く

俺もベツトインし

ハルヒ「幸せ／＼／」

キヨン「ああ」

ナデナデ チュー チュチュ メ トローン

ハルヒ「……………」

キヨン「……………」

ガチャ 冷蔵庫の開く音が聞こえる

つーーーー 俺は悟った 5秒でTシャツとパンツとハーパンがセットのものを履く 時計を見る18:00だ 階段を登って来る音が聞こえる Tシャツ ミニスカ ブラ 糸の引いたパンティを布団に押し込み ハルヒにタオルケットを掛けた 心

臓に悪い

ガチャ

キヨン「シー　ハルヒがお昼寝だ」

妹「ほんとだー19:00ごろ　ご飯だつてー」

そう言つて　去つていった

女神は寝惚けてるようだ

ユサユサ

ハルヒ「んーん　！　キヨンー　なんで服着てるのよー」ムツ

裸の女神の起床だ

キヨン「起きたか」

ハルヒ「む　ダツコして」

ナデナデ

キヨン「お袋たちが帰つてきた」

ハルヒ「それより　ねえー好きって言つて／／／」

キヨン「好きだぞ」

ハルヒ「良かった　夢じゃなかったのね／／／」

チュツチュ

ハルヒ「服　着せて」デレデレ

服を着せながら

ハルヒ「キヨンは子供何人ぐらい欲しいの？／＼／＼」
キヨン「そうだな／＼／＼3人ぐらいか？」

ハルヒ「そ そうね私も／＼／＼」

キヨン「普通だな」

ハルヒ「そんな時は普通が幸せなのかもー」デレデレ

キヨン「俺が仕事してからな／＼／＼」

ダキツ「ダツコ ナデナデ」

ハルヒ「キヨン ケータイ見せて」

キヨン「ああ」

ハルヒ「ロックしてるわ」イラッ

キヨン「落とした時の防犯さ」

ハルヒ「履歴の佐々木ってなんなのよ」ムスツ

キヨン「朝比奈さんも居るじゃないか」

ハルヒ「SOS団はいいのよ もおー浮気」

キヨン「仕方ないさ 付き合ったの今日なんだから

それに佐々木も大事な友達さ」

ハルヒ「履歴を私で埋めるわ」

キョン「付き合う前からほとんどハルヒだぞ」

ハルヒ「ダメよ 全部私 これからおやすみ電話とメールよ」

キョン「ああ そうだな」

クビモト「チュッ——」

キョン「!!!」

ハルヒ「ふふ 愛の証」

キョン「か 鏡 鏡 オーノー」

ハルヒ「なによ不服」

キョン「み 見えるだろ」アセアセ

ハルヒ「諦めなさい 浮気するキョンが悪い それに洗濯機のニーソでバレるわ」

キョン「ニーソは言い訳出来るだろ 水溜りやら川で遊んだって」

ティーシャツアゲー チュ——

ハルヒ「ふふ 諦めなさいって」

キョン「はああ…… 実は俺もハルヒのオツパイに付けたぞ／＼」

ハルヒ「いやらしー／＼」

キョン「しかしだ俺のは俺とハルヒしかわからない」

ハルヒ「ん」

キヨン「今から家族でご飯だぞ」
ハルヒ「あ」

妹「二人ともーご飯だよー」

ハルヒは身だしなみを整えてる 二人でリビングに着いた 親父も帰って来たよう
だ ビールを飲んでる

キヨン父「ところでハルヒちゃんは将来を考えてるのかな 就職とか進学とか」

ハルヒ「特にないですけど大学を考えてます」ニコッ

キヨン父「ハルヒちゃんは成績いいの？」

キヨン「いいぞ」

ハルヒ「それなりです」ニコッ

キヨン父「良かったな 家庭教師だ」

キヨン母「大学行けるかしらねキヨン 心配だわ」

キヨン「俺はなかなか馬鹿だぞ」

ハルヒ「なんとしても良い大学に入れるぐらいに鍛えてあげるわ」キリッ

キヨン母「良かったわハルヒちゃんが居てくれて」

キヨン「大学行っていいの？」

キヨン父「なんで？」

キヨン「金掛かるだろう」

キヨン父「大学行かせる事は想定内だ」

その後はありふれた世間話だ 泊まってけだの 遅くなる前に送ってけだの まあ

制服ないからな

晩飯を終え 部屋で一人ポオーとしてた 現実味がない ハルヒは後片付けを手

伝つてるようだ

ガチャ

ハルヒ「ダッコー」

ナデナデ

ハルヒ「お母さんにね 付き合ってるのって」

キヨン「そうか」

ハルヒ「ハルヒちゃんて良かったって いつでも来なさいって」

キヨン「良かったな」

ハルヒ「来週も来るわよ／＼／」

キヨン「ああ」

ハルヒ「お父さんに初めて会ったわね」

キヨン「そうだな」

ハルヒ「将来を聞かれたね ふふ」

キヨン「そろそろ行くか」

ハルヒ「いやー」

キヨン「制服ないだろ それに人生は長い」

ハルヒ「帰れって事ね」

キヨン「仕方ない事もある」

自転車を押しながらハルヒを送っていく ハルヒは歯ブラシやコップが必要ねと言っている

普通の可愛い女の子だ 夏休みのループも本当にハルヒかと思うぐらい普通の女の子だ

キスをして家路につく

1:00ごろおやすみメールをして寝た

次回は学校だ

次の日の学校

学校

キヨン「おはよ」

ハルヒ「おはよ」

指定席に着く いつも通りだったが みんなの視線がチラチラ気になる
なんでだ？ こつちを見てひそひそしてる気もする

キヨン「なあハルヒ 俺の顔になんか付いてるか」

ハルヒ「顔には付いてないわよ」

キヨン「おおそうか」

気のせいか

キヨン「ところでハルヒ」

ハルヒ「ん」

キヨン「私服いつも違うよな」

ハルヒ「そうかもね」

キヨン「金どうしてるんだ？」

ハルヒ「お小遣いよ ほとんど通販で思ってるより 安いわよ」

キヨン「へー そうなんだ そのお金貯めて温泉でも行こうぜ 節約の貧乏旅行だ」

ハルヒ「いいわね それ」

キヨン「オゴラサレテビンボウ」

ハルヒ「ふふ じゃ自転車で行こう」デレ

周りからの視線を若干感じる

ハルヒ「あと昼休み 一緒にお弁当食べましょ」

キヨン「ああわかった」

ガラガラ セキニツケー

体育の授業 別クラス

俺は簡単な事を忘れていたようだ きつと可愛い彼女が出来て浮かれていたんだ

谷口「キヨキヨン そうかキヨン 男になつたんだな」

キヨン「なにがだ あとみんなも見過ぎだ」

谷口「いやだってよ 首にキスマーク 上半身にキスマーク 見せつけ過ぎだろう

よ

キヨン「……………」

俺は冷静に素早く上着を着て 夏なのに長袖の体育着も着た 恥ずかしい

谷口「相手は誰だ 涼宮か？ そうかそうか」

国木田「いつから付き合ってたんだい？ 驚いたよキヨン」

勝手に決めるな ヒソヒソするな 合っているがな

一同パチパチ ナンパスルゾー キヨンニツツケー

谷口「これから国木田 二人つきりで弁当だな」

国木田「寂しいね 二人ともお幸せに」

俺はシカトを決め込んだ

忘れてた あー忘れてた はあーあ 思春期だぞ

学校つまり噂の伝達とは速いもので 瞬く間に全員に知れ渡ってるようだ

昼休み 二人で教室を出ると ヒューヒューとか言われた

ハルヒの顔を見る 全然気にしてない本当にジャガイモくらいに思ってるんだろう

部室に着いた

キヨン「ハルヒよ キスマーク案の定だったぞ」

ハルヒ「ふふ 効果覲面ね／＼／これでこの学校にキヨンに手出す者は居なくなつた

わ

キヨン「恥ずかしいんだが」

ハルヒ「諦めなさい それより」

チュツ ダキツ

ハルヒ「あーん 美味しい？私／＼／」

キヨン「ああ美味しい／＼／」

ハルヒ「暑いわね 裸になりたいわ」

キヨン「だダメだ学校で」

ハルヒ「ふふ冗談よ 襲われるしね」

キヨン「誰にだ」

ハルヒ「キヨンに」

キヨン「俺以外の前でそんな発言するなよ？」

ハルヒ「当たり前じゃない 変態じゃないんだから」

キヨン「それは良かった」

ハルヒ「お弁当食べましょ」

キヨン「ああ」

モグモグ アーン モグモグ チュ

ハルヒ「あと20分もあるわね ん」

ギュー ダキ チユツ チユツレロレロ

ハルヒ「だっこ」デレデレ

キヨン「見られたらマズイって」

ハルヒ「誰も来ないわよ」

キヨン「しようがないな」

チユツレロレロ チユパチユパ

ハルヒ「いや／＼キヨンつたら く くび はあはあ んもおー 昨日

ああんなに だ 出し&;& a m p ;,; c " & a m p ;,; n k k ! \$, n c はあはあ

今度は私の番よ」／＼／＼／

チユパチユパ カプチユー チュー レロレロ

ハルヒ「内もも ささわ& a m p ; c & a m p ; & a m p ; . & a m p ; & a m p ; :

／＼|@:@:& a m p ; ; はあはあ」

目とろーん

ハルヒ「もおう 我慢よ キヨン」

キヨン「そうだな」

チユツカプ チユツ

ハルヒ「こ これ以上はダメよ 教室戻りましょう」デレデレ

冷やかな視線を浴びつつ教室に戻る

午後の授業中はムラムラしていた はぁー中途半端に

これ 毎日はキツイだろ こんなのに 二人つきりになつたら ダッコしに来る 好きさ 可愛い しかしだ、17歳の俺には刺激が強過ぎる

制服姿のハルヒも凄くエロい事に気づいた

内腿を触った時なんか理性飛ぶとこだった 危ない 危ないぞー

ああ これもこんな可愛い彼女を持った世界で唯一俺だけの憂鬱だな

ハルヒの性欲 どうなんだムラムラしないのか

俺はムラムラしてるぞ ハルヒさぁーん

ちよつと待てよ 先週までこんな事考えてなかつたぞ ハルヒが悪い ハルヒが

ハルヒが

ん メール ハルヒからだ

From ハルヒ (ちゃんと授業聞いている?)

From キョン (聞いてない)

From ハルヒ (ダメよ)

From キョン (ハルヒの事で頭がいっぱいなんだよ)

From ハルヒ（アホキョンね）

後ろを振り返らない 振り返ると女神が居る

このままじゃマズイ

今日の団活出ないで帰るか もう顔見れない

だが 心配するだろうし 家に来そうだしな

性欲以前の問題だな

大好き過ぎるところなるのか

それとも時間が解決してくれるのか

賢者モードの回復が速い

毎日だとハルヒもきつと嫌だよな

後ろからツンツンしてくる やれやれってならない 抱きつきたい 見れないぞ

どうしよう

ドキドキする 俺 病気だろ 恋の病なのかこれが

ツンツンが激しい

ハルヒ「なんで無視するのよ」

キョン「してないさ」

ハルヒ「してるわよ」

キヨン「ちよつと授業中だからだ」

ハルヒ「聞いてないんでしょ　ねえ私とチューしたい？　／＼／＼したいわよね？」

キヨン「授業中だ」

ハルヒ「ふんっ　知らない」

キヨン「あ　あとでな／＼／」

ハルヒ「ふふ　したいんだ　いやらしい」

キヨン「キス自体はいやらしくないだろ」

ハルヒ「キヨンのチューはいやらしいわよ」

キヨン「ハルヒのがだよ」

ハルヒ「二人つきりになりたいわね」

キヨン「二人つきりになったらなにするんだ？」

ハルヒ「なんだと思う？」　ニヤニヤ

教師「そこ　授業中だぞ」

ハルヒ「チッ」

Fromハルヒ（当てたら言う事聞いてあげるわよ♡）

もうSEXのことしか考えれない　SEXしたい

ハルヒとSEXがしたいんだ

それ以外になにがある さっきの会話の流れからして

いや待てよ フェイトか ハルヒもそんなのわかりきった事 聞いて来ないよな

SEXって言って正解じゃない気が…… 最悪嫌われるな はて どうしたものか

Fromハルヒ(まだ?すぐわかるでしょ)

まあ SEXではなくHか? いやキスカ それともチューか 悩ましい すぐわ

かるって言うが 意外に…… 他に二人つきりは…… ないよな?

Fromキヨン(考え中だ)

キーンコーンカーンコーン

ハルヒ「部室に行くわよ 答えなかったから罰ゲームね」ヒソヒソ

キヨン「ヒントが少ない」

ハルヒ「ふふ 簡単よ」

ガチャ

みくる「お茶用意しますねー」ニヤニヤ

古泉「お二人揃って登場ですか」ニヤニヤ

ハルヒ「同じクラスだからよ」

明らかに噂を聞いて知ってます

はいはいって表情をしてやがる

とは言うものの、特に聞かれる訳でもなく、古泉と将棋をしていた。ハルヒはネットサーフィン中のようだ。検索キーワードは、温泉、自転車かな。

すると古泉が突然

古泉「涼宮さん、今週の不思議探索ですが、バイトが入りまして、お休みを頂きたいのですが、よろしいですか？」

ハルヒ「バイトなら仕方ないわね、キョンと違って、古泉君の貢献度は素晴らしいから、いいわよ」

古泉「ありがとうございます」

みくる「あのーそのー涼宮さん、わ、わたしも、その日に用事がありました、お休みします」

ハルヒ「あら、珍しいわね、みくるちゃんまで、まあ、いいわ、用事じゃ仕方ないわね」

ユキは「？」

長門「私も行けない」

ハルヒ「え？なんで？」

長門「予定がある」

ハルヒ「なんの？」

長門「予定」

ハルヒ「よ 予定なら仕方ないわね」

長門「そう」

ハルヒ「困ったわ キョンと二人で不思議探索か」

古泉「涼宮さん 困る事があるんですか？」

ハルヒ「ふ 二人だと 効率が悪いし／／探索エリアが限られるからよ」

古泉「逆に普段と違って 新しい発見の可能性もありそうですよ」

ハルヒ「た 確かに そうね そうかもしれないわ キョ キョン 全力で不思議を
探すのよ」

キョン「やれやれ 今週も土日の休みなしか」

古泉「土曜日は不思議探索ですが 日曜日もなにかご予定が？」ニヤニヤ

ハルヒ「に 日曜日は べ 別に予定とゆうか な なにかをした訳ではないわ」
／／

古泉「?なぜ涼宮さんが お答えに？」

ハルヒ「ち 違うの なにかしら団長として行動してるのよ／／」

古泉「毎週? 二人で? 日曜日に?」ニヤ

ハルヒ「ちょ ちよつとキョンの家に用事があつたの」

古泉「なるほど 涼宮さんは 毎週日曜日に彼のお家にお邪魔してたのですね」

みくる「ふえー そうだったんですね 知らなかったです 二人でいつもなにしてるんですかー？」

ハルヒ「べ 別になにもしてないわ／／／」

こつちを見ながら古泉が

古泉「ところで その首の赤い痕は いかがしました」

ハルヒ「キョ キョンが言う事聞かないからツネットてやったわ／／／」

みくる「どんないうことなんですかー？」ドキドキ

ハルヒ「お 覚えてないわ」アセアセ

古泉「こんなに ハッキリ痕が残ってるのに 覚えてませんか ちよつと気になりま
すね」

ハルヒ「古泉君 気にする必要はないわ キョンの体の痕ぐらい」

古泉「か 体にもあるんですか？」

ハルヒ「首は体でしょ／／／」

古泉「体の痕もツネットたんですか？ 涼宮さんが？」

ハルヒ「か 体のは 知らないわ／／／」

古泉「通常 体には赤い痕なんてないですからね もしかしたら 彼の身に なにか

よからぬ事が！ これは手遅れになる前に 病院で診てもらいましよう」

ハルヒ「ダメ ダメよ 絶対ダメ キヨンの体なんて大丈夫よ 健康だわ」キリッ

古泉「涼宮さんは 彼の体が健康なのは なぜ御存知で？ まるで見ただかのように」

ハルヒ「み 見なくてもわかるでしょ？ 表情とか歩き方とかで」

古泉「なるほど 平日は学校と団活で 土曜日は不思議探索 日曜日は彼の家で 毎

日 彼を見てる涼宮さんにしかわからない事ですね 流石です」

ハルヒ「そ そうなのよ 私のおかげね キヨン 感謝しなさい」

みくる「しゅごいですー 涼宮さん」

ハルヒ「全くその通りね なにか奢って貰いたいわ」

おいおいおいおい ハルヒさん

墓穴しか掘ってないだろ BO KE TU アホなのバカなの

古泉の誘導尋問に乗り過ぎだろ 最後のなんてフローされてないぞ

フローどころか毎日一緒にラブラブですって ちよつと馬鹿にされてるぞ

それなのに奢ってだと 意味がわからん

あとなんで ハルヒが全て答えてるんだよ いいよ俺が適当にあしらうから

がつ もう手遅れ しかも しかもだ 中途半端に嘘付いてカウンター食らってん

じゃねーぞ

恥ずかしいんだが

あー恥ずかしい 恥ずかしい

ともあれ帰宅時間になった

帰ってもハルヒと電話をして おやすみメールをする

次回 ビックイベント 土曜日

土曜日

そんなこんなので土曜日になった ハルヒがいつも通りに早く居た
いつもより明らかに可愛い服装だ 思えばいつも可愛いがな

しかし、今日は可愛いというより 大人びた 美人と言う方が合ってるかもしれない
ミニスカではなく タイトなパンツ姿でここまで印象が変わるとは
手にはちよつと大きなバツクを持っている

ハルヒ「お おはよ キョン 遅いよー／／」 テツテツテツ

キョン「ご ごめんな いつもよりは早いと思うが それよりちよつと隈があるな
寝れなかったのか？」

ハルヒ「それよりも言う事があるんじゃないかしら サイテー」 デレデレ

キョン「そ そうだな うん 似合ってるぞ」

ハルヒ「そ そう？ うれし 楽しみで寝付けなかったの」

キョン「そうだな 実は俺もだ」

ハルヒ「なんだーキョンもなのね 一緒ね／／」

キョン「ああ」

ハルヒ「ねーキヨン もう出掛けた家族？」

キヨン「あ ああ もう出掛けたぞ」

ハルヒ「荷物置きに家に行つていい？」

キヨン「そうだな」

チリンチリン ニケツ ゴーゴー

ハルヒ「ね この前の二人つきりになつたらつての覚えている」

キヨン「覚えてるぞ」

ハルヒ「答えてよ」

キヨン「まだ解答が」

ハルヒ「もおー優柔不断ね」

キヨン「い いやだつてさー変な事言つて違つたら恥ずかしいだろ？」

ハルヒ「恥ずかしい事思い浮かべてたのね いやらしー」

キヨン「ち 違うぞ 断じて違う」

ハルヒ「むむ じゃ 思い付いたの教えてくれたら許すわ 罰ゲームなし」

キヨン「当てたら ハルヒに罰ゲームしていいのか？」

ハルヒ「い いいわよ 嫌な事じゃないなら」デレデレ

キヨン「特に決めてないけどな」

チユー

キヨン「転んじやうつて」

ハルヒ「キヨンとなら別に転んでも平気よ」

キヨン「ハルヒの綺麗な肌に傷ついたらダメだろ？」

ハルヒ「ふふ 大好き」ダキ ギュ

キヨン「危ないつて」

ハルヒ「ねー答えてよ」

家 到着

キヨン「よいしよ」

ハルヒ「きや」

何も言わずにお姫様抱っこをして家に入った

キヨン「お茶でも飲むか」

ハルヒ「キヨンの口に含んで飲ませて／／／／」

キヨン「やれやれ」

ハルヒ「んっ んっ 美味しい もっと／／／」

目とろくん

キヨン「荷物多くないか？」

ハルヒ「そんなことないわよ それより二人つきりになったわね／＼」
キヨン「そ そうだな」

何を言わせたいんだよ

ハルヒ「キヨンが考えた事楽しみだなー」

キヨン「怒らない？」

ハルヒ「ん」

なおダツコ中だ ダツコ依存だ

キヨン「うん あれだ チューとダツコとイチャイチャ あとその日だ／＼」

ハルヒ「わ」

キヨン「ご、ごめん ひいたか？」

ハルヒ「んん もうしようがないわね／＼」

チュー クチュ レロレロ サワサワ チュツ

キヨン「せ正解は？」

ハルヒ「ふふ 勉強でした」

キヨン「言い方 言うタイミング これは罠だ」

ハルヒ「ん 言い訳？」

キヨン「ち 違うが 恥ずかしいぞ やっぱり」

ハルヒ「エロキョンね 相手は全部私だもんね キョンの頭の中は私でいっぱい／＼

キョン「仕方ないだろ」

ハルヒ「ふふ 授業中そんな事考えてたんだ いやらしー」

キョン「いや だつてさー」

ハルヒ「罰ゲームよ」

キョン「ぐっ なんだ」

ハルヒ「今から この前より 激しく 優しく 私の事舐めて」

キョン「舐めるだけ？」

ハルヒ「ぜ 全部／＼／＼」

キョン「全部つて？」

ハルヒ「キョンの全部よ」 テレツ

その瞬間 頭のネジが飛んだ 優しくハルヒをベットに置き

貪るように 激しくキスをした

顔 首 巧みに上を脱がせてく

ハルヒはこの前よりイヤらしく 艶やかな声を大きく上げている

パンツも脱がせてあげる ハルヒの顔は真っ赤だ

下半身は内腿触っている 決してアソコはまだだ
 メインディーツシユは楽しみに取っておこう

ハルヒも俺の上を脱がせてきた もう二人とも言葉になつてない獣だ

俺のTシャツでハルヒの手首を後手に縛つた ハルヒは多少驚いたようだったが
 抵抗出来ないの で 腰や身体をモジモジ動かすばかりである

嫌そうではない

ハルヒに目隠しの打診をしてみた

ハルヒ「はあはあ 好きに、& a m p ; & a m p ; \$ \$ / @ / , h h k s i m n h
 & a m p ; & a m p ; ; 」

かろうじて話せる状態だ 制服のネクタイで優しく目隠ししてあげた

その間もハルヒは口で俺の身体を舐めてきて早くと言わんばかりだ

この前よりも全身を舐めまわす つま先までもだ

手ではハルヒの豊満な胸を驚掴みにし 乳首も引つ張つてる

腰の動きが凄い 浮く浮く

ハルヒ「キョン あア& a m p ; & a m p ; ; アソ& a m p ; \$ & a m p ; ; 触つ
 て 舐めて ああん」

まだだ内腿を激しく舐める アソコはちよつと掠る程度 お尻の穴も舐めてる 小

指の第一関節まで挿れてあげる 凄い反応だ

キョン「まだイツちやダメだよ 一回も」

ハルヒ「おお願いキョン が はあはあがま&p;:&p;:\$ \$ /! \$&a
m
p ; ;」

全身に仕返しと言わんばかりにキスマークを付ける

服で隠せるとこ全てにだ

その間も俺の指はハルヒのアソコ付近の横を執拗に触っている

我慢出来ないようだ 凄い垂れてくる アソコを触ってないのに指はネチャネチャ
だ

今度はお尻の穴を必要に舐めながら 両手で胸を弄くり倒してる

素晴らしいハルヒの喘ぎ声

これじゃアソコを触ったらすぐにイカれてしまう

そうはさせない

キョン「これが昼休みの俺の気持ちだ」

ハルヒ「はあhあd でも 学校 ; @&a m p :&a m p :\$ xつーー あんn」

キョン「これからは部屋でもイカせてくれるか?」

ハルヒ「キョンのいう&a m p ; @ / h a はあなんでも h k s はあ ききましゆ

だだkらおねがい」

キヨン「指と舐められるのどっちがいい？」

ハルヒ「にやなmつでもいい、d k f よ おおね j はい s」

ハルヒの脚を広げ

俺は俺のアソコを進入させた 先つちよだけで凄い声を上げ 腰を浮かせる

動き過ぎなので両手でハルヒの腰をホールドさせながら もうちよつと進入させた

3センチぐらいだろうか 前後に腰を動かす

クチュクチュとイヤらし音が出てるが ハルヒの喘ぎ声であまり聞こえない 腰を

動かしながら 気づいたら 半分ぐらい進入してしまった

凄く暖かくてヌルヌルだ ハルヒの手の拘束を外してあげた

腕を首に回してきて 抱き寄せられる 何かに当たった

まだ半分ぐらいだ

これが処女膜ってやつか 負けてたまるか ピストン運動が徐々に力強くなつてくのが分かる ハルヒは気持ち良さそうだが 眉をひそめて不安そうな表情もしてるよ
うに見える

クチュクチュグチヨグチヨ ブチツ

突破した感触が合った　ハルヒの悲鳴が聞こえたが　進んでしまった　全て入った　進入しきった

ハルヒとキスをしながらだ　涙が見えた　声が喘ぎ声小さくなつと思つたが　慎重に腰を動かす

徐々に美しい喘ぎ声が大きくなってきた　抱き合いながら腰を動かし続ける

気づいたらクリトリスも触っていた

ハルヒ「いつ　いち j s d むゆうよ l s k　きよ k s j つ k ん　イぐー」

全身をビクつかせていた　俺は全部ハルヒの中に出していた

吐息を吐きながら　涙目のハルヒとキスをした

目隠しはいつのまにか　外れていたようだ　未だに余韻を感じながら腰が動いてる
勝手に

抜いていない　グチヨグチヨと音が出ている

キヨン「このいやらしい音聞こえる？」

ハルヒ「ん／／／」

キヨン「気持ち良かったか？」

ハルヒ「意地悪されたの／／／」

ポカポカパンチ

キヨン「体力全開の時と思って」

ハルヒ「好き」デレデレ

チユー

キヨン「その痛かったか？」

ハルヒ「ちよつと でもなれたら………」
／／／／／／／／

キヨン「やばかったよハルヒの中」

ハルヒ「ふふ」

キヨン「我慢出来なくて出しちやった」

ハルヒ「今日だけよ もう／／／」

キヨン「ああ」

ハルヒ「キヨンHの時 全然ゆるーこと聞いてくれない／／／」

キヨン「すすまん」

ハルヒ「でもいいの 好き」デレデレ

キヨン「学校でHはヤバイな」

ハルヒ「あ当たり前よ でも我慢出来なかったら言つてよ 浮気されても困るから

口でしてあげる／／／」

キヨン「浮気はしないさ でも二人つきりに爆発してしまうかも」

ハルヒ「そそれは わ私も気持ち良かったケド」

キヨン「どれくらい」

ハルヒ「言葉にするの難しいわね／＼／＼」

キヨン「そろそろハルヒのアソコから 俺のアソコを抜いていい？」

ハルヒ「わわからないわよ 初めてなんだから」

又ポツ テイツシユフキフキ

ハルヒ「もおー今日も犯された」グテー

キヨン「ハルヒが可愛過ぎるから」

ハルヒ「可愛くなかったらしてない？」

キヨン「してる」

ハルヒ「なによ」

ポカポカパンチ

キヨン「また一緒にお風呂入ろうな」

ハルヒ「ん もう動けない 責任取って／＼／＼」

キヨン「ああ」

ハルヒ「ああと 今日はまだダメよ」

キヨン「つて言われると」

ハルヒ「だ　ダメよ　血が出てたじやない」

キヨン「中じやなかつたらいいのかな？」

ハルヒ「し　知らないわよ／＼／」

キヨン「じゃ　続きは部屋だな」

ハルヒ「でも現実的に後処理大変よね」

キヨン「ん　全部飲み込んでよ」

ハルヒ「む無理よ　あの量は」

キヨン「ごつくんって」

ハルヒ「無理だつて　制服に垂れたら大変よ」

ナデナデ

キヨン「そうだな」

ハルヒ「でもキヨンの為なら頑張っちゃうかな／＼／」

キヨン「流石に罪悪感が」

ハルヒ「スイッチ入ったキヨンは待つてつて言つても　出されちゃうから罪悪感より

も性欲が勝るわよ」

キヨン「ハルヒがスイッチ入れるんだがな」

ハルヒ「そそんなつもりないわよ／＼／」

キヨン「だからなハルヒ 可愛過ぎなんだって」

ハルヒ「見た目が？」

キヨン「デレデレ具合が」

ハルヒ「デレデレなんかしてないわよ」

キヨン「仕草 言動がねー」

ハルヒ「馬鹿にしてるわね」プクー

キヨン「愛してるのさ」

ハルヒ「そそんなにデレデレだった？」

キヨン「凄いぞ付き合ってから」

ハルヒ「あらヤダ 回り気づてるかしら」

キヨン「そりやもう」

ハルヒ「もうデレデレしない」デレデレ

キヨン「ああ」

チュ

ハルヒ「もしよ もし ユキやみくるちゃんがしてあげるって言われたら する？

キヨン「するってなにをだ」

ハルヒ「H な事よ」

キヨン「する訳ないだろ」

ハルヒ「だってーキヨン襲いそうなんだもん 我慢出来るの？心配よ」

キヨン「断じて大丈夫だ 一時の快樂でハルヒを傷つけるくらいなら死ぬ事を選ぶぞ」

ハルヒ「ん」

キヨン「俺には愛する彼女が居るからな」

ハルヒ「せ生理の時は どうするのよ」

キヨン「口？」笑

ハルヒ「もお馬鹿」

キヨン「ハルヒもスイッチが入らなきゃしないさ」

ハルヒ「きよ今日別にスイッチ入ってなかったわよ／＼／＼」

キヨン「全開のスイッチONだったぞ 特に目がとろーんってなってたぞ」

ハルヒ「嘘よ 私そんなHな子じゃないわ」

キヨン「ああ そーゆう事にーしよう」

ハルヒ「もしよ」

キヨン「また もしもシリーズか」

ハルヒ「もし わ 私がキヨンのアソコを啜えてる時にみくるちゃんに変わったら

？」

キヨン「朝比奈さんが失神するだろうよ」

ハルヒ「みくるちゃんは私なみにキヨンの事が好きとする スイッチONとする」

キヨン「ぐっ それは」

ハルヒ「ほらあー浮気よ浮気 これだから男は サイテー」

キヨン「まあ流石にありえなさ過ぎるが冷静に俺にはハルヒが居るからごめんなさいって」

ハルヒ「どーかしらね キヨンなかなか獣だからなー 理性保てるかしら」

キヨン「ああ大丈夫だ」

ハルヒ「イク10秒前だったら？」

キヨン「有無を言わさずトイレ いや 机に いや 堪える 堪えて マイワイフに出す」

ハルヒ「受け止めないわ」

キヨン「途中までハルヒなんだろ？ そしたらハルヒもスイッチ入ってるから受けとめてくれるさ」

ハルヒ「私を見つけられなかったら？」

キヨン「居るさ ハルヒは俺の側に居るから大丈夫」

ハルヒ「まあいいでしょう」

キヨン「勝手な妄想の浮気は大丈夫って結論だな」

ハルヒ「それほどキヨンが激しくて／＼／＼」

キヨン「ハルヒはどうなんだ 浮気」

ハルヒ「嫌？」

キヨン「当たり前だ 相手を殺してやる 理由も聞かん 聞く耳もたん 絶対許すもんか」

ハルヒ「私はその時殺すの？」

キヨン「んー縛って 拘束だな お尻ペンペン」

ハルヒ「ふふ キヨンは許してくれそう」

キヨン「でもたぶん 別れると思う」

ベシッ

ハルヒ「一生 側に居るって言ったじゃない サイテー」

キヨン「ハルヒが浮気したらの話しだろ」

ハルヒ「そうでした ふふ」

キヨン「風呂とシャワーどっちがいい？」

ハルヒ「湯船に浸かりたいわ」

キヨン「沸かしてくる」

ハルヒ「一人にしないで」ダキッ

キヨン「すぐさ」

フルチン オユジャー　　テツテツテツ　ダキッ

ハルヒ「／／／／」

キヨン「お茶でも飲もう」

ハルヒ「うん♡」

キヨン「午後からどこ行く？」

ハルヒ「そうね　晩ご飯のおかずを買いに行くけど……」

キヨン「地味にボーリングしたい」

ハルヒ「意外ね」

キヨン「まだ団活でもやった事ないだろ？」

ハルヒ「それもそうね」

キヨン「ストライク出すぞ」

ハルヒ「200点ぐらい取りたいわ」

キヨン「さてとお風呂行こう　おいで」

ダキッ　チャプーン

キヨン「ハルヒ 罰ゲームだ」

ハルヒ「えーまた」

キヨン「なんの分の罰ゲームだっけ？」

ハルヒ「覚えてない」

キヨン「確かにそうだな」

ハルヒ「じゃ なしね」

シャンプー アワアワ ゴシゴシ スベスベ

ハルヒ「今日は私が洗ってあげるわ 襲われるし／／／ チュツチュ ゴシゴシ

チャプーン

キヨン「昼ごはんは外で食べよう」

ハルヒ「そうね お腹空いてきたわ」

フキフキ ドライヤーボオーー ナデナデ

ハルヒ「外暑そうね スカートにしようかしら」

キヨン「ボーリングの時見えないか？」

ハルヒ「チラッとキヨンに興奮を覚えさせるわ」 テレツ

キヨン「ノーパンだ」

ハルヒ「え」

キヨン「スカートにノーパンにしよう」

ハルヒ「い 嫌よ 誰かに見られたら」

キヨン「二人で居れば大丈夫さ」

ハルヒ「キヨ キヨンはそうゆうのが好きなの？」

キヨン「これは あれだ 男子の夢かもしれない ましてや ハルヒみたいな 絶世の美女が行う事で非日常的だ だってあり得ないだろう？ それを出来るのが俺だけってのが…… まあ半分冗談だ」

ハルヒ「他のカップルもしてると思う？／／／」

キヨン「してないと思う」

ハルヒ「キヨ キヨン してもらいたい？ その ノーパンで出掛けて ボーリングも／／／」

キヨン「うむ」

ハルヒ「す 素直ね／／／ そ そしたらもつと好きになる？」

キヨン「好き具合は変わらん」

ハルヒ「は なんでよ」

キヨン「これ以上どうやって好きになるんだ 既に全開だ」

ハルヒ「そ そうなのね／／／」

キヨン「しかし 帰って来た時の興奮度が跳ね上がる」

ハルヒ「か 帰って来ても Hするのね／／／今日はダメよ／／／」

キヨン「する可能性が大だ 嫌だったらもちろんしないさ また今度」

ハルヒ「し しないなんて言つてないわ／／／ 興奮するのね？ で でもおー」

キヨン「ああ しかしだ 他の人には絶対バレてはならない たでさえ可愛いハルヒがノーパンだったら世の中の男がハルヒを襲う恐れがある ノーパンでなくてもだが」

ハルヒ「ふふ 返討ちよ そ それにキヨン」

キヨン「なんだ」

ハルヒ「真面目に結構変態な事言ってるわよ」

キヨン「仕方がない事だ」

ハルヒ「学校で私がノーパンだったら我慢出来る？」

キヨン「難しいな それは俺がさせたのか？ ハルヒの意思でノーパンか？」

ハルヒ「キヨンに意地悪する為に私がノーパンって告げるの」

キヨン「無理だな 理性が飛ぶ 耐えれそうにない」

ハルヒ「教室でも？」

キヨン「冷静に休み時間を待つて ハルヒを部室に連れてく可能性大だ」

ハルヒ「Hね／／／」

キヨン「しようがないさ いいか ハルヒ お前は可愛いんだよ そして彼氏の言う事も聞くし 素直だし 最近Hだし いいか 世の中の17歳は100% 落とせる つかHする モテモテさ 俺の前のハルヒだったら そのぐらいの破壊力を持つてるんだよハルヒは 耐えられる奴なんて地球上に居るかな」

ハルヒ「そ そんなに 私は魅力的？／／／」

キヨン「付き合つた後のハルヒはな 魅力部門で優勝だ」

ハルヒ「じゃ じゃーキヨンが襲ってくるのは仕方ない事なのね？」

キヨン「そうだ しかも ノーパンっていう 無茶な要求にもノリノリだ 全く 俺の体は持たないかもしれん」

ハルヒ「ノリノリじゃないわよ／／／ ただキヨキヨンに喜んで貰えるなら 嬉しいじゃない／／／」

キヨン「そうゆうところもだ 性格まで優勝だ」

ハルヒ「／／／／／」

ギュー ダキツ チュ チュー ネチュネチャ レロレロ チュ トローン

ハルヒ「キヨンの為だつたらなんでも出来るわ／／／」

ナデナデ

キヨン「さて着替えて出発だ」
ハルヒ「いざ修羅へー」

土曜日セカンド

チリンチリン キキイー

ハルヒ 「まずお昼ね／＼／」

キヨン 「そ そうだな」

ハルヒ 「ここ美味しそうね」

キヨン 「入ってみるか」

カランコロン

ハルヒ 「わ これにする」

キヨン 「早いな 俺はあえてのラーメンにするかな」

ハルヒ 「わ」

キヨン 「どうした？」

ハルヒ 「カップル限定パフェだつて」

キヨン 「注文出来ないんだが 恥ずかしくて」

ハルヒ 「体力回復の為に糖分摂取よ」

キヨン 「体力何に使ったんだ？」

ハルヒ「もう 知ってるくせに」モジモジ

キヨン「そうだったな にしても暑いな」

ハルヒ「そうね 汗だくだわ」

キヨン「そのうなじに汗ばんだのも 色っぼいぞ」

ハルヒ「キヨ キヨン 思った事言い過ぎよ／／」

キヨン「ハルヒも素直だから 俺も素直になろうと思ってる」

ハルヒ「素直なキヨン好き／／」テレツ

キヨン「うなじもってことは…… アソコは」ヒソヒソ

ハルヒ「／／／／／／／／」

キヨン「うむ良い表情だ」

店員「ご注文 お伺いします」

ハルヒ「この3点 お願いします」

店員「かしこまりました パフェは食後で宜しいですか？」

ハルヒ「ええ それでお願いします」

ペコリ

ハルヒ「キヨン あの店員見てたでしょ」

キヨン「見てないさ」

ハルヒ「可愛い人ね まあキヨンが見るのもしようがないわ でもダメよ私以外見
ちやダメ」

キヨン「見てないさ ハルヒしか」

ハルヒ「嘘よ 鼻の下伸ばしてたわ」

キヨン「あり得ないな 見たとしても なんとも思っていないさ」

ハルヒ「お仕置きを考えとくわ」

キヨン「おい ハルヒさん 信じてくれー」

ハルヒ「これからの言動次第ね ふんっ」

店員「ご注文のお品をお持ちしました」

ハルヒ「美味しいわ」

キヨン「ああ」

モグモグ モグモグ パフェモキター

ハルヒ「キヨン あーん」

キヨン「パフェも美味しいな」

ハルヒ「ふふ 美味しいわ 私とどっちが美味しい？／／／／」

キヨン「そりゃハルヒだろ」

ハルヒ「迷がないわね」

キヨン「パフェ高いな 温泉が遠のく」

ハルヒ「でも 今日はずっと二人きりだから特別よ／＼」

キヨン「ノーパンも特別」ニヤニヤ

ハルヒ「え えっちな事しないでよね／＼」

キヨン「正直 今日 Hすると思った？」

ハルヒ「H は そのー イチャイチャはすると

お 思ったケド／＼」

キヨン「本当は？」

ハルヒ「覚悟してた／＼」

キヨン「楽しみにしてた？」

ハルヒ「そ それ以上に二人つきりになれる事が楽しみだったわよ／＼」

キヨン「そうだよな で でも 今ノーパんだぞ 想像した？」ヒソヒソ

ハルヒ「ツーーーしてないわよ／＼」

キヨン「可愛いし 嬉しい」

ハルヒ「本当に 本当にキヨン嬉しい？嬉しいなら毎日しちやおつかなー／＼」

キヨン「ダメだ 特別な日のみとする」

ハルヒ「そ そうなの？キヨンに任せるわ」

キヨン「俺の理性が：：日常生活に支障が出る 間違えなく」キリツ

ハルヒ「ドヤ顔でなに言ってるのよ」

ボーリンググジョー

ハルヒ「これが私の実力 トリヤツ」

キヨン「おーー」

ハルヒ「見てた？」

キヨン「ずっと ハルヒを見てるよ」

ハルヒ「見えた？／／／」

キヨン「意外に見えないぞ」

ハルヒ「見たい？／／／」

キヨン「ああ 凄く」

ハルヒ「帰ってからのお楽しみよ／／／／」

キヨン「ノーパンってどんな気持ち？」

ハルヒ「教えない／／／スースーするわ」

キヨン「ちよつとだけ触っていいか？」

ハルヒ「だ　ダメよ　ば　バレたら／／／」

キヨン「なに空いてるさ」

谷口「あれ　キヨンと涼宮じゃないか」

キヨン「おー谷口　ボーリングか」アセアセ

谷口「まさか　隣のスーパーに用があつてな」

キヨン「おおそうか」

谷口「どれどれ　せつかくだから　運動神経抜群の涼宮と彼氏のキヨン君の投球でも

見てくかな」

ハルヒ「ふんっ」

谷口「なんだよ　いいじゃないか」

ハルヒ「用がないなら　さっさと行きなさい」

谷口「ちえー　冷たいな　キヨン以外に」

ハルヒ「ふんっ」

谷口「じゃあな　二人とも　お幸せに」

キヨン「ああ　学校で」

ハルヒ「はあー　心臓に悪いわね」

キヨン「間違いなく 見られたら言いふらされるな」ヘラヘラ

ハルヒ「もう 他人事じやないのよ」プク

キヨン「じゃちよつとだけ」

ハルヒ「キヤ ちよ ちよつと キヨン もう もうダメよ」

クチャ ネロー

キヨン「凄く興奮した」

ハルヒ「／／／／／／／／／／」

キヨン「これ以上は理性が飛ぶから辞めところ」

オシリ サワサワ

ハルヒ「も もおう 次はキヨンの番よ／／／／／」

ボーリングオワリー

ハルヒ「あー疲れたわ ベタバタ」

キヨン「そりや4ゲームもしたからな しかも本気」

ハルヒ「いつでも私は全力よ」

キヨン「Hもか？」

ハルヒ「と 当然よ／／／／／キヨンに全力」デレデレ

キヨン「晩ご飯はなにしようか」

ハルヒ「キヨンの食べたいの作るわ」

キヨン「あえての鍋だな キムチ鍋」

ハルヒ「夏に？」

キヨン「汗かいて風呂入るの気持ち良くないか？ あと、滅多な事じゃ夏に鍋食べな

いし 思いついたぞ」

ハルヒ「じゃ 決まりね 長ネギはあつちかしら」

キヨン「ハルヒのキツチン楽しみだ」

ハルヒ「疲れて 料理出来るか心配だわ」

キヨン「なにで？」

ハルヒ「ボーリングで でよ／／／／」

チリンチリーン ガチャ

ハルヒ「よいしよつと 無事到着うー」

ゲンカンガチャ

ハルヒに後ろから抱きつき 首元に痕を付けないように吸う 舐めまわす 口も奪

う

ハルヒ「キヨ キヨン れ いぞ, n k k, k @ & a m p ; ; & a m p ; ; @ h \$ & a

m p ; ;」

口を奪いながら 右手で胸を揉み 左手はハルヒのアソコを弄る

ハルヒの声 喘ぎ声が大きくなってくる

汗なのかはわからないが 既に濡れている

ハルヒはクリトリスが弱いのはリサーチ済だ

アソコから溢れ出る 愛液で クリトリスを刺激する

身体がビクンビクンとして 愛液もじわーつとなる

崩れ落ちそうになる もうイッたのか？

しかし、俺がしっかりと抱いてるので 立ったままだ 靴も履いたままだ

キヨン「ハルヒ 鏡を見てごらん」

ハルヒ「キヨ・& amp ;つてん j s k h あはあ∴& amp ;へ へやへくで」

ハルヒと鏡で目があつた それからも後ろから 執拗に愛撫を続ける

ハルヒの両手を鏡に押し当てて 俺のアソコ後ろから挿入した ゆっくりだった

が すんなりと全て入る 腰を前後に動かす

キヨン「痛くないか？」

ハルヒ「き 気持 t y h s いい” & amp ;@ ああん つも い” t a あばかり n

な n \$! > ? ♪ — > > ? 」

痛くない事を確認して ペースを上げていく 凄い快感だ あえて 服は全て着た

まま

ハルヒの可愛い着衣のまま ノーパンの背後から攻め続ける

玄関 廊下 は部屋よりも ハルヒの喘ぎ声が響き渡る ハルヒを背後から抱き寄せ キスをする もちろん 腰は動き続けている

スカートでアソコは隠れている それがまた美少女を引き立たせる鏡に全身を仰け反らせてキスをしている姿は物凄く色っぽい エロいクリトリスを今度は右手で弄り始めた

声にならない何かを言っている 無視してキスをして口を塞ぐ

凄い声を出した 力が抜けてるのがわかる またイッたな

ハルヒのアソコから俺のアソコを抜く

こちらにハルヒを向けダッコした ハルヒはもう力が入らないようだ 再び挿入した

この体勢は比較的ゆっくりと攻めた ハルヒはなんとか喋れるようだ

ハルヒ「あああん 凄い の キョ キョン はあ…はあ」

ナデナデ パコパコ アンアン

キョン「気持ちいいか？」

パコパコ

ハルヒ「う う ん ももう にかい m も い t y イツ t の あん あ x s ん」
 キヨン「よく出来ました」

ナデナデ パコパコ

ハルヒ「こ このーた体勢 い” i ” ラブラ あああつ x ん」

キヨン「どこに出せばいい？」

ハルヒ「き きよん n お す k な h h ? もろ」

キヨン「はつきり言ってくれ」

ハルヒ「k きよんの すきな とこあつあつあん に いい y」

俺は ゆっくりと玄関の足マットに 挿入したまま ハルヒを置き 全開のスピー

ドで腰を動かす

これまでにないハルヒの喘ぎ声を聞きながら

ハルヒは腕をダラっと フローリングに垂らしてる 力が入らないようだ

俺は靴を履いたままのハルヒの足を高くあげ 腰の動きを前後させている

ピーンポーン

戦慄が走る 鍵は閉めている 家族は今日泊まりのハズだ では誰だ？ とつきにハ

ルヒの口を左手で塞ぎ 腰の動きは止めない もう止まらないさ

ハルヒは苦しそうにするが 嫌がってはいない
ピーンポーン …………… ブロロロロ

郵便かな？ 俺はハルヒの口を塞いだまま ラストスパートをかけた
ハルヒの身体が仰け反る ビクンビクンしている 無視して続けた ハルヒに出す
ぞと告げて

ハルヒの中にまた出してしまった

キヨン「はあ はあ はあ」

ハルヒ「あん もう はあはあ キヨ キヨンったら」

ナデナデ

ハルヒ「今日h も もうダメって はxはあ」

キヨン「めつちや疲れた」

ダキツ チュー チュツ

ハルヒ「す 凄かったの なんか はあはあ 頭も身体も ああん 力入らないわ
グデー

キヨン「ノーパンのパワーだな 部屋まで我慢出来なかった」

ハルヒ「も もうビツクリするじゃない／／」

キヨン「すすまんな」

ダツコダキー チユ

ハルヒ「ね ねーキヨン なんか垂れてくる」アセアセ

キヨン「そ そうか リビングに行こう」

テツシユフキフキ

ハルヒ「危なくスカートに はあはあ」

キヨン「分かるもんなのか？」

ハルヒ「う うん そうみたい キヨ キヨンがたくさん垂れてきたって／＼／」

キヨン「発言がどんどん過激に」

ハルヒ「彼氏の性癖みたいなの」

キヨン「こんな可愛い子になんて事を言わせてるんだ けしからんな」

ハルヒ「その彼氏はね どんどんHが過激になってきて 次はど どんな事させら

れるか ドキドキしちゃうの」

キヨン「うむ 気になりますな」

ハルヒ「わ 私も要求に応えてられるように心の準備してるの」

キヨン「なんと無約しい」

ハルヒ「そ その彼氏はね そのー アソコの毛はどういったのが好みか気になる

の」

キョン「それはどうしてかね」

ハルヒ「そ、そのーよく触られるし、舐められちゃうから邪魔なのかなって」テレツ
キョン「た、確かに。パンティからはみ出るの良くないな。し、しかしだな。そ

の彼氏は恐らくだが、ワレメの脇はあえてそのまま放置が好きらしい。身だしなみを
整えてる。絶世の美少女がだ。そこだけは自然のまま。なんて言うのかな。絶世の美
少女がそこを剃つてても普通の訳だ。しかしそこは手入れしてない。

そんな一面を見れるのは、世界一運の良い彼氏だけって事だ。他の奴が想像してた
らソコはきつと綺麗だろう。しかし実際は……」

ハルヒ「／／／／／／／／／／しようしゆる」プシュー

キョン「今度はお互いにアソコを舐め合いたって思ってるぞ。その彼氏」

ハルヒ「どどうやるのかしら。わ、わたし詳しくないの調教されつばなしなの。その
彼氏に／／／／」

キョン「うむ、自分色。自分だけ。だから調教されて覚えればいいぞ」

ハルヒ「そ、そーゆうもんなのね？その勉強した方がいいのかなって」

キョン「一人でだと、それは浮気だそうだ。なので一緒に見てみればいいぞ」

ハルヒ「じ、実は、そのね、彼氏の部屋探したけど、ないのよ。なのにその彼氏は
あんなことや、こんなことして、私の身体も頭の中も攻め立ててくるの」

キヨン「それは不思議だな 探索が必要だ」

ハルヒ「でも教えてくれないの」

キヨン「嫌われるのが怖いんだろう 付き合ってから浮気判定を受けるみたいだし」

ハルヒ「その晩 ずっと一緒に 二人つきりなら

二人つきりで見るといいみたいよ でも一人でさせないように 検索履歴とか チェックしているの」

キヨン「ほお 興味深いな」

ハルヒ「私も興味深いと思ってる訳なのです」

キヨン「それは その彼氏に喜んでもらうためなのかな？」

ハルヒ「そそうなの その彼氏は性欲が凄いの だから色んな事して ちよつとでも満足してもらいたくて それに浮気されたら困るじゃない」

キヨン「その彼氏は性欲で浮気するような奴じゃないと思うがな」

ハルヒ「わ わからないじゃない その彼氏の周りにはね 可愛い子多いのよ あの性欲じゃ 襲いそうで怖いよ」

キヨン「では自己犠牲にしても彼氏に満足してもらおうと なんと健気なんだ」

ハルヒ「でもね 彼氏と最近口するようになったんだけど そのね わ 私

も性欲 け 結構あるみたいなのよ イツても またイツちゃうの で でもねまた
 イキたくなっちゃうみたいなの そ それで わ 私って結構Hな子なのかなって
 き 嫌われたらどうしよつかて だ だから その彼氏がね キスして触ってくる
 と嬉しいみたいなのよ」

キヨン「うむ 続けたまえ」

ハルヒ「が 学校でも その彼氏は二人つきりになると 触ってくるんだけど 本当
 はもつとしてもらいたいの で でもね 激しいと 頭真つ白になって声出ちゃうか
 ら バレたら恥ずかしくて 彼氏にならもつと私の声聞いてもらいたいんだけど」モジ
 モジ

キヨン「その彼氏は幸せ者だな 学校だとツンツンして二人つきりの時にデレデレさ
 れるのが堪らないみたいだぞ」

ハルヒ「さ 最近 もう彼氏の前じゃ甘えん坊になっちゃうの 不思議ね／／／」

キヨン「今の会話でも十分その彼氏は興奮して元気みたいだぞ」

ハルヒ「じ 実は 私も もう濡れてるみたいで その弄ってもらいたいなって／／

／

キヨン「このまま我慢して ムラムラするのもありかなと言ってるぞ」

ハルヒ「む 無理よ もう さ 触ってよ ねえ／／／」

キヨン「その おねだりして 目がとろろんってしてるの堪らないみたいだぞ」

ハルヒ「も もう すぐ 意地悪されちゃうの／＼／」

キヨン「さて どこから攻めようかな」

ハルヒ「さ さつきはね まだ胸を舐められてないの

すぐ揉まれただけなの で でもね それも凄く興奮して アソコばつから責め

られたの 毎回パターンがちよつと違うのよ 前なんて 手も縛られちゃつて そ

それもね なんか凄くて ／＼／」

キヨン「なんと破廉恥な ではまず」

ソフアーニ「グデー

ハルヒ「きや」

レロレロ

キヨン「さあ 反対向きになって啜えてみなさい」

ハルヒ「こ こう？」

レロツ チュ ピチャペチャ レロレロ

お互い舐め合った 前回から10分も経ってない

キヨン「どうだ？ いいだろう」

ハルヒ「で でも恥ずかしいよ」

キョン「しかしだ イカないだろ？」

ハルヒ「／／／／うん うん」

キョン「これが賢者タイムだ」

ハルヒ「な なにそれ」

キョン「全てを悟り 性欲が満足してる状態だ」

ハルヒ「うん うん？」

キョン「ハルヒは興奮しがちだが まだもうちょつと時間が必要と推測する」

ハルヒ「な なんのですか？」

キョン「性欲がMAXになるまでだ」

ハルヒ「そ そうなのね でもMAXになるとすぐイツちやう／／／／」

キョン「それでいいのだ」ナデナデ

ハルヒ「キョンはどれぐらいでMAXになるの？」

キョン「いいかハルヒ良く聞け 男子高校生が恐らく回復力が全年齢でズバ抜けて速

い

ハルヒ「そ そうだったのね／／／通りでキョンったら」

キョン「しかしだ 相手次第だ 俺は相手が嫌がってたらしないぞ」

ハルヒ「そ そおかなー」

キヨン「な 嫌だったか」シクシク

ハルヒ「嫌じゃないわ／＼」

キヨン「よしハルヒも食べたし ご飯の用意でもするか」

ハルヒ「チャージね／＼」

キヨン「うむ」

土曜日サード

キツチンでハルヒが慣れた手付きで野菜を刻んでる

俺は 鍋を洗ったり なんか指示されて行動している さすが団長だ 二人で生活して こうゆうの良いなと思いつつ こんな事を思った

キヨン「なあ ハルヒ」

ハルヒ「ん」

キヨン「夜に出かけて つまり深夜徘徊で不思議探索はした事あるのか？」

ハルヒ「んーそうね あったけど あまりしないわ」

キヨン「なんでだ 夜の方がUFOとか見つけれそうだけど」

ハルヒ「そうなんだけど 親に夜は危ないって一応言われるし こうみえて女の子なのよ」

キヨン「そりやそうか 今日 あの丘の上の公園行ってみようぜ UFOは無理でも流れ星ぐらいなら見れそうだと思う」

ハルヒ「キヨンとならいいわよ でもあそこ真っ暗よね」

キヨン「懐中電灯持ってけば大丈夫だろう　それに肝試しっぽくて楽しそうだ」
ハルヒ「ちよつと怖いわね」

キヨン「意外だな」

ハルヒ「女の子ですもの」

キヨン「じゃ別の機会にしよう」

ハルヒ「ダメよ　行く」

いただきまーす　夏にキムチ鍋　お互い汗をかいてる

にしても美味しい　ハルヒが作ってくれたからか

凄いご飯も進む

ハルヒもいつもより食べてる気がする

この感じでお風呂に入るのが好きなんだよ

後片付けをしながら

キヨン「お風呂入るか　また」

ハルヒ「そうねーでも　出掛けるのよね？」

キヨン「それもそうだな」

ハルヒ「じゃ　帰ってきて一緒に入りましょう／＼」

キヨン「ああ21:00だし　外暗くなつたな」

ハルヒ「雰囲気出てきたわね」ワクワク

キヨン「さて行くか」

ハルヒ「あ あのね」モジモジ

キヨン「ん？まさかビビったのか」

ハルヒ「ち 違うのよ ノーパンのまま？／／／／／」

キヨン「ズキユン」

ハルヒ「声に出てるわよ」

キヨン「そのままだ」

ハルヒ「い 嫌だって言ったら」

キヨン「お尻ペンペンだ」

ハルヒ「そ それじゃ 行きましよう／／／」

チリンチリン アセダラダラ

キヨン「暗いな」

ハルヒ「暗いね」

テ ギユ

キヨン「懐中電灯忘れた」

ハルヒ「アホキヨンね」

キヨン 「とは言っても明るい時に来た事あるし

一応街灯あるし 俺に付いて来い」

ハルヒ 「きや 頼もしい」 ボウヨミー

キヨン 「はあはあ 今日結構へビーだな 階段がしんどい」

ハルヒ 「ダツコ♡」

キヨン 「聞いてたか俺の話」

チュ オネガイ デレデレ

ハルヒ 「ボーリングでちよつと 筋肉痛かも」

チュパ チュー

キヨン 「俺はボーリング以外でも」

ハルヒ 「詳しく聞いてあげるわ／＼」

頂上付近

キヨン 「!!! ハルヒ シー」 ヒソヒソ

ハルヒ 「どうしたのよ」

キヨン 「ベンチに人影がある」

ハルヒ 「え ほんとだ 怖いわね」 ドキドキ

キヨン 「ちよつとこつちだ」

ハルヒ「何してるのかしら まさか儀式」

キヨン「怖がってないな」

ハルヒ「不思議発見よ」

道脇で様子を見るようにしゃがんで静かにした

静寂の中声が聞こえてきた どうやら二人のようだ 人間だったので安堵したのも

束の間悟った

あんあん 喘ぎ声のようだ あんあん 気持ちいい

って

キヨン「あれって……」ヒソヒソ

ハルヒ「Hよね／＼／＼」

キヨン「ストレートだな」

ハルヒ「こつちに気づいてないようね」

キヨン「そ そうだな 凄いぞ」

ハルヒ「す スゴイ」ドキドキ

キヨン「他人のH初めてみるな」

ハルヒ「わ 私も初めてだったわよ／＼／＼」

そのまま何分か経った いやらしい声が静寂なものもあってよく聞こえる ハルヒを

チラツと見る

興味津々のようだ　しかもなにかモゾモゾしている

キヨン「どうした　ハルヒ」

ハルヒ「そ　そのおしっこ／／／」

そうか緊張からの安堵で尿意を催したか

キヨン「我慢だ」

ハルヒ「そ　それが出来そうなくて／／／」

キヨン「ダメだ　女の子が外ではしたない」

ハルヒ「……ぐすっ」

ナデナデ

キヨン「ほら我慢だぞ」

サスサス

ハルヒ「や　やめて　出そうなの／／／」

キヨン「だーめ」

恨めしそうにこちらを見上げて見てる　可愛い

ハルヒ「キャッ」

キヨン「しー」

ハルヒ「ん ん” ああん はあhあ」

俺はしゃがんだまま 気づいたらハルヒを抱き寄せ口を右手で声が漏れないように左手はまたもやアソコを触っていた 既にまたもや濡れていた
ハルヒに耳元で

キヨン「漏れそう？」

ハルヒ「だ ダメよ／／／これ以上は出ちやうはあhあ」モジモジ

キヨン「おしっこじゃないのでヌルヌルだぞ」

ハルヒ「／／／／／／／／／」

キヨン「本当は」

ハルヒ「気持ちいいのケド そのー／／／／」モジモジ

クチヨクチヨ

いくのとオシッコどっちが先かな 顔が赤いぞ 身体がピクピクしてよっぼど我慢
してるんだらう

キヨン「ハルヒがいい歳で漏らさないように指で蓋するな」

クチヨクチヨ

ハルヒ「ほ ホントに 出そうなの／／／」

キヨン「俺のいう事が聞けないか」

ハルヒ「き 聞くけど あ ああん n」

キヨン「ハルヒが声出さなかったら 汗だくのTシャツの中から手入れて乳首触れるんだぞ ん」

ハルヒ「／／／／／／／／／／」

キヨン「よしいい子だ」

そう宣言して乳首を優しく弄った すぐ勃起したのがわかる 外でしかも人の気配がある非日常はハルヒも興奮してるようだ 眉をよせて何か言いたそうだ

キヨン「どうした」

ハルヒ「も もうイキそう／／／／／」

俺はアソコを弄ってる手を止めた いや スピードを落とす

ハルヒ「な なんて」モジモジ

涙目でウルウル 身体を震わせながらこちらを見てくる

キヨン「あつちが終わるまで我慢だ」

すかさずキスをして口を奪い喋れなくした 身体の反応を見つつ コントロールす

る 大きな声を出さないか心配だが

ハルヒ「はあj——は キ キヨ ・んってば@・」

キヨン「良い子だから シーだぞ」

ハルヒ「む m んりよ／／／」

キヨン「じや 触つてあげないぞ」

ハルヒ「ご ご m んさい h あ ああ n」

キヨン「あつちの声大きくなってきたな」

ハルヒ「しゆ s g いね あん」

キヨン「まだ我慢だぞ」

ハルヒ「ん ん〃〃」

ビクンビクン ジャアアア

頭を撫でてやった 疲れてはいるが満足そうな顔をしている おしっこも凄い勢いで出ている

濡れないように膝の裏に両手をいれ 真つ赤なハルヒを持ち上げながら

キヨン「外でイッて おしっこ ほら まだ出てるぞ」

ハルヒ「み みないで／／／／」

キヨン「足元が凄い事になってきたぞ」

ハルヒ「……／／／／」グスン

キヨン「お置きだな」

ハルヒ「だ だつてー」

キヨン「言い訳か？」

ハルヒ「ごごめんなさい」

ヨシヨシ

キヨン「今晚はお仕置きだな」

ハルヒ「い 痛くしないでね／＼／」

ハルヒ「はあはあ 次はキヨンの番だよ」ヒソヒソ

キヨン「!!!」

ハルヒ「キヨンも声出しちゃダメだからね」

そう言うと、今度はハルヒが後ろから抱きついて Tシャツの中に手を入れ 乳首を弄りながらアソコも触ってきた さっきの逆パターンだ興奮する

ハルヒ「キヨンも濡れてる 啜えて欲しいでしょ／＼／」

キヨン「そ そうだな」

ハルヒ「でも まだダメ♡」

擦るスピードが上がってくる 今日何回目だ？その意思に反して俺のは元気のような
だ

野外プレーヤーの二人がこちらに向かってくる

どうやら事を終えて帰るようだ

ハルヒと目を合わせ、バレないように身を潜める
幸いな事に何事もなくその二人は見えなくなった

ハルヒ「凄くドキドキした」

キョン「そうだな」

ハルヒ「あれ元気なくなってる」

カプツ

おお 気持ち良い 凄い吸ってくる 吸い付くように頭を前後に動かしてる

何分か経つと一回口から顔を離した

その際にハルヒを木に寄りかかせて 右足を上げて 正面から挿入した 最初は上手く出来なかったが徐々にペースアップしていく

ハルヒも声が徐々に大きくなっていく

お互い見つめ合いながら

ハルヒ「ああん もう キョンったら／＼／＼」

キョン「今度はどこに出していい？」

ハルヒ「も もう n k あはあ m だめ」

チュ レロレロ チュー

今度は、ハルヒに木で身体を支えさせ 後ろから突いてあげる 気持ち良いとかソコって言うてる

その言葉が俺の俺が更に元気よくなる

「どんどんペースを上げていく またもや ハルヒの身体が脈打っている ビクンビクン 外で足場が悪いので立つのがキツイようだ

今度はダツコの状態で挿入した ハルヒの目の焦点があってない だらしくヨダレを垂らしている

舐めて綺麗にしてあげる

そのまま俺も絶頂を迎えた また中に出してしまった

ハルヒ「ももうらめ／＼／」

挿入したまま頭を撫でてあげる

キヨン「気持ち良かったぞ」

ハルヒ「わ わtしmだけではああん／＼／」

キヨン「身体は大丈夫そうか？」

ハルヒ「大丈夫のようにしてよ」プク

キヨン「ほら星が綺麗だぞ」

ハルヒ「そうだけど この状況ピンチよ」

キヨン「俺は問題ないが」

ハルヒ「わ 私に問題あるの」プク

キヨン「なんでだ」

ハルヒ「キ キヨンがまた中に出したから垂れてくるじゃない／＼／」

キヨン「しかしだな うん しょうがない」

ハルヒ「責任とって」

キヨン「ああ 俺も子育て頑張るぞ」

ハルヒ「違って今よ今」

キヨン「じゃもう中に出さない」

ハルヒ「そ そうじゃなくて そ それは別に良いけど いや良くないけど……」

キヨン「ポケットティッシュあるぞ」

ハルヒ「確信犯ね／＼／」

キヨン「おいハルヒ これからは毎日携帯しなさい」

ハルヒ「う うん／＼／」

キヨン「帰ったらお風呂か？」

ハルヒ「流石に汗とセイシが」

キヨン「ん？ なんだって」

ハルヒ「セイシよセイシ／＼／」

キヨン「指入れて洗ってあげるからな」

ハルヒ「も もう／＼／」

さて不思議探索も終わつたし帰るか

ガチャ ダツコー

キヨン「ダツコ好きだな」

ハルヒ「ん／＼／」

キヨン「よしよし お風呂を沸かそう」

ジャー

ハルヒ「キヨン」

キヨン「なんだ」

ハルヒ「今日Hし過ぎじゃない／＼／」

キヨン「確かに」

ハルヒ「ふふ」

キヨン「まさかの外でも」

ハルヒ「もう我慢してよ／＼／」

キヨン「汗だくのハルヒも可愛いかったぞ」

ハルヒ「暑過ぎよね」

キヨン「ハルヒの中も熱かったぞ」

ハルヒ「キヨンのだつて／＼／」

チャプーン　ゴシゴシ

ハルヒ「さて部屋戻つたら今日も閲覧履歴をチエックよ」

キヨン「ハルヒさんすっかり日付を確認してくれよ」

ハルヒ「な　なんでよ」

キヨン「付き合つてからはなにもしてないぞ」

ハルヒ「ふーん　内容が気になるわね」

キヨン「まあ見てないが」

ハルヒ「嘘よ　あんなことも　こんなことも私にしておいて」

キヨン「あ　ハルヒ　ハルヒは自分の事を私つて言うじゃん　それハルヒつて言つて

みて」

ハルヒ「い　嫌よ」

キヨン「試しにさ」

ハルヒ「しょうがないわね　キヨンが言うなら　でももうハルヒに意地悪しないで／

／／／

キヨン「それは難しいかな」

ハルヒ「ハルヒっばかり意地悪される さつきだって意地悪しようと思ったのに
……
／／

キヨン「ヌルヌルだったぞ」

ハルヒ「ハルヒはそんなHな子じゃないもん」

キヨン「最初から凄いやね」

ハルヒ「け 健康的なのよ キヨンのだってそうでしょ」

キヨン「うむ」

ハルヒ「何回も何回も ハルヒの身体をもて遊んで」

キヨン「しかも今日だけでも」

ハルヒ「そそうなのよ 学校が心配だわ」

キヨン「やっぱり嫌だか？」

ハルヒ「う 興奮しそうよね／／」

キヨン「バレたら 停学で 親にも言われ 出入り禁止だな」

ハルヒ「そのぐらいのことで私たちの愛わ壊れないわ」

キヨン「ハルヒ 意地悪どころかお仕置きするからな」

ハルヒ「いや 嫌よー なんて私ばかり／／」

キヨン「そうだな すまん お仕置きなし」

ハルヒ「それはもう考えたの？」

キヨン「ああ 漏らしちゃったイケない女の子にお仕置きが必要だと思い」

ハルヒ「ちよーあれば そのー／／／ 状況が／／／」

キヨン「お 言い訳か」

ハルヒ「ち 違うの／／」

キヨン「ハルヒの涙目とかも凄く可愛いんだよ」

ハルヒ「そ そんなハードな事なの？」

バスタオルでハルヒの身体をいやらしく触りながら

キヨン「さてねお仕置きだからな」

ハルヒ「き 気になるじゃない／／」

キヨン「そうだろ 部屋に戻ったらしてあげるぞ」

ハルヒ「またそうやって意地悪するのね／／」ドキドキ

キヨン「クセになりそうだ」

フキフキ ドライヤーボー

土曜日 時々お仕置き

さて、お仕置きだ もちろん嫌だと言ってはいるが期待もある感じだ

ハルヒを椅子に着座させ口にガムテープを貼る

不安そうな表情だ 風呂上りで色っぽい そしていい匂いだ これだけで…:

両膝を曲げ 股を全開に広げる 足はロープで椅子に固定する 手は肘かけに固定した

身動き出来ないように

身体を動かして不安そうな表情だ だが固定しているので動けない

パソコンを立ち上げネットから適当にエロ動画を流す これでいいやと巨乳の学園

もの ハルヒは目を大きく開き 最初は驚いてたようだが身体を振って反応している

嬉しくはないだろう

耳を甘噛みしてあげる 耳だけだ 眉を寄せる

強制的にAVを見せる んんゝとガムテープごしになにか言いたそうだ 今度は耳

を舐めてあげる ハルヒの身体は物欲しそうになんとか動こうとしているのがわかる

20分程度の動画だった 次に3Pを見せた 学校での高校生達の行為だ

耳を甘噛みしながら朝比奈さんとハルヒと俺だと気持ちいいかなと

反応が大きい 無視して甘噛みを続ける 首を舐めてあげる 耳の中もだ 身体が震えている

ハルヒの方がいつも激しくて凄いよって言いながら Tシャツをめくり部屋にあった洗濯バサミで下がってこないようにした

携帯のカメラをセットしてムービーの画面を見せた

抵抗しようともがいてる 携帯をパソコンの前に置いた 涙目だ

優しく耳や首を愛撫する 綺麗なピンクの乳首を優しく触る ムクつと2センチ程勃起した

気持ち良さそうだが続けない

耳元で触って欲しいか尋ねた 首を縦に振る

素直でいい子だぞと言いつつ丁寧に洗濯バサミで摘んだ 最初は痛そうだったがゆつくり引つ張つてあげたり戻す

身体が仰け反るような反応だ もちろん携帯で撮られている ハルヒに録画中だと耳元で囁く

快感もあるが嫌そうだし恥ずかしそうだ

身体を振る 洗濯バサミを乳首に挟みながら揉んであげる 学校で朝比奈さんと3

Pを想像してるのか？眉を潜め首を横に振る 嫌そうだ

洗濯バサミをゆっくり取ってあげた 視線はAVを見ている 必ず見るように指示した

すっかり見て偉いぞと褒めてあげる

耳元で乳首舐めて欲しいか？と聞くと首を縦に振る また洗濯バサミで摘んだ 身体が仰け反る

洗濯バサミと言っても バネを弱くしてる痛くない程度に ふふ 確信的に用意した

ほらハルヒが言う事聞かないから朝比奈さんとHしなきゃいけなくなりそうだぞ

ハルヒよ朝比奈さんを騙して部屋に呼んで3P出来たら許してあげるぞ ハルヒもあの胸揉んでみたいだろ

言う事聞いたら アソコ舐めてあげるぞ

頑なに首を縦に振らない 涙目だうるうるしている

足を優しく下から上に触ってあげる これだけでも凄い反応だ

目閉じちゃダメだぞと言いつつ 仕方なく全開のアソコに顔を近づけ 匂いを嗅ぎ 舌を出すフリをする なんとか身体を動かして当てようとしてくるが 吐息を当てるだけで触らない

凄く辛そうだ イジメている 興奮する

耳元で朝比奈さんの胸をハルヒが舐めながら

俺はハルヒの胸を揉んで弄って 乳首舐めてみたいな

ハルヒは執拗に朝比奈さんのを舐めながら

俺と抱き合い 後ろから色んな所を弄られて 首元にキスしたり舐められてるんだ

よ

朝比奈さんは羨ましいそうに見てる

俺はハルヒの足も舐めて

朝比奈さんはもちろん 椅子に拘束する 逃げるからなきつと

ハルヒに朝比奈さんの首を舐めさせる 俺はハルヒを抱きしめながら アソコを舐

めてあげるんだ

ハルヒは朝比奈さんのパンティを脱がせてあげて

もちろん舐つちやダメだよ

ハルヒと俺だけ気持ちいい事をする もちろんハルヒのアソコは舐めてあげるよ

俺が持ち上げてあげるから朝比奈さんに舐めてもらいな

ハルヒにも舐めて貰おうかな 朝比奈さんはそんな二人を見てるだけ

ハルヒに羨ましいか聞いて貰おうか

ハルヒが朝比奈さんを見ながらバックで突くからもちろんダツコの状態でのラブラブも見せてあげようか

可哀想だから朝比奈さんのアソコ触ってあげな イクかな？舐めてもあげよつか嫌だか？嫌なら俺が朝比奈さんを弄り倒しちゃうぞハルヒの前で

ハルヒを逆にまた椅子に拘束しようかな

…… ハルヒが涙目だ 可愛い 大分イジメたからな

しかしこれがお仕置きだ

アソコを指で触ってあげる 指を一本入れかき混ぜる

二本入れ気持ちいい所を訪ねる そこを激しく刺激した 叫び声がガムテープ越し

に聞こえる 潮を噴いた 凄い量だ

ハルヒによくお仕置き我慢出来たね 撫でてあげるビクビクしている

しかしハルヒ またお仕置きだな 掃除しなきゃと告げる酷く嫌そうだ

ゆっくり拘束を解いてあげる 抱きついてきた

激しくキスをする

ハルヒ「ううう 嫌だよキョン」シクシク

キョン「お仕置き中だけだぞ フィクシヨンだ」

ナデナデ

ハルヒ「ほ　ほんとよね」ウルウル

キヨン「当たり前だ　俺にはハルヒだけだ」

ハルヒ「もう　お仕置きしないで」ウルウル

キヨン「そうだなイジメ過ぎたな　身も心も」

ナデナデ

ハルヒ「うう」

キヨン「よく耐えたぞ　凄く可愛いかったぞ」

ハルヒ「で　でも　……」

キヨン「今日は一緒に寝れるな」

ハルヒ「う　うん／＼」

キヨン「ちよつと休んでて」

ベットに座らせてあげる　椅子や床を拭いた

消してと言ってきたので　目の前で動画を削除しパソコンの電源を落とした

濡れタオルを持って来て　優しくハルヒの身体を拭いた　機嫌が戻ってきたようだ

ハルヒ「今日ねハルヒね可愛いパジャマ持ってきたの　今日の為に買った／＼」

／＼

キヨン「ななんと」

ハルヒ「恥ずかしいから後ろ向いててね」

そう言われ立ったまま待った いいよと言われ振り返るタオルケットで隠れてベツトで横になつてゐる

ベツトインした

ハルヒ「ど どお? / / / /」

まさかの黒色 透け透けネグリジエ

キヨン「きよ 強烈だ」

ハルヒ「セ セクシー / / / ?」

キヨン「世界一だ」

ハルヒ「あ あのね そのー キヨキヨンが襲つて来なかつたらこの格好で誘惑しようと思つて / / /」

キヨン「い 今 襲いたいんだが」

ハルヒ「さ さつきキヨンはイツてないもんね」

キヨン「ギンギンだ ハルヒを見ただけで」

ハルヒ「ダメ 動かないで」プクー

キヨン「なんでだ」

ハルヒ「ふふ キヨンにも意地わるよ さんざんAVを見せて朝比奈さんまで出して

きて ふん」

キヨン「ま まあな」

ハルヒ「動いちやダメよ 仕返しよ」

キヨン「まあ そう言うなよ」

ハルヒ「反省してつ あーゆうことはもう 嫌だの」

キヨン「A V見たいって」

ハルヒ「み 見たいとは それより状況が」

キヨン「悪かった これからはなるべくハルヒの意向に沿うよ」

ハルヒ「当たり前よ ふんだ」

キヨン「この通りすまなかつた」

ハルヒ「ま まあいいわ 仰向けで口開けなさい」

キヨン「こ こうか」

ハルヒが腹の上に乗っかってきた

ハルヒ「 どお この姿 ふふ キヨンのアソコが返事してるわ喋っちゃダメよ」

タラアー

ハルヒ「私の唾液 さあ呑んで 次も ほらもう一回」

くうー これはこれで堪らない

ハルヒ「ふふ いい子よ」

ハルヒがアソコを俺のアソコに擦りつける ハルヒもイツばかりなのに色っぽい吐息を出してきた

ハルヒが耳元から愛撫を開始する 首元を必要に舐められる またもやキスマークを付けられたと思う

乳首も弄くり回される いつもより強く引つ張られた 苦痛の声をあげる だが気持ちいい

ハルヒ「ふふ イジメてきた仕返しよ」

そう言つて 身体中にキスマークを付けられる

喋ろうとすると凄いい剣幕で睨まれる

太腿にまでキスマークを付けられる

先端の濡れたもので……

ハルヒ「キヨンもベタベタね」

そう言い指に絡ませて アナルを弄り始めた

ま まさかな 俺のバージンが!!!小指を入れ抜き差ししながら

ハルヒ「気持ちいいの? どうなの?」

強い口調で言ってくる そんなセクシーな格好で言ってくるな アソコがビクビクしているのがわかる

ハルヒがパンティをずらして

ハルヒ「舐めなさい ん ん ああん♡しつかり舐めなさいよ」

一生懸命舐める 顔の上に乗られた 右手の小指は相変わらずアナルを刺激してくる

ハルヒ「キ キョン まだ出したら は はあ あああnダメよ ダメ」

ハルヒのセクシーな声がまた徐々に大きくなってきた 俺はハルヒを気持ちよくしようと舐め続ける

ハルヒ「はや ひやく わ ああ わた しをイかせ @・& a m p ;・ / : : @

さい／／

俺がイきたいよ 啜えてくれ 力を振り絞りクリを刺激し続ける

ビクンビクン またハルヒがイッた

ハルヒ「はあhあhあこれからよ／／キョ キョンも我慢したご褒美にフェラしてあげる♡」

レロレロクチュ ニュプ レロレロ

ハルヒ「はあhああんまだイツちやだめ」

頭を円を描いたり前後に動かして攻めてくる

気持ち良過ぎるぞ

ハルヒ「よく耐えれたわね ビクビク凄いわよ

挿れてあげる／／」

そう言つて 右手で俺のアソコを握り ハルヒが挿れてきた 気持ち良過ぎる ネ

グリジエの破壊力が凄い

美少女のネグリジエ姿を見せて自慢したいぜ

さつきのAVの影響か足の態勢を変え激しく上下してくる も お我慢出来ない

腰を浮かせ全開に出したハルヒは驚いたようだ

ハルヒ「はあああん まだ って い たたまったのに／／／／ お お仕置

きよ」

キヨン「喋れないから」

ハルヒ「いい わhけjは いいわ／／」

キヨン「そのネグリジエ姿と言葉攻めではイクさ」

ハルヒ「ねえーよかった？／／」

キヨン「良かった幸せ」

又ポツ タラー フキフキ

ハルヒ「相変わらず凄い量よ／＼／」

キヨン「ハルヒ凄過ぎ」

ハルヒ「お仕置き楽しみにしておきなさいね」

キヨン「怖いんだけど」

ハルヒ「ふ ふん キヨンみたいに 陰湿な嫌がらせはしないわ」

ネグリジエ姿のハルヒを抱きしめながら 長い長い土曜日を寝た

ガチャ

妹「きやーー」

ん 眠い

妹「お お母さーん」

………

ガチャ

キヨン母「まあー

パタン

妹「わ わかったー」

キヨン「んーこんな時間か」

夜更かししたせいもあって時計を見たらお昼だった ネグリジエ姿の女神が寝てい

るセクシー過ぎる

首元を愛撫する ちよつと反応があつた 寝顔選手権でも優勝だな

ほんのりちよつとだけ赤くなるようにマーキングした 胸元が視界に入る ネグリ

ジエからの谷間

っーーーーー生きていて良かった

谷間に手をそーと忍び込ませる

乳首を確認する クリクリと勃起してきた

ハルヒ「んん」

動きを止める まだ起きてない 興奮する

ネグリジエのレースの質感が：： これまた俺を刺激してくる ぶっかけたい でも

汚したくないので我慢する

肩をハダけさせ乳首が露わになった 優しく愛撫する表情を見ながら舐める

堪らない 調子に乗って両胸を出してしまった

寝ているハルヒの脚をゆっくり広げて 正常位の体制になる

おおーーーー はあはあ 冷静に右乳首を舐め

左乳首をコリコリ刺激する

相変わらず二センチ程勃起する ピンク色だ

五分程堪能してパンティをどける 秘部が湿ってるのを確認した

そのまま起こさないようにゆっくり先端を擦り付ける これもまた堪らない 先端が入る

静寂な部屋でクチュクチュ音が出始めた

ハルヒ「ん はあ あああ キヨンったら／／／」

キヨン「おはよ」

チュ

先端が入ったまま 動きを止める

ハルヒ「もおー／／／」

キヨン「なあハルヒ お願い寝たフリしてみて」

ハルヒ「な なんでよ もっとキスして／／／」

キヨン「こ 興奮するんだ凄く 新しい不思議発見だ」

ハルヒ「しょうがないわね／／／」 z z z

眉をひそめて女神は寝たフリをした

どんだん進入して いやらしい音が大きくなってくる

グチヨグチヨとゆっくり腰を動かす

耳元を愛撫し囁く 吐息も我慢してるようだ

ハルヒ「はぁhぁ んんぐ」

胸を愛撫しながら腰が自然にペースアップしてしまう 当然ハルヒの音が漏れ始めるが耳元で寝てフリねと告げる

妹「おかーさんー 遊びに行ってくるねー」

キョン母「はーいー」

!!!居たのかあーいーいー 動きが止まる

ハルヒ「ね ねえキョン」

キョン「か 帰って来てたのか!!」

ハルヒ「ま ま ま マズイわよ／／／」

キョン「声出さないで」

腰が再び始動した

ハルヒ「ん あ 気持ち あ ソコ 声d w ちゃ」

俺はハルヒの綺麗な口を左手で塞いだ

胸を激しく吸付け 乳首を弄り倒し 腰をスピードアップさせる

ベットがギシギシ音を立てる ネグリジェ姿のハルヒの腰が浮くまたビクビクして

る 締め付けが緩くなつたがもう止まらない俺の腰は俺の俺は

ハルヒが腕を伸ばして抱き寄せて来た 涙目で

ハルヒ「ちよ　一回　まっ　待ってああんあん」

口を口で塞ぎフィニッシュした　また中に

もう疲れたハルヒにのしかかる

ハルヒがポンポンとしながら

ハルヒ「この状況マズイわよ／／／」

キヨン「そ　そうだな」

ハルヒ「………　もう／／／」

キヨン「ハルヒがいやらしい過ぎる」

ハルヒ「シー声デカイよ」

ンーチュ　チュパ

キヨン「着替えようか」

ハルヒ「お風呂入りたいわ」

キヨン「無理なの知っててだろ」

ハルヒ「キヨンはハルヒの言う事なんでも聞いてくれないの?」
♡」

ネグリジエ姿　そして上目遣い　凶器だ

キヨン「す　する　するけど」

ハルヒ「絶対　絶対にお仕置きするんだからね　ふふ」

キヨン「ほんっと 大好きだぞハルヒ」

その後 着替えた俺たちはちよつと遅い朝ごはんを食べた お袋は残りモノのキムチ鍋を食べて美味しいわとハルヒを褒めてた

本当に美味しいからな

リビングでハルヒとTVを見て過ごす お袋の前で近過ぎる

キヨン母「ねえ ハルヒちゃん夕御飯も食べてくわよね？」

ハルヒ「はい」ニコツ

キヨン母「一緒に買い物へ行きましょ」

そう行つて出掛けて行つた 久しぶりの一人だ

部屋を綺麗にする 掃除機を掛けたり 布団を干したり床を拭いたりと 普段はこ

んな事あまりしない

恐らく彼女が出来たからだろう

布団に脱ぎ捨てられたネグリジエの匂いを嗅ぐ うん良い匂いだ ハルヒとHして

なきや一人で間違いなく行為を行なっていたであろう

俺は大人の階段を登つたらしいなぜなら冷静だからだ

ソファーに戻りウトウトと寝てしまった

妹「キョーんくーん」

キヨン「ああ」

妹「はるにゃんはー」

キヨン「お母さんと買い物行ったぞ」

ゴシゴシ

妹「ふーん」

キヨン「今日って何時ごろ帰って来たんだ？」

妹「じゅーじー」

キヨン「そうか」

妹「キヨン君 はるにゃんと寝てたね」

キヨン「ああ泊まってたからな ン 部屋開けたのか？」

妹「うん はるにゃんのパジャマ Hだったの」

キヨン「そ そんな事ないぞ」アセアセ

妹「あ シャミー」テツテツテツ

見られたか 勝手に部屋開けるからな いいやどうでも諦めも肝心だ 親にはバレ

バレだろう 大人になったと実感してる俺は動揺しなかった…… と思う

体が疲れてるし色々経験して眠気が凄い

また眠ってしまった

キツチンで話し声がする事で目が覚めた

どうやら帰って来てハルヒとお袋が晩飯の準備をしてるようだ

ハルヒ「あ 起きた」

キヨン母「だらしないわね」

キヨン「まーなー」ポリポリ

起き上がり洗面所で顔を洗い 部屋へ向かう

干してた布団を戻す 気持ちいい

テツテツテツ ガチャ ダキツ チュー

キヨン「おかえり」

ハルヒ「ただいま」デレデレ ダツコギュー

キヨン「家族が居るんだぞ」

ハルヒ「ふふ 大丈夫よ ちよつとぐらい」チュ

キヨン「晩御飯はなにかな？」

ハルヒ「残念ながら私じゃないわよ／／／」

キヨン「ち 違うぞ」

ハルヒ「もお キヨンつたら」

キヨン「布団干しといた」

ハルヒ「ねえーネグリジエあつたでしよ」

キヨン「ああ」

ハルヒ「一人でした?／＼」

キヨン「し してないぞ」

ハルヒ「もしよ 付き合つてなくて そのHもしてなくて私の着てたネグリジエがあつたら?／＼」

キヨン「……………」アセタラー

ハルヒ「答えなさいよ 魅力優勝つて言つてたわよね」デレデレ

キヨン「あ ああ まあーハルヒの着てる姿は想像したかもな」

ハルヒ「それだけ?」

キヨン「いや まん うん」

ハルヒ「男ならはつきりしなさい」

キヨン「はつきりしなくていい事もある」

間違いないな 絶対してた 一人で

ハルヒ「まあいいわ自信あるから／＼／」
キヨン「そ そうだな」

ナデナデ チュ チュ レロレロ クチュ ネットー

ハルヒ「これ以上はオ アズ ケ♡」

ハルヒよ抱きつかないでくれ悶々とする

いや抱きついて欲しいんだが

妹「ごはんだよー」

ハルヒ「行くわよキヨン」

また学校

昨日もハルヒが泊まった。晩飯を一緒に食べ、当然のようにハルヒはお袋と後片付けし、お風呂に入り一緒に寝た。もちろん風呂は別々だぞ

大きめなバッグの中に制服を入れてきたようだ

最初から泊まる気満々だったんだな

当然イチヤイチヤした寝る前も朝もだ

ネグリジエ姿のハルヒと

朝食を食べ朝シャンをして二人で身だしなみを整える

学校へ行く時間だ。自転車を押しながら二人で向かう

あの後Hしたかつて?してないさ。家族居るからな

自然と朝から刺激してくる

ハルヒは天然で男心を刺激出来るようだ

お陰で悶々としてるさ

余計な事を考えず勉強に励もう。そう心に誓った

指定席に到着し雑談する。昨日は意外にもゆつくりと寝れた。ハルヒに遅刻しない

ように早く寝かされたからだ

クラスメート達は相変わらず気になっていようで、こちらを見ながらヒソヒソ話をしてるように感じる。実際はわからないが

しかし、ハルヒの印象は入学当時とは大分違うから無理もない。悶々と数日間を過ごした。平凡な平和な時間だ

授業中も団活中も大して特になかった

まあ昼休みにハルヒと弁当を食べる時はイチャイチャしたがな

でもそれだけだった。あの休日が嘘のように

毎日、欠かさず電話やメールを行なっている

授業中に久しぶりにハルヒがツンツンして来た

思わず振り返る。満面の笑みがそこにはあった

ハルヒ「まるまる三日間経ったわね」

キヨン「ん なにがだ？」

ハルヒ「Hな事よ／／」

正直なところ動揺した。平静を装い

キヨン「ああああ。そ。そうだな」

ハルヒ「フルチャージでしょ？／／」

キヨン「なんの事かな」

とぼけて前を向いた 笑みと言葉が俺の理性に危険な信号を送った

突然大雨が降り始めた よくあるゲリラ豪雨だ

雷も轟く

違う教師が教室に入つて来てなにやら話している

次の授業は体育だったが中止になったようだ 理由は特に告げられず教室で自習との旨を言われた

今までこんな事はなかった

キーンコーンカーンコーン

ハルヒ「キヨン部室行くわよ」

キヨン「教室で自習だつてよ」

ハルヒ「部室も教室よ」

さも、あんた馬鹿ねと言わんばかりの表情だ
無言で腕を引つ張られ付いて行く

部室に着いた

ハルヒ「ここに座りなさい」

指定されたハルヒ専用の团长席に腰を下ろす

ハルヒ「動いちやダメよ」

ロッカーからロープを取り出してきた いつものまに用意していたんだ 椅子の背もたれごとグルグル巻きにされる 脚もだ

俺がお仕置きした時は、動こうと思えば動けた筈だぞハルヒさん これは本気で動けない

お仕置きだな

ハルヒ「さてキヨン お仕置きよ」

キヨン「心当たりがないが」

ハルヒ「とぼけてもダメよ 私の心も身体も弄んだわよね」ニコツ

作り笑顔が怖い 口にガムテープを貼られる

縛り付けられ座らされてる俺の上に跨ってきた

首を愛撫され 右手でYシャツのボタンを外された

無言で乳首を弄られ吸われる 性欲満タンと思われる俺は凄く感じてる 耳元で囁いてくる

ハルヒ「気持ちいいかしら」

首を縦に振り頷く

ハルヒ「そうよね キヨンが溜まるの待ってたのよ」

制服とパンツを下される　ギンギンだ

ハルヒ「またいやらしく先端から出てるわね」

レロつと舐められ　啞えられた　頭がジンジンする

20ストローク程された　物凄く興奮した

突然、行為が中断した

二メートル程離れたところから制服姿のハルヒが身体は横向けにし膝をやや曲げスカートをたくし上げる　パンティが見えない程度に　これがチラリズムか　白い綺麗な肌の太腿がチラリズムを引き立たせる

ハルヒ「どう　見たいでしょ？反省したら見せてあげるわ」

首を縦に振り素直な反省感を出す

すると後ろ向きになりちよつと腰を前へ曲げお尻を突き出してきた　制服のスカ―

トの丈は短く

既にチラリズムだが更にスカートをたくし上げる

お尻を左右にフリフリしてる

しかし見えない　とんでもない色香だ顔をこちらに向け色っぽい表情をしてやがる

ハルヒ「さつきパンツ脱いじやつた／＼／キヨンの為に♡」

考える間もなく　今度は俺の膝に片脚を乗せてきた　見えない見たい凄く見たい

「またもやスカートを上上げる 絶妙なラインで

もうギンギンだよ 先端から溢れ出てるよ せめて手を開放させてくれ 片方だけでいいから

「ハルヒ」その反応は一人でしかないでちゃんと溜めてたようね」

「そう言つて再び近づいて来た 耳元で

「ハルヒ」私を見るだけでムラムラしちゃうかしらね 意地悪なキヨンは」

上半身を愛撫される 右手でアソコをゆつくりと上下してきた カウパーが凄い出る またもやレロつと吸われた また口で20ストローク程された後は弄つて貰えなかつた 背後から抱きしめられる

「ハルヒ」私の事好き？」

首を縦に振る

「ハルヒ」素直なキヨン好きよ」

「ハルヒはYシャツのボタンを半分程外して美しい谷間を見せて来た 顔を頑張つて近づけるが全然届かない

「ハルヒ」キヨンつたら興奮し過ぎよ 今日ブラも可愛いかしら」

首を縦に振る ハルヒが胸を両腕で挟み谷間を強調しながら

「ハルヒ」見て 私の胸赤くなつてる所あるでしょ

ふふ キョンに付けられたのよ♡」

ああー吸い付きたい 襲いたい キツイつてもんじやない 学校でとか関係ない程に

首元や耳を甘噛みされ始めた そのまま乳首も甘噛みされる

ハルヒ「先端の垂れて制服汚れそうね 舐めてあげなきやね♡」

また吸われた はあはあ気持ちいい もつともつと

ハルヒは自分のアソコを弄り始めた

ハルヒ「よく聞いてね／／」

クチヨクチヨ

いやらしい音が聞こえる 右手についた愛液を俺のアソコに付けシゴいてきた

また自分のを触りシゴくのを続けられた

シゴかれなくなり ハルヒのいやらしい音がよく聞こえるクチヨクチヨと

パンツを穿かされたズボンもだ 俺は唾然とした

ハルヒが跨って来た 抱きついて 腰を浮かし自分のを触っている 耳元で喘ぎ声

を出してる

ハルヒ「キョン♡はあはあ 気持ちいいよ／／」

身体の反応が大きくなる

ハルヒ「いい いっちや う／＼」
ビクンビクン グテーっと抱きつかれた ムラムラが止まらない 相変わらずいい
匂いだ

ハルヒ「はあはあ 私もしてなかったからね／＼」

俺もだよ 俺も なんでもしますんで パンツ下ろしてお願い 苦しいです ハル
ヒさん

ハルヒ「喋らないって約束出来る？」

首を縦に振る

ハルヒ「絶対によ」

睨まれる

首を縦に振る ガムテープを剥がされた その瞬間激しくキスをされる ずっとさ
れた 刺激的だ 唾液が糸を引く

ハルヒはまた離れて ゆっくりとパンティを脱いだ

ブラと同じピンク色

Yシャツをはだけさせて 谷間が見え、手には可愛いパンティを持って近づいて来た
パンティの濡れた場所を顔に近づけて

ハルヒ「舐めてみて／＼」

ノーパンだったと言う嘘はどうでも良かった

指示通り舐める はぁー興奮する

ハルヒ「どお？いやらしい味した？／／／」

首を縦に振る

またパンツを下げられ 先端を吸われ パンティで覆いシゴかれた パンティの柔

らかい素材が気持ちいい すぐ手を止められ また先端を舐められる

なんとハルヒはパンティを履いてしまった

生唾を飲む苦しい 助けてくれ

ハルヒ「続きは電話でしてあげる♡」

頭が真っ白になる この場は？俺は？ またもや言う間もなく再び口にガムテープ

を貼られた

ハルヒ「私の事好きならこのぐらいの試練耐えられるわよね／／／」

俺は身動き出来ない

ハルヒ「これで耐えられたら他の女の子に手出さないの信用してあげるわ♡」

今思えば大雨や自習は相変わらずのトンデモパワーかもと思った

ガチャ

ハルヒ「……………」

キヨン「……………」

みくる「あれっ涼宮さんこんにちわ　なんでここに

居るん……………」

ハルヒ「みみ　みくるちゃん？ちよつとここ座って」

みくる「お　おおおじやましたー」

ハルヒ「ダメっ　ここに座りなさい」

みくる「いい嫌です」

ハルヒ「みくるちゃん　お願い勘違いしてると思うから」

ガチャ

みくる「なananんあんんで鍵締めるんですかー」

暫し沈黙が続くハルヒが朝比奈さんを一生懸命なだめる　落ち着いてきたようだ

ハルヒ「いいみくるちゃん　よく聞いて」

みくる「あのおーその／／／」

ハルヒ「なによ　なにか……………」

ハルヒは真っ赤になり　中途半端に見えてたパンティをしつかり履いた　片方が下

がつていたのだ Yシャツのボタンも止め直す下着丸見えだったからな

みくる 「や やっぱ涼宮さんはSなんですネ」

ハルヒ 「ちちちちちがうわよ 違うの これは違うの」

みくる 「だってキョン君縛られてますよ」

ハルヒ 「お お仕置きしてたのよ」

みくる 「だからSなんだなつて」

ハルヒ 「違って私も縛られるから その仕返しなの」

みくる 「キョン君が？涼宮さんを？えー嘘だ」

ハルヒ 「ほ ホントーなの／＼／＼ 獣なのよ キョンは」

みくる 「え？獣？涼宮さんはその仕返しでなにしたんですかー？」

ハルヒ 「な 何もしてないわよ／＼／」

みくる 「キョン君凄く苦しそうですよ」

ハルヒ 「今は危険よ」

みくる 「なんでですかー？」

ハルヒ 「襲ってくるかもしれないわ」

みくる 「まさかキョン君が」

ハルヒ 「そのまさかなのよ」

みくる「それはないですよー涼宮さん」

ハルヒ「なんでキヨンは信用してて 団長である私の言ったことは信じてくれない訳？」

みくる「涼宮さんも信じてますけど そのーえーつと 涼宮さんの下着ズレててキヨン君が椅子に縛られてる今だとー」

ハルヒ「みくるちゃんキヨンの事なにもわかってないわ だからそんな事言えるのよ」

みくる「んーとっ 具体的にどんな事ですかー？」

ハルヒ「ひ ひみつよ／＼／＼」

みくる「ほんとーに キヨン君襲ってくるんですか？」

ハルヒ「た たぶん 二人だと危険だわ／＼」

みくる「わたしー居るから大丈夫じゃないですか？」

ハルヒ「わ わからないわよ／＼」

みくる「秘密教えてくださいよー」

ハルヒ「だ だめよ」

みくる「じゃキヨン君から聞いてみていいですかー？」

ハルヒが不安そうに睨めつけてくる 朝比奈さんが口のガムテープを剥がしてくれ

た

みくる「キヨン君 なにがあつたんですかー？」

キヨン「別になんでもないですよ なっハルヒ」

ハルヒ「そ そうね なんでもないわ」

みくる「なーそうなんですネ なら良かったです じゃー解いてあげますね」

キヨン「ありがとうございます 朝比奈さん」

俺は冷静だった いや性欲の我慢の限界でおかしくなつてたかもしれない

マイエンジェル朝比奈さん…… いやまだ時期尚早だハルヒが言う事を聞かないか

もしれないからな

みくる「ほらー涼宮さん キヨン君襲つてなんてこないですよ 私もう先に教室戻り

ますね」

ガチャ

ハルヒ「キヨ キヨンごめんな@& a m p ; @・& a m p ; / & a m p ;」

俺は無言でハルヒの口に突っ込んだ 頭を両手で押さえ付けて 腰を激しく動かす

気持ちいいぜ

ハルヒは俺の太腿を掴みながら抵抗してくる

苦しいのだろう

腰の動きを止めゆっくりとかつてない程に奥まで突つ込む　唾液が床に糸をひきな
がら垂れている

抜いてやった

ハルヒ「ごほつごほつはあはあ」

再び奥までゆっくりと押し込む　涙目でもう無理と美しい目が訴えてくるが御構い
なしだ

抜いてあげると見せかけまた奥まで入れる

慣れてきた　徐々に腰を動かす　しばらく快感と征服感を堪能した

口から抜いてハルヒの髪を片手で鷲掴みし

キヨン「お仕置きだ」

ハルヒ「は　はい」ウルウル

髪を引っ張って近づける　自ら啜えてきた

頭を前後に動かしてやるリズムカルに

また抜いて

キヨン「口に出してあげるから一滴も零しちやダメだぞ」

ハルヒ「は　はい」ウルウル

キヨン「さつ　口にちようだいつて言つてごらん」

ハルヒ「いいやあ」シクシク
睨みつける

ハルヒ「く くちに だ だしてください」

キヨン「いい子だ 啜えてごらん」

リズミカルからただただ激しく動かす

口の中に出したい欲求に駆られる

ハルヒの頭を固定し、恐らくまたギネスだろう量を出してやった
頑張って零さないようにしてる

キヨン「さあ呑み込んで」

ゴツクン タラー

キヨン「零しちゃったね お仕置きだ」

ハルヒ「うう ごめんなさい」

目の前に差し出す ハルヒによく似合うピンク色の飛びっこだ

まだ学校

ハルヒは目の前に出された ピンクローター

遠隔リモコン付き通称飛びっこを見た

だが、それどころじゃないようだ

ハルヒ「うう ごめなさい」

ウルウル

キヨン「怒ってないぞ」

ハルヒ「乱暴だったわよ」

シクシク

キヨン「そうか悪かったな」

ハルヒ「ダッコして」

キヨン「おいで」

ダキッ ナデナデ

ハルヒ「ううもうしないから」

キヨン「電話まで我慢出来なかったんだ」

ハルヒ「もおー」ポカポカ

キヨン「やめろ叩くなつて」

ハルヒ「怒ってる？」ドキドキ

キヨン「怒ってないさ」

ハルヒを椅子に座らせ

キヨン「自分でパンツずらして見せてごらん」

ハルヒ「いやよ キヨン まだ怒ってるじゃない」

キヨン「そんな事ないさ 俺の言う事が聞けないのか？」

ハルヒ「そ そんな事ないけど学校だし」

キヨン「はあー ずらしてごらん」

ハルヒ「ううう」ウルウル

ハルヒは嫌がりながらも自分でパンティーをずらして局部を見せてきた

クリを丁寧に執拗に舐めてあげる 身体の反応がビクビクと感度上がってきたよう

だ

ハルヒ「はあはあ ご ごめんなさい キヨンあああん」

俺は愛撫を中断し 飛びっこを手に持った

キヨン「これ持つてるか？」

ハルヒ「も 持ってないわよ／＼」

キヨン「正直に言っごらん」

ハルヒ「ほんとーよ 信じて」

キヨン「安心した」

ブーン イヤラしく紅くなっているクリトリスに優しくあてる

ハルヒ「ちよ／＼ダメ／＼」

キヨン「気持ちいいか？」

ハルヒ「ううん／＼」

キヨン「ローターってのは知ってたんだな？」

ハルヒ「ああ あん聞いたこと は ある まつて／＼」

電源を落とす 身体がピタツと止まる 不安そうな表情だ ガムテープで貼り付け

パンティを履かせてあげた

キヨン「立っごらん」

ハルヒ「い いやよ」

抱き寄せ スカートをめくり右手でお尻を叩いた

もう一度座らせる

ハルヒ「ご ごめんなさい」ウルウル

キヨン「立ってごらん おいで」

抱きついてきた 再びスカートを捲り強めにお尻叩く

キヨン「次は一回で言う事聞くんぞぞ」

ハルヒ「は はい」ウルウル

立ったまま抱き合っている 電源を入れた 内股でブルブルし右手で股間辺りの

スカートを掴んでる

相変わらず敏感な奴だ

ハルヒ「も もう無理 止めて」

キヨン「室内を一周してごらん」

ハルヒ「いやよーキヨン ダメ」

机をダンつと叩いた

内股で前屈みになりながらゆっくりと歩き始める 机を手すり代わりにしながら

スカートを掴んでる

美少女のこの姿なかなか絵になるな

ダツキ ナデナデ

キヨン「よく出来ました」

チュツチュ

電源を止めてあげる

ハルヒ「キヨンが怖いよ」

キヨン「そんなことないぞ　いつもの俺だ安心してくれ」

ハルヒ「う　うん」

キヨン「さてそろそろ　次の授業が始まる行こうか」

ハルヒ「無理よ」

キヨン「ん」

ハルヒ「意地悪しないでよー」

キヨン「あつそう」

ハルヒ「う嘘よ　ご　ごめんなさい」

涙目で訴えてくる　電源を入れてないと大丈夫のようだ　教室に入る　授業が始

まってないので賑やかだ

キヨン「静かじゃなくてよかったな」

ハルヒ「う　うん／＼／」

午後の授業が始まった　リモコンをチラッとハルヒに見せる　焦った顔をしてる

可愛い

俺はボタンを押さなかった　ハルヒの性欲を高めようとしたからだ

教師「涼宮ここわかるか？」

ハルヒ「チツ」

いつもの舌打ちし 解答の為に席を立った 最弱で電源を入れてみた 立ち上がるのが遅く前屈みになっている

ハルヒ「ああ うーそうですね わかりません」

教師「珍しいなココは えーこのようにこの公式をあてはめ」

キョン「よかったな 一番後ろの席で」

ハルヒの頬が紅くなり 内股でモジモジしてるのを確認した これ以上は流石にマズイと思ひ電源を落とした 敏感な可愛い彼女だ

キーンコーンカーンコーン

ハルヒ「い 行くわよ キョン」

ネクタイを引つ張られる

いつも通りに強がつてるハルヒも可愛い

ガチャ

朝比奈さんが着替えてなかった なぜだ

みくる 「お茶淹れますねー」

ハルヒ 「ううん」

キヨン 「ところで朝比奈さん さつきは部室に用があつたんですか？」

みくる 「んーヘアゴムを忘れちゃいました」

あと、古泉君はバイトで来れないそうです」ニコ

ハルヒ 「バイトならしょうがないわね」

キヨン 「あつ カバン教室に忘れた 取ってくる」

ハルヒ 「アホキヨンね」

ガチャ 最弱電源ON

みくる 「ん 涼宮さん どうしたんですかあ？」

ハルヒ 「なななにもないわよ／／／」

みくる 「なにか隠してませんかあー？」

ハルヒ 「ん あ／／／そんな事ないわよ」

みくる 「顔が赤くて色つぼいですよ」

ハルヒ 「いつ通りよ／／／」

みくる 「んーわかつたキヨン君とチューしたんじゃないですかあー？」

ハルヒ 「し してないわよ」ソワソワ

みくる 「えーっ嘘ついちゃダメですよ」

ハルヒ 「嘘ついてなんかいいわ／＼」

みくる 「えーチュツしてもいいですかあ」

ハルヒ 「ななななんですよ／＼」

みくる 「あんな事やこんな事してるのにですかあー？」

ハルヒ 「べ別にしてないわよ なにも」プルプル

みくる 「じやーチューしちゃお♡」

チュ チュー レロレロ

ハルヒ 「だ だめー はあはあ／＼」ビクビク

みくる 「凄い反応ですうー 涼宮さん」

ハルヒ 「ち 違うの／＼」

みくる 「じや隠してる事言ってくださいあい」

ハルヒ 「ななにもないの」

みくる 「それじやお仕置きですねえー」

ハルヒ 「だ だめ お仕置きはもう嫌なの」

みくる 「じよーだんですよ♡お仕置きはキョン君だけですもんね」

ハルヒ 「べ べつに さされてなんて」

みくる 「でもキョン君は獣なんですよねえ」

ハルヒ 「わ わたしにだけよ／＼」

みくる 「どうなんでしょうねえ」

ハルヒ 「な なんですよ」

みくる 「男はみんな獣って言いませんか」

ハルヒ 「キョ キョンは私だけなの 大丈夫なのよ／＼」

みくる 「ラブラブでよかったですう どこまでやったんですかあ？」

ハルヒ 「なななにをよ」

みくる 「Hな事ですう」

ハルヒ 「べ べつに言わなくてもいいでしょ／＼」

みくる 「でもちよつと気になる事があるんですよおー」

ハルヒ 「ななにがよ」

みくる 「さつきからブーンって小さいけど音しませんか？」

ハルヒ 「気のせいよ 気のせい／＼」

みくる 「そうですねー まさか涼宮さんがそんな事をですねえ」

ハルヒ 「なななに訳のわからない事お」プルプル

みくる 「なにか我慢してるうんですかあ？」

ハルヒ「なななにもないわよ／＼」

みくる「今度のキャンプ楽しみですよ テントに来て挿されるか心配ですよ」

ハルヒ「ななな大丈夫に決まってるでしょ」ビク

みくる「どうしてですかあ 蚊怖いですよどこからでも侵入してきて 身体に挿されるますもんねえ ドキドキしますう」

ハルヒ「なななんで ドキドキするのよ」ビクビク

みくる「涼宮さんにまたキスしたいですチューって」

チュー チュパ

ハルヒ「だ だめ\$☒€&p;▪@」

みくる「キャンプ楽しみですよねえ」ニコツ

ハルヒ「はあはあ は はい／＼」

みくる「キョン君戻って来たら 楽しみですよねえ」

ハルヒ「べ別に／＼」

みくる「ラブラブですよんねえ 邪魔しちや悪いしい 古泉君も長門さんも来ないんで帰りますねえ」

ハルヒ「なななんでよ でもまた明日ね みくるちゃん／＼」

みくる「早く帰ってくれて嬉しいですよ 涼宮さん♡」

ガチャ

キヨン 「朝比奈さん帰るんですか？」

みくる 「邪魔しちや悪いですよー」 モジモジ

キヨン 「そんな事ないですよ」

みくる 「涼宮さん可愛いですよねえ キャンプでも楽しみですよー」 テツテツテツ

バレたか？ 喋ったのかハルヒ 朝比奈さんの後ろ姿を見ながら思い 電源を落とす

た

ガチャ

ハルヒ 「キョーーん」

ダキツ ダツコ

キヨン 「どうしたハルヒ」

ハルヒ 「みくるちゃんがなんか意地悪してくるの」 ウルウル

キヨン 「なんて悪女だ お仕置が必要だな」

ハルヒ 「ダメー お仕置は私にだけよ」 プク

キヨン 「そうだな」

ハルヒ 「もう外していい？」

キヨン 「バレたのか？」

ハルヒ「言っていないけど……二回もビクビクって」

キヨン「イツちやったのか それはしようがないな」

ハルヒ「みくるちゃんが首にチューしてきて」

お尻を叩く 二回連続で

ハルヒ「ひいやめて」ウルウル

キヨン「浮気したんだな？」

ハルヒ「ち 違うの 勝手にキスしてきて」

キヨン「そうか 朝比奈さんのキスでイツったんだな お尻を出しなさい」

ハルヒ「ごごめんなさい」

ハルヒを後ろ向きに立たせてお尻を突き出させる綺麗な白い肌がほんのり赤くなつて
てる

次は左を叩く事にしよう バチンバチン

お仕置きなのに色っぽい声を出しやがる

でもまさか朝比奈さんが……色っぽいハルヒに刺激されたのか……

ん 本校舎の窓に人影が？窓に向かって歩く

見えなくなった 気のせいかな

ハルヒを机に伏せさせスカートは捲らず、赤くなつたお尻が半分程見える程度に可愛

いパンティを下げ挿入した

しっかり濡れてる　なんて気持ちいいんだ

何も言わずに腰が動き続けてしまう　いつものように喘ぎ声が大きくなってきた

バシン　バシンお尻を叩く

ハルヒ「あん／＼／＼　いい　た　よ　k　y　きよん」

キヨン「声出しちゃダメだぞ」

背後から抱き寄せキスをしてあげる　腰は動かしたまままだ

ハルヒ「も　もはあ　ああん　おこつてない？」

キヨン「声を出さなかつたら　朝比奈さんと浮気した事は許してあげるぞ」

ハルヒ「う　うん　あ　あ　いい　あん　あ♡そこ」

上半身をまた机に伏せさせ　お尻をまた叩く

ビクンと身体が反応する

背後から突く気持ちよさ　お尻を叩いても素直に言うことを聞く美少女の全権を

握つてるこの感触

堪らない

キヨン「そろそろ電源をまたONにしてあげるぞ」

ハルヒ「だ　だめ　お　おねがい　はあhあ　さつき　イツたば　あつひい」

今までよりも更にお尻を強く叩いた

キヨン「浮気してイツたもんな」

ハルヒ「ち　ちがうの　うう」ウルウル

キヨン「じやローターの電源入れてください　お願いします?ん?」

ハルヒ「ろーたー　い　れて　くらはい」

真つ赤な顔をしてるハルヒのお願いだからな

しょうがない　電源を押しした　ブーンと作動音がする

中間ぐらいの強さだ　楽しむ間も無く身体がビクンビクンとなり力が抜けてビクビクしている

無視して腰を動かし続ける　締めまりが悪い　イライラしながらお尻を叩く　反応が

鈍い

キヨン「次からは許可なくイツちやダメだぞ」

ハルヒ「うう　むりyああはああはああん」

キヨン「大丈夫だハルヒは出来る子だぞ」

ナデナデ

ラストスパートをかける　また中に出した　余韻で腰を動かす

ハルヒ「ま　また　なかなの」

不安そうだ 抜いてパンティを上げる

ハルヒ「だ だめ ついちやうよ」

キヨン「そうか ごめんな はあ」

ハルヒ「いいの せ洗濯するし」アセアセ

キヨン「そうか可愛いなハルヒちゃん」

ダキツギユ一

ハルヒ「う うん 好きって言って／／／／」

ダツコ

キヨン「好きだぞハルヒ」

ハルヒ「もつと言ってお願ひ／／／」

キヨン「我儘だなハルヒは」

ハルヒ「そ そんなことないもん／／もう許してくれた？」

キヨン「いつも怒ってないし 全てを許してるぞ 愛してるからな」

ハルヒ「で でも 叩くじゃない」ソワソワ

キヨン「時にはお仕置きや躰は大事だろ そうやって子供は大人になっていくのさ」

ハルヒ「でも もう叩かないで」ウルウル

キヨン「ハルヒがいい子にしてれば叩かないさ」

ハルヒ「うん キョン好き／＼／」

キョン「キャンプは晴れればいいな」

ハルヒ「うん 晴れて欲しい」

ハルヒと別れた帰り道 古泉が居た

古泉「ご相談があるんですが」

近くに寄るな うつとしい 待ってたのか？

古泉「どうも最近閉鎖空間が発生しまして しかも特大の」

キョン「ハルヒが不機嫌ってことか？」

古泉「理由はわかりませんが 恐らくあなたが関係してるのかと 閉鎖空間は涼宮さんの精神状態に左右されますからね」

キョン「俺は何もしてないぞ」

古泉「ならいいんですが 涼宮さんを大事にして下さいね」

キョン「当たり前だ」

古泉「否定しないんですね」

だから近いって

古泉「今度の土曜日からのキャンプなんですけど 私は行けそうにもありません」

キヨン「なんでだ？ それにオマエの知り合のとこだろ」

古泉「閉鎖空間に対応する為に車の便が必要なんです それに知り合いには伝えてあるから大丈夫ですよ 四人で楽しんで来て下さい」

キヨン「そんなに閉鎖空間は多発してるのか？」

古泉「多発とまではいかないんですが 規模が大きく人手が必要なんですよ」

キヨン「残念だが仕方ないな 俺はどうせ荷物持ちだ」

古泉「持ち物は食材ぐらいで大丈夫ですからね キャンプ道具一式はあちらにごさいますので安心して下さい」

家路についた

…………… お仕置きし過ぎたかな

だがキャンプが楽しみだ

キヤンプ

土曜日の朝、目覚まし時計より先に着信音が鳴り響く　予想はしてたが眠気が辛い
キヨン「もしもし」

ハルヒ「おはよ♡七時に駅前集合よ」

キヨン「おはよう　わかってるよ」

ハルヒ「じゃまたね　バイバイ」

ツーツー　zzz

ガチャ

ハルヒ「もう　起きてないじゃない」ガバツ

寝ぼけて頭が混乱している　体を丸める　抱きつかれた　時間は大丈夫のはずだ
寝かせてくれ

ハルヒ「さて準備よ　顔洗ってきなさい」

アクティブな格好だ ショーパンにTシャツで色気は抑えられているが健康美とはこの事を言うのであろう 急かせれ顔を洗い 身だしなみを整える

ハルヒ「早く早く 遠いんだから乗り遅れたら大変よ」

キヨン「わかつてるぞ」

テツテツテツ ダキツ チュツ

キヨン「ところでどうやって家に入ったんだ？」

ハルヒ「お母さんから合鍵を渡されてるのよ♡」

いつの間だ

自転車で駅へ向かう この前の大雨とは違い快晴だ 二人で10分ほど待ってたら

天使が近寄って来た

麦わらに白いワンピース 可愛い

みくる「おはようございます 待ちました？」

ハルヒ「遅いのよみくるちゃん」ツン

キヨン「そんな事ないですよ 俺たちも来たばかりです」

みくる「ならよかったです」

P r r r r r r r r r 長門は来れなくなったらしい

ハルヒ「え？ユキ来ないの つてことはみくるちゃんとキヨンの三人だけ？」

みくる 「なにか問題があるんですかあー」 ニコリ

ハルヒ 「なないわ 古泉君も来れないし ユキも突然だったから驚いただけよ」

みくる 「三人で楽しみですね キャンプ」

ハルヒ 「ももちろんよ」

三人で電車に乗った 二時間掛けての長旅だ

駅の売店で買ったサンドイッチを食べる

打ち合わせで荷物になるから朝食と昼食は買う事にしてた

しばらく談笑したら睡魔が襲ってきた

ハルヒ 「キヨン寝ないでよー」 ユサユサ

キヨン 「ハルヒが早く起こすから眠い これから体力を使うから 一眠りするな」

みくる 「そうですね体力使いますもんね キヨン君おやすみなさい」

ハルヒ 「お おやすみ」

Z Z Z Z Z Z Z Z

みくる 「すっかり寝ちゃいましたね」

ハルヒ 「間抜け面ね」

みくる 「涼宮さんが起こしてあげたんですか？」

ハルヒ「そうよ遅刻しないように」

みくる「キヨン君の家に泊まったんですかあ？」

ハルヒ「昨日は泊まってないわよ／＼／＼」

みくる「朝早くから優しいんですねえー」

ハルヒ「そそうかしら」

みくる「キヨン君は何に体力使ってますかね？」

ハルヒ「に 荷物持ったり火起こしやテント立てるためよ／＼／＼」

みくる「うふふふ夜が楽しみですよ」

ハルヒ「ななななんですよ」

みくる「キャンプファイヤーでもするのかなって思いましたえー」

ハルヒ「も もちろんよ／＼／＼」

みくる「なんか別の事を想像してませんでした」

ハルヒ「してないわ／＼／＼」

みくる「ほんとーですかあ？」

ハルヒ「ホントーよ」

みくる「涼宮さん嘘付くのヘタクソですよ」

ハルヒ「なななに言ってるのよ」

みくる「うふふふ 涼宮さん可愛いですう♡」

ガタンゴトンガタンゴトン ツギハ

ハルヒ「着いたわよ起きて」

みくる「キスしたらすぐ起きそうですう」

ハルヒ「しししないわよそんな事／＼」

スツキリした良い目覚めだ 美しい女の子二人を寝起きから見れるなんて 近くに
あつた地元の店で食材を買う

定番だが安パイのカレー作りの材料だ

店主婆「おや めんけえーお嬢ちゃんだこと」

ハルヒ「ありがとうございます」

店主婆「これからカレー作りんか？」

ハルヒ「キャンプで作ろうと思ひまして」

店主婆「あंनीやー楽しそうじゃの キャンプっていやービールじゃろ」

そう言つて買い物カゴに勝手に入れられた

みくる「呑んだことないですう」

ハルヒ「私もー」

キヨン「俺もだ せつかくのキャンプ出しありだな」

ハルヒ「キヨンが言うなら呑むー」

持参のクーラーボックスに入れて今度はバスに乗った

みくる「凄い山奥ですねえ」

キヨン「非日常だな」

ハルヒ「店もないわね」

みくる「涼しくて気持ちいいですう」

ハルヒ「避暑地だわ」

キヨン「着いたな ああのハウスに行けばいいのかな」

コンコン ガチャ

キャンプ主「古泉さんの友人ですね お待ちしておりました 道具は車に積んでるのでこちらへどうぞ」

そう言われワンボックスカーに乗り込んだ 段々と山道になっていく 車が結構揺れる 川が綺麗だ

キャンプ主「ここから歩いてすぐ行けば河原です

私も道具降ろすの手伝いますね」

みんな道具を持って河原に着いた

ハルヒ「凄い自然ね」

キャンプ主「そうなんですよ キャンプ場といつても何かと設備が整ってますが、ウチは大自然を満喫して頂きたくて 明日の昼にまた迎えに来ますね」

みくる「クマさん出そうです」

キャンプ主「その鈴をたまに鳴らして下さい」

ハルヒ「え」

キャンプ主「ではまた明日」

ブロロロロ

キヨン「電波も入らないな」

みくる「世界で私たち三人だけみたいです」

ハルヒ「いいわね こーゆうのも さっそくテントを立てましょう」

荷物からテントを取り出す クイを打ち付け完了だ意外に簡単だった 布団を敷き

寝床を完成させた

薪やライターまで準備してくれてる 最初は厳しいと思ったが案外大丈夫そう

三人で協力して満喫している カレーやご飯も順調だ

ハルヒ「喉乾いたわね」

キヨン「流石に風呂はないか 川で汗流せるな」

みくる「水着ないですよ」

キヨン「女子は厳しそうですね」

ハルヒ「キヨンいやらしい事考えちゃダメよ」

キヨン「まさか朝比奈さんの前で」

みくる「お疲れ様です どーぞ」

ビールを差し出された 丁寧にかけてくれてる

ちよつとした気配りが素敵だ

カンパニー

キヨン「うお 染み渡るってのがわかる」

ハルヒ「これがビールなのね」

みくる「ジュースの方が美味しいですー」

火を囲み談笑しながら呑んだ 大人になった気分だ 二人とも目がトロロンとして

顔が赤くなっている 会話もなんだか呂律が回らない 頭が変な感じだ

そんな心地良い気分でカレーを食べた美味しかったぞ 古泉と長門に食べさせた

かったな

ハルヒ「トイレどうするのかしら？」

キヨン「大自然だな」

みくる「自然ですなー」

キョン「木陰しかないか 誰も見てないしウエットティッシュユまであるから大丈夫か」

ハルヒ「一人じゃ怖いわよ」モジモジ

みくる「お漏らしはダメですよ」

キョン「また抱えてあげようか？」

みくる「そんな事してるんですねーラブラブですね」

ハルヒ「みくるちゃんには見られたくないわ恥ずかしい／＼」

キョン「ワガママ言っちゃダメだぞ」

みくる「そうですよー」

キョン「三人だけの秘密にするから」

ハルヒ「そーゆう問題じゃないわよ」

みくる「ひみつです♡」

キョン「山奥だしトイレがないから仕方ないんだ じゃハルヒは朝比奈さんを一人つきりにするののか？」

ハルヒ「そうだけど」

キョン「女子も温泉とかで裸だろ？気にする事はないさ」

ハルヒ「ち 違うじゃない トイレは／＼」

キヨン「やれやれまたワガママか」

みくる「優しいです キヨン君」

ハルヒ「うう 一人じゃ怖いしキヨンに抱かれてしゆる」

みくる「わあーデレた涼宮さん可愛いですー」

キヨン「可愛いよね おいで」

ダキツ

キヨン「ほら自分で脱ぎなさい 服に着いちやうよ」

ハルヒ「やっぱり恥ずかしいよ」

ペシツ キヤ

キヨン「やれやれお仕置きだ」

ハルヒを背後から抱き寄せる

みくる「うふふふ 今日私は私も居るから涼宮さんに意地悪させませんよ」

キヨン「そうですね よかったな」

ハルヒ「恥ずかしいのっ」

キヨン「朝比奈さん脱がせて貰っていいですか」

みくる「はあーい♡」

ハルヒ「いやっ」

ヌギヌギ

下半身丸出しのハルヒを後ろから膝を持ち上げる

みくる「涼宮さん え 凄い」

キョン「ほらおしっこしていいぞ」

みくる「あのーそのー毛の処理しないんですかあー?」

ハルヒ「ううー見ないで キョンだけなのに」ウルウル

キョン「朝比奈さんは処理してるんですか」

みくる「はい エチケツトですう」

ハルヒ「もう嫌だよ」ウルウル

キョン「出ないな 朝比奈さんお腹や内股さすってあげて下さい」

みくる「涼宮さんは手がかりますね」

ハルヒ「いやあー」

耳を愛撫する 陰部全開のハルヒの前で朝比奈さんが腿やお腹をさすってくれてる

吐息が漏れる

キョン「こらハルヒ おしっこだぞ」

ハルヒ「は はい／＼／」

キョン「これはまたお仕置きだな」

ハルヒ「嫌っお仕置きは」ウルウル

チヨロージャー

ハルヒ「うう」

みくる「拭いてあげますね♡」

キヨン「偉いぞハルヒ」

頭を撫でて抱き合い 朝比奈さんが着せてくれた

酔って気持ちいい感じだ これが酔いか 流石に疲れてきたので三人ともテントの
中で休んだ

扇風機付きだ 木陰に立てたので十分と涼しい

ハルヒが真ん中で横たわる トイレの事を恥ずかしいがっているようだ お腹をさ
すってあげる

!!! 朝比奈さんも俺と同じ態勢でハルヒをさすっている 耳元にキスを試してみる

ハルヒ「キヨ キヨンダメ みくるちゃんがいるよ」

みくる「うふふふ 気にしなくていいんですよ」

そう言つて朝比奈さんもハルヒの首へキスをする
なんだこれ酔つてるのか？

俺も首への愛撫を続けた 吐息が混ざつてきた

首元の中心で朝比奈さんと顔が触れる ……

ハルヒの吐息が聞こえる下でお互いの舌が触れ合う

執拗にハルヒの首元を愛撫し続けられないように朝比奈さんとキスをした 二人の
唾液が首に垂れる

これはこれはこれはなんだ一体なんだ

みくる「涼宮さん 気持ちいいですかあ」トローン

ハルヒ「べ べつに／＼／」

みくる「嫌がつてないですよね」ニコツ

キョン「良かったな 朝比奈さんにまで気持ち良くされて」

ハルヒ「いやあー はああん キョンがいい」

チャパ レロ ン ハア アン うふふふ

左手でハルヒの視界を覆い口を奪いながら内腿を触り始める

ハルヒの綺麗な肌の内腿を朝比奈さんのこれまた綺麗な指が触っている

だ

新境地

テントの中は扇風機があるといえど 熱気に包まれ始め三人共汗ばんでくる 汗で濡れた髪が二人の色気を増幅させる

俺の指に触れてきた お互いの指を絡めあいながらハルヒの陰部に軽く触れて焦らす

身体がビクビクと反応して早く触って欲しいようだ

Tシャツを捲って顔に被せた

みくる「うふ涼宮さん気持ちいいでしょう？」

耳を愛撫してる

毎回恒例の可愛いブラを外す 朝比奈さん側の左乳首を愛撫して攻める すかさず

朝比奈さんがやってきた!!!

お互いの舌を絡めながら乳首を舐め倒す 乳首を中心に濃厚なキスだ

みくる「あん チュ レロ はあ あん 綺麗な胸でしゅね あん♡」

ハルヒ「うう うあん はああん やめて」ビクビク

ハルヒの右手は俺 左手は朝比奈さんがそれぞれ自分の下にして身動き出来なくなっている

ハルヒ「も もうらめ あん そこ うう」

みくる「涼宮さんいいなあ／／／」

俺は身体の半分以上をハルヒの上に乗せシヨーパーンのチャックを下ろした

朝比奈さんの指をハルヒの陰部へ誘導して触らせる

俺は目を見ながら朝比奈さんの太腿を触る

抵抗してこないイケルのか？表情をチエックしつつ陰部を触るパンティをズラして……

濡れている　グチヨクチヨクチヨいつもの陰部とは違う新鮮な音色を奏でる

みくる「あん　涼宮さ　はああん　気持ちいいでしゅねー　こんなに濡れてます

よおー♡」

ハルヒ「みくるちゃ　ん　はああん　だ　だm／」

みくる「しゅ　じゅみやしゃん　なれて　んますね　ん　あ　ソコ　あ　あxん

いっ」

片手で朝比奈さんの陰部

頭の裏を通してハルヒの左乳首を弄る

朝比奈さんで見つめ合ってる　目がイヤらしい

お互い良心と闘いながらデイープキスをする

朝比奈さんの指が激しくハルヒのクリを刺激してるのがわかった

ハルヒ「も　もう　ダメ　い　さわ　あ　い　い　く　う　うあ」

ビクンビクンビクビク

ハルヒは動けない中でも腰を浮かせてイッたようだ

抱きついてきたが脛が重そうだ 早起きだったからな 数分も経たずに腕枕の中

眠ってしまった

みくる「効いてきたみたいですね」

キヨン「え」

みくる「薬です」

天使は意地悪そうな顔で俺を見つめた

キヤンプで悪魔

キヨン「え」

みくる「睡眠薬ですよ　でも安心して体に害わないですよ」

キヨン「い　いつですか？」

みくる「ビールに入れちゃいました♡」

入れちゃいましたじゃねーだろおおー

悪魔かよ天使じゃなくて悪魔だ

確かにビール開いてたが

朝比奈さんがこちらにやってきた

みくる「わたしもおしっこでますう♡」

キヨン「そそそうなんですか　俺はハルヒを見てますね」

みくる「私の　ア　ソ　コ触った事　涼宮さんにチクつちやいますよ」

キヨン「ダメですよ」

みくる「キスもされましたあ」

キヨン「すすみません」

みくる 「これから私のゆー事聞いてくれますかあ?♡」

キヨン 「き 聞いたらハルヒに言わないでくれますか?」

みくる 「キヨン君次第ですうー」

キヨン 「お願いです ハルヒには黙ってて下さい」

みくる 「うふふふ 仕方ないです でも信用してくださいね」

キヨン 「ありがとうございます」

みくる 「おしっこするんで 脱がしてくらはい♡」

キヨン 「え」

みくる 「涼宮さあーん」ユサユサ

キヨン 「お 落ち着いて下さい」

足を高く上げるように指示される

みくる 「まずは靴下 おねがいしますねえー」

キヨン 「は はい」

二個目を脱がしたところで

みくる 「舐めて」

キヨン 「え」

みくる 「爪先だけですよ♡」

キヨン「とと隣にハルヒが」

ユサユサ

キヨン「舐めさせて頂きます」

レロレロチュパチュパ

みくる「キヨン君 上手いですね そうやって涼宮さんの舐めましたあー？」

キヨン「はい」

みくる「素直なキヨン君可愛いですうー 次はワンピース」

万歳状態から脱がせる とんでもない谷間がそこにある

みくる「このホクロはキヨン君が見つけたんですよ ♡」

キヨン「いや その ええ」

みくる「涼宮さんの谷間とどっちが魅力的ですかあー？♡」

地獄だ 悪魔だとんでもないデビルサタンが降臨した 言える訳がない嫌な予感

しかしなない 唾を飲み黙り込む

みくる「もおーでもおーこれからも時間はたつぷりありますからねえー」

キヨン「きよ 今日だけですよね」タラー

みくる「彼女の前で堂々と浮気して 私を弄んだのにですかあー？」ツン

キヨン「朝比奈さんの谷間が凄いです」アセアセ

みくる「キヨン君可愛いですう 早く裸にしてください♡」

朝比奈さんを素っ裸にした 胸も大きいのは周知の事だが乳輪も大きくエロさを増す また唾を飲み込む

みくる「舐めさせてあげますからねえ おしっこ飲んだら♡」

キヨン「え？」

そう告げられ腕を引っ張られる ブルーシートを持つてくるように指示されて

みくる「この辺がいいなあー」

キヨン「はい」

テントが見える位置だ 脚を広げアソコを舐め回す

みくる「舐めて んん すストツプ♡」

言われるがままに愛撫を止める

みくる「吸い付いてください♡」

チユー

みくる「零したらダメですよー♡」

うう 凄いい勢いだ 一生懸命飲んだが大量に零した

みくる「ひどいですうー 私の身体に跳ね返ったの全部舐めて下さいねえ♡」

俺は頑張って舐めた いやいやアソコ舐める 恥ずかしい 舐めてる途中に脚で

ロックされた

みくる「んんはっ♡ いいよキョン君♡そこっ」

全力で舐め続ける 息が出来ない苦しい

みくる「もっ そう ソコ じよーずです♡」

頭を思いつきり押し付けられる

みくる「い イキますう イグうー♡」

はあはあ はあはあ

みくる「はあはあ よく出来ましたねえ ご褒美に乳首を舐めさせてあげましゆ

よー」

んはあ ちゅ ちゅば こりこり はあはあ

みくる「ん ン気持ちいいですよ 涼宮さんのとどつちがいいですかあ？」

体が固まる 思考を止め

キョン「朝比奈さんです」

みくる「よく出来ましたあ キョンくんのアソコが我慢出来なそおーですね 痛いで

しよ♡」

キョン「は はい いつもより」

みくる「効いてきたんですねえー」

思考を止めても思考する……盛られた

みくる「おっぱいを舐めて吸って弄くりまわして挿れてもいいんですよ♡」

キヨン「でも」

みくる「うふふふ 涼宮さん 可愛そうですね♡」

全力で朝比奈さんのおっぱいを弄くり倒し 腰を動かす 快感より 射精したくて
しようがない

みくる「あ すごい 凄い きよん くん あんあん♡」

悪魔の顔を見れない おっぱいに集中する

キヨン「おおあばい 弾力はあるはあすごい」

みくる「イク とき 行って くd はあはあ さあい♡」

キヨン「も もう」

みくる「ま あんまだ ン ダメですよ あんいい」

ぐっ さつき出してないしもう我慢出来ないあああ

脚でガツチリホールドされ抜く事が出来ない

出してしまった

朝比奈さんのアソコの中に

みくる「私まだイッてないのに 一回抜いて下さあい♡」

キョン「は はい」

みくる「指でゆっくりかき混ぜて♡」

キョン「は はい」

みくる「ん あ あん キョン君が な 中に たくさん♡」

凄くエロい ハルヒにもまだした事ないので

みくる「もういつかいですね♡」

抱きつかれ アソコを握られ 押し込まれた 朝比奈さんの手がヌルヌルして気持ち良かった

みくる「あ ん さつき より きょんくん ので なかがあん ソコ もっと♡」

頑張つて腰を動かす苦しい で でも 締めまり具合がハルヒのとも違って う う

みくる「また い くと き いうん ですよ♡」

はあhあhhあはあ やべ気持ち良くなってきた

大量に射精したアソコの中はドロドロで圧迫感があり吸い込まれる ブルーシートに愛液と精子の混ざりあつた液体がドロドロ垂れてるのがわかる

ゴクツ ハルヒに飲ませたい ハルヒに抱きつきたい

みくる「んんー あん すずみ やさあんの あん 事

か んいいがえた でしょ」

朝比奈さんにも今度お仕置きしてやるっ くだが
指が伸びてきた 乳首を抓られる 痛い

潤んだ瞳 頬は紅く凄い色香の悪魔だサキユバスめ

キヨン「ま また 俺」

みくる「わ わたしもお あxん くる あ また なkに

イクうーーー」ビクンビクン ビクビク

ジュボジュボ ダラー

また中に二回連続で こんなに たくさん

みくる「しゅごい きょんくん 癖になり そう♡」

癖になったらダメでしょーが

みくる「おんぶです♡」

後ろのおっぱいの圧着が凄く くそ

みくる「川で流しましょう♡」

キヨン「は はい」

日差しは箇所は暑く 水温も高く気持ちいい おんぶしながら朝比奈さんの肌を綺

麗に川水で流す

戻る途中で手を握られた 戦慄が走る どうやら天使の腹の中は真っ黒なようだ
ハルヒの陰毛なみだ

テントで静かに服を着せてあげる

ハルヒ「ん んー」

キヨン「お おはよハルヒ」

ハルヒ「あれ」

キヨン「寝ちやったんだよ」アセアセ

ハルヒ「そうだったかしらー ビールって凄いわね」

みくる「そうですねー」

ハルヒ「なんで二人とも髪濡れてるの」

みくる「川でキヨン君と洗ってきました♡」

ハルヒ「私が寝てる間になにしてたのよ」イラッ

キヨン「あ 汗かいたから頭と顔を洗ったのさ」

ハルヒ「なんか怪しいわね」ムッ

みくる「嫉妬してる涼宮さんも可愛いですう♡」

ハルヒ「いいみくるちゃん キヨンと二人つきりはダメよ」

みくる「なんでですかあー？」

ハルヒ「襲われちゃうかもしれないでしょ／＼／＼」

襲われたのは俺です

みくる「私が襲うのはいいですかあー？」

おい勘弁して下さい

ハルヒ「ふふ みくるちゃんはそんな事しないわよ」

みくる「なら良かったですうー♡」

キヨン「そうだぞハルヒ」アセアセ

ハルヒ「キヨンダツコしてー」

キヨン「寝起きはいつも甘えん坊だな」

ダキツ チュー

みくる「まあ涼宮さん しゅごいですねー」

ハルヒには見えないように俺を睨みつけてくる

ダツコしてる指を触られる 悟られないように努力を続ける

みくる「あたしもですー♡」

ハルヒに抱きついてたフリをして尻をギュツと握られ睨まれる 尻ならまだ良かった

アソコを服の上からさすられる

ハルヒ「まだ眠いー」

首元でダラけてるハルヒの首に優しくキスをする
 チャツクを下げられた 髪を濡らして荒れている為表情が見えにくい 恐怖を感じ
 る

キヨン「よ 夜寝れなくなっちゃうぞ」

チュ

ハルヒ「からだ 重いの」

みくる「明日も休みだから大丈夫ですよねー♡」

ハルヒ「うん」zzz

キヨン「……」

ピンチだ 手は塞がり アソコを弄ばれてる

薬の効果か？勃起してしまう うっ

みくる「お仕置きですね チュ」

ジュリユジュユヌミヤグチュグチュジュルル

フェラされてるしかも音を出して テントの中に響く 大自然の中 川のせせらぎ

ぐらいしか外からの音が聞こえない

ダツコされてるハルヒのお尻の下で俺のアソコを啜える悪魔 唾液をタップリ含ん

で口を開け 顔付近に来て口を奪われた

みくる「うふふふ キョン君ったら♡」

ゆつくりと手でしごかれてる

みくる「キョン君はどの態勢で私を襲いたいですかあー?♡」

キョン「む無理ですよ」

睨まれる 朝比奈さんの怒る表情は怖い

みくる「ねえー小さい時ってよく友達を持つてるの羨ましくて自分も欲しくなり
よね 自慢もしたくなりますよね?」

キョン「た 確かにそうゆうのありますね」タラー

みくる「うふふふ 選んでください♡」

キョン「なななに言ってるんですかハルヒの前で」アセアセ

みくる「うふふふ じょーだんですよ♡」

目が笑ってない アソコをギユツと握られる

みくる「私の身体でいっぱいにさせたらどうでしょうねー♡」

キョン「そそそんなこと」

みくる「楽しみにしてて下さいね♡」

キョン「か勘弁して下さい」

みくる「とりあえず涼宮さんを下ろしたらどうです♡」

キヨン「は はい」

ハルヒを仰向けで寝かせる

みくる「いい事思いついちゃいました♡」

嫌な予感がする

みくる「これで後ろから挿れて下さい♡」

流石に無理だろ 朝比奈さんはハルヒの上に四つん這いになりお尻を向ける

みくる「可愛い チューしちゃいます♡」

おいー起きるって

みくる「んー緊張感がないですよね♡」

又ギ又ギ 又ギ又ギ

絶望という言葉があつたらこうゆう時に使うようです みんなも人生でピンチに

なつた事あるだろ

きつと俺に勝てる奴はいない

ハルヒの顔の近くに朝比奈さんが迫り 膝をついてお尻を高く上げている 沈黙が

流れる 睨まれた

クチヨ 先端で濡れてる事を確認した ゆっくりと

グチヨ グチヨと 俺の精子が残っているのだろう

慎重に腰を動かす

みくる「ん んん んあ ん」

ハルヒの顔の近くで朝比奈さんは声を漏らさないように感じてるようだ

朝比奈さんのお尻はハルヒより大きく女性らしい

ハルヒにキスをしている 顔を舐め首にも

俺は動きを止めた 起こされたら困るからだ

無言でこちらを睨み 両手でハルヒの首を優しく包む

俺は焦りまた腰を動かす 手は元の床に戻り キスも辞めてくれた

朝比奈さんの腰が仰け反り始めた ビクビクしている 音を立てないように腰を動

かし続ける

ビクンビクンビクン

みくる「っーーーーー 気持ちよかったですね♡」

その笑顔で俺もイッた ウエットティッシュで優しく吹いてあげる 垂れないよう

に素早く

ようやく満足したのか裸のままハルヒに添うように寝てしまった

そろそろ火が危ないかもな 様子を見にテントを出る

みくる「可愛い寝顔ね 涼宮さん」

ユサユサ

ハルヒ「ん キヤッ」

みくる「おはようございます」

ハルヒ「おはよ 頭がちよつと痛いかも」

ガシッ

ハルヒ「え」

みくる「これ頭痛薬です 飲んで横になってみて下さい」

ハルヒ「ありがとう ちよつと

チュ レロレロ ゴクン

みくる「飲みやすいかと思いましたが」

ハルヒ「嫌よ 離して キヤ」

チュチュパ レロッ

みくる「涼宮さんの乳首大きくなりますね」

ハルヒ「ん あ ん」

ビクンビクン

みくる 「なんか凄い反応ですう」

ハルヒ 「ちよ やめて キョ キョンは」

みくる 「外で火でも見てるんじゃないですか」

ハルヒ 「私も行く キョ\$☒\$☒\$!☒\$」

ダキツ

みくる 「ん 涼宮しゃん の 口 甘い」

チュ チュー クチャネチャ ビクンビクン

ハルヒ 「や おね が あんさわ ないで ん」

みくる 「うふふ いいんでしゅか? キョン君に浮気した事言っちゃいますよ」

ハルヒ 「し あん はあ してない」

クチヨクチヨ ビクビク

みくる 「こんなに濡れてますよ?」

ハルヒ 「ダ だめ い いわない で あん おね がい」

みくる 「二人だけの秘密ですね?」

ハルヒ 「う うん はあh あん」

クチヨクチヨ コリコリ ペロペロ

みくる 「さ 脱いでください」

ハルヒ「な なん d w みくる t y はだ か」
みくる「あつかったんです」

ハルヒ「わ わたし も あつい あん」

クリクリクリ ヌギヌギ クチヨクチヨ

みくる「気持ちいいですか 早くしなきや戻ってくるかもしれないですよ」

ハルヒ「だ だめ おしお き いやあ あん」

みくる「言わないであげるから 私のも舐めて下さい」

ハルヒ「ン あ n チュ クチヨクチヨ きもち いい？」

みくる「とても 二人で あん イく たいはあはあ h」

ご飯などの後片付けをする なにやらテントが騒がし様に見えたが二人とも寝てる

筈だ

反省というかこれからの日常生活は大丈夫かと心配になり思いを巡らせていた
足りない脳みそで考えてると睡魔がやってきた

ハルヒ「すごい みくるちゃん／／／／」

みくる 「気持ちよかったでしゅね♡」

ハルヒ 「キョ キヨンに言ったら怒るからね」

みくる 「いわないですよ」

ハルヒ 「ほ ほんとによ」

みくる 「涼宮さん次第ですけどね」

ハルヒ 「え なんて」

みくる 「わたしのおー言う事聞かない時は知りませんよ」

ハルヒ 「ちよ ちよつとお願いよ」

みくる 「涼宮さんなら大丈夫だと思います」

ハルヒ 「え ええ」

みくる 「ベトベトですわね」

ハルヒ 「う うん」

みくる 「川いきませんか 大自然で野生ですう」

ハルヒ 「で でもキヨンが」

みくる 「うふふふ キヨン君ねー」

ハルヒ 「い いくわ 汗かいたしね 気持ちよさそう」

みくる 「涼宮さん可愛いです♡」

ハルヒ「キヨン寝てるわね」

みくる「そうみたいですねえ」

賑やかな声が聞こえ目が覚めた　とんでもない光景だ　美少女二人が裸だ
川で戯れあっている

あの感じだとチクられてはいまい

二人がテントに戻り服を来てやってきた

ハルヒ「キヨン」テツテツテツ　ダキツ

みくる「暖かいですね」

体温の下がった二人は焚き火で温まる　辺りは日が暮れ薄暗くなってきた

みくる「花火ありましたよお」

ハルヒ「いいわね　やりましょう」

キヨン「危ないから人に向けるなよ」

バチバチ　ヒューーパン　ポンッポンッ

キヨン「ゲホッゲホッ」

ハルヒ「あははは　キヨン避けて」

キヨン「煙で目が沁みる」

みくる「わあー星が綺麗ですね」

キヨン「満点の星空だ」

ハルヒ「辺りが真っ暗だから星が見えやすいわね」

キヨン「星座詳しいのか？」

ハルヒ「ううん あんまり」

みくる「UFOさん来ないですかね」

キヨン「今日も隠れてそうだな」

ハルヒ「それもそうね」

キヨン「にしても真っ暗だな 本当になにもない」

そのまま夕食を食べた 残り物のカレーや肉や野菜を焼く とても美味しい二人共

も満足してるようだ

談笑し意味のない携帯を見ると夜中になっていた

みくる「そろそろ眠いですう」

キヨン「そうですね」

ハルヒ「私も」

朝比奈さんが先にテントへ向かった

ハルヒ「キヨ キヨン」ヒソヒソ

キヨン「なんだ」

ハルヒ「私から離れないで　ずーっと」

キヨン「もちろんだ」

ハルヒ「今もよ」

キヨン「ああ」

ハルヒ「あ　あと今日はまだ　そのおー私の中に出してないけど大丈夫？／／／」モ

ジモジ

キヨン「朝比奈さん居るからな　二人の時にHしようか」

ハルヒ「う　うん♡」

テントに入り静かになった　ハルヒが抱きついて来た　静寂が流れる　視線を感

じる　俺は寝たフリをして目を閉じた　しっかりと抱き合って

そのまま辺りが明るくなり　朝を迎える　何もなかったようだ　二人とも可愛い寝

顔だ

朝食を食べ　テントを片付けゴミを集める

お昼ごろ迎えが来た　また長い家路への旅だ

マンション

ガチャ ユサユサ

ハルヒ「キヨン起きて／／／」

キヨン「ん んあ」

ダキツ チューチチュ

キヨン「あれ」

ハルヒ「ふふ おはよ♡」

キヨン「ん」

ハルヒ「寝ぼけてるんじゃないわよ 学校よ」

キヨン「今何時だ」

ハルヒ「6時よ」

キヨン「早くないか」

制服姿のハルヒが無言で俺の乳首に指で優しく弄り口や首を愛撫する 寝ぼけて頭が回らない

ハルヒ「気持ちいい?／／／」

キヨン「ああ もちろんだ」

ハルヒ「キャンプで出してないもんね 学校行く前にね／／／」

キヨン「凄い興奮するぞ ハルヒ好きだ」

ハルヒ「私もよ／／／」

俺の事を思つて朝早くからHしに来たようだ

こんなにも思つてくれる愛する彼女を失いたくない

ハルヒ「家族が起きる前に／／／」

キヨン「ああそうだな」

ハルヒ「もう勃つてるじゃない♡」

キヨン「勃たない方がおかしい」

愛撫されながらポケットに手を伸ばし紫色の妖艶なパンティを見せてきた

ハルヒ「着けて来なかったの／／／」

キヨン「Hな子だな」

俺の上に跨り片手にアソコを持って挿入された

制服の乱れはなく逆に興奮する

ハルヒ「ああ ん あ わたし も 気持ちいい／／／」

抱きついて来た 激しく腰を動かす

ハルヒ「ダメ あ あゝん 声出ちやうの♡」

口で塞ぎ声が漏れないように努める

射精したい衝動が襲ってくる

ハルヒ「わ わたし さきにいつちやいそう」ビク

キヨン「一緒にイこう」

ハルヒ「あん はあhあ もうイぐ」ビクンビクン

グチヨグチヨグチヨ

ハルヒがイッたのを確認してすぐ中に出した

ハルヒ「す すご いもう 学校 行きたくない／／／」

キヨン「そうだな」

ナデナデ

ハルヒ「キヨンがいい♡」

キヨン「ん？」

ハルヒ「なんでもないわよ／／／」

キヨン「何か隠してるのか？」

ハルヒ「んーん キヨン好き♡」

チュツ

ウエットティッシュで拭き朝シャンをして家族とハルヒを交えて朝食を食べる
キヨン母「どお　ハルヒちゃん専用のお椀」

ハルヒ「嬉しいです」

キヨン母「いっぱい食べてね」

ハルヒ「はい」

お袋が弁当をそれぞれに渡してきたハルヒが嬉しそうだ

ガチャ

妹「いつてきまーす」

ハルヒ「いつてきまーす」

キヨン「いつてきます」

キヨン母「いつてらっしやーい」

自転車を押しながらいつもの坂を二人で歩く

ハルヒ「ねえ　キャンプの時に私寝てる間になしてたの？」

キヨン「川で顔を洗ったんだ」アセアセ

ハルヒ「みくるちゃんと？」

キヨン「そうだな」

ハルヒ「変な事してないわよね？」

キヨン「もちろんだ」

ハルヒ「心配なのよ」

キヨン「ハルヒは何もないか？」

ハルヒ「も もちろんよ」

キヨン「俺も心配だ」

授業の間の休み時間にトイレに行くとき古泉がやって来た

古泉「キャンプは楽しめましたか？」

キヨン「ああ」

古泉「閉鎖空間ですが 恐らくキャンプをお楽しみ中ですが発生しました」

キヨン「そそうか」

古泉「時間は短かったですですが手強かったです

一体なにがあっただんですか？」

キヨン「な なにもなかったぞ」アセアセ

古泉「涼宮さんの事ですよ？」

キヨン「ああ そうだなにもない」

古泉「あなたは涼宮さん選ばれた人です 私個人としてもあなたを信用していません

大事にしてあげて下さい」

キヨン「もちろんだ 後でお土産話しをしてやる」

古泉「ええ 楽しみにしてます」ニコッ

いつも通りの日常を終え 昼休みをこれまたいつも通りにハルヒと弁当を食バイ
チャイチャしていた

え…… 長門が居る え？ すぐに消えた ハルヒは全く気づいていない

なんだ？ 見間違いか？ 疑問を持ったまま放課後を迎え部室に足を運ぶ ハルヒは進
路相談で担任に呼ばれていた

え…… 長門が現れた

キヨン「い 居たのか」

長門「そう」

キヨン「昼休みもか？」

長門「そう」

キヨン「今日だけか？」

長門「毎日」

キヨン「え？」

長門「毎日」

キヨン「姿を消してたのか？」

長門「そう」

キヨン「え？毎日姿を消して居たのか？」

長門「そう」

キヨン「ずっと？」

長門「昼休みと放課後」

キヨン「ずっと見てたのか？」

長門「そう」

キヨン「俺とハルヒが二人の時もか？」

長門「そう」

キヨン「え？ キャンプは？」

長門「行つてない」

キヨン「学校だけか？」

長門「そう」

キヨン「なんで姿を消してたんだ？」

長門「あなたと涼宮ハルヒが二人の時は性行為が行われる可能性が高い為姿を消し

た」

キヨン「え？え 見てたのか？」

長門「私の役目は涼宮ハルヒの観察」

なんだと 俺がハルヒとあんな事やこんな事をしてる間長門はいつもの椅子に座ってたのか

キヨン「しかしだな」

長門「何か問題が」

キヨン「なかつたが」

長門「貴方は涼宮ハルヒのトリガー 小規模な情報爆発が起きた」

キヨン「なんだと」

長門「観察が必要だった」

キヨン「どんな情報爆発だまたループとかか？」

長門「違う」

キヨン「なにが起きた」

長門「貴方と涼宮ハルヒと朝比奈みくる 私の四人に改変が行われた」

キヨン「なんだと」

長門「貴方は…… 涼宮ハルヒはMに

朝比奈みくるはSに 私は恋愛に目覚めた」

キヨン「え？」

長門「簡潔に説明した」

キヨン「ハルヒがそう望んだのか？」

長門「必ずしもそうとは限らない」

キヨン「ハルヒが望んだ事があのトンデモパワーじゃなかったのか？」

長門「わからない観察継続が必要」

キヨン「いつからだ？」

長門「二週間前の土曜日 貴方と涼宮ハルヒが付き合い出してから」

キヨン「……………」

えーっつと ハルヒは愛する彼女に 朝比奈さんは悪魔に …… 俺はなんだ？

え まあいい

長門は…………

キヨン「恋愛に目覚めたのか？」

長門「そう」

キヨン「どんな風なんだ」

長門「今は普通」

キヨン「え？」

長門「感情はエラーのはず」

キヨン「情報思念体とやらにもエラーの原因がわからないのか？」

長門「そう」

キヨン「元に戻る方法はないのか」

長門「仮に貴方と涼宮ハルヒが別れたとしても改変が戻らない可能性が高い」

キヨン「結局トンデモパワーって事か？」

長門「そう」

キヨン「やはり長門は宇宙人ではないってことだな」

長門「私は生命体コンタクト用ヒューマノイド・インターフェイスで間違いない」

長門は俺の事が好きなのか？付き合いたいと

朝比奈さんの件もあるし不味い気がする

しかし長門から恋愛とかの雰囲気は感じられない

長門「今日の夜に私のマンションに来て」

キヨン「え」

長門は席に戻る

ガチャ

みくる「こんにちわあー 今日三人ですか」

キヨン「ハルヒもそろそろやって来ると思います」ドキドキ

みくる「はあ」

長門「……」

朝比奈さんの溜息が怖い 俺は考えもせずに発言してしまった

キヨン「朝比奈さん過去に連れてつてもらう事は可能ですか？」

みくる「んーそーですねえ 涼宮さんと別れてくれたらいいですよお♡」

キヨン「え」

長門「辞めた方がいい世界が消滅する可能性がある」

キヨン「え」

みくる「冗談ですよ 冗談です♡」

本を読んでいる長門に朝比奈さんが睨み付ける

と とりあえず長門は味方の気がする 夜にマンションに行つて助言を貰おう も

う考えがまとまらない

ガチャ

古泉とハルヒがやって来た

みくる「お茶淹れますねえー」

所定の椅子に腰掛ける 朝比奈さんがお茶を持って来た 悟られないようにお茶に指を入れて微笑んでる

古泉 「御三方キャンプはいかがでしたか？」

ハルヒ 「た 楽しかったわよ」

キヨン 「大自然だったな」

みくる 「色々な体験が出来ましたよね♡」

キヨン 「そ そうだな」

ハルヒ 「そ そうね」

古泉 「お二人とも息がピッタリですね」

みくる 「可愛いですよねえ」

古泉 「おや そこはお似合いではと言いますか」

みくる 「うふふふ そうですか」

長門 「……」

古泉 「朝比奈さん何か雰囲気変わりましたね？」

みくる 「そんな事ないですよ ねっ♡」

こつちを見ないでくれ 椅子もいつもより近い気がする 気のせいではない

キヨン 「なにを言ってるんだ古泉」

ハルヒ「そ　そうよ　いつものみくるちゃんよ」

古泉「そうですか　申し訳ございません」

みくる「大丈夫ですよ　気にしないでくらしさい」

微妙な空気だ　原因は長門から聞いて把握したが考える時間がまだない　キャンプが不味かった

とにかく長門だ　考えるのはそれからだ

学校を後にし家に着いたが落ち着かない　制服のまま長門の家に向かった

ピーンポーン　ガチャ　ウイーン　ガチャ　パージ

キヨン「長門あがる……………」

すぐに気づいた去年の年末　忘れもしない三日間

その時の長門だ　メガネもかけている

長門「入って／＼」モジモジ

キヨン「ああ」

この前と同じ場所に座る　長門がお茶を持って来た隣に座る　近い

キヨン「きよ　今日は俺に何か要件があつたのか？」

長門「あ／／／／／／／／／／」

視線を逸らし俯く 頬が赤い 沈黙が続く

キヨン「……………」

長門「その／＼／」

キヨン「ん なんだ？」

長門「手 繋ぎたい／＼／」

キヨン「だ ダメだ 俺はハルヒと付き合ってるからダメだ」アセアセ

長門「……………」

キヨン「な 泣くな こ こうでいいか？」

長門「／／／／／／／」

こっちの長門は頼れない…………… な

頼りにしに来たんだが

キヨン「そっういえばなんでキャンプ来なかったんだ？」

長門「……………」

照れ過ぎだろ 可愛いんだけどおー

長門「その／／／／消す可能性があつたから」

キヨン「え」

長門「……………」

ピロロロ ハルヒからのメールだ ポチポチカチカチ
キヨン「消すつて消す？」

長門「あ／／／／うん／／／／」

物騒な事言つといて照れるな 一応確認するか

キヨン「誰を？」

チラ

長門「……………／／／／」

会話になんねえー 減つたお茶を足してくれ

ピロロロロ ポチポチ カチカチ

長門「携帯 置いて／／／／」

キヨン「ああ」

ピロロロロ ポチポ

長門「携帯置いて」

キヨン「わかった」

沈黙が流れる 抱きついてきた

キヨン「……………／／／／」

P r r r r r r r r r r 電話だ手に取ろうとする

長門「出ないで／＼／」

キヨン「え」

長門「出たら／＼／」モジモジ

キヨン「……………」

長門「消す／＼／／」

おいおいおいおいー ー こいつも悪魔じゃねーか

ハルヒの電話に出ないと心配するだろ

キヨン「ハルヒからなんだ」

長門「私には関係ない／＼／」

キヨン「わ わかった 明日の昼休みに学校で話そう」

長門「帰らせない／＼／」

p r r r r r r r r

キヨン「え 帰るよ」アセアセ

長門「泊まっついていって／＼／／」

p r r r r r r r r

キヨン「た 頼む少なくとも今日は無理だ」ドキドキ

長門「……………」

泣くなあー俺はキャンプで思いしつたんだ

もう二度と過ちを犯したくない

ギューー

辞めてくれえー俺も赤くなる 冷静に冷静に

と とにかく学校での長門だ

キヨン「今日はダメだ」

長門「あ あした／＼／＼／＼」

キヨン「そ そうだな 明日の部室で」

長門「続き／＼／＼」

キヨン「ち 違って 違う 俺の相談を受けてくれ」

長門「じゃ 帰さない／＼／」

P r r r r r r r r r

キヨン「ま まず順序つてものがな」

長門「二人とはHしたのに」

キヨン「え」

長門「わたしは？」

キヨン「え」

ハルヒとは…… 見られたのでわかる 朝比奈さんとはキャンプに来てないか
ら…… なぜだ

長門「バレなきや問題ない」

キヨン「え」

チユ

キヨン「ちよ タイム タイム／／／／」

長門「なぜ？」

キヨン「ま まず朝比奈さんと俺は何もしてない」

長門「私に嘘が通用するとしても」

キヨン「え」

長門「私は何でも知っている」

ちよ怖いんですけど 何言ってるの え 不味いよ

チート過ぎるんですけど え どうしよう

P r r r シーン

キヨン「え なんかしした？」

長門「電源を切った」

キヨン「だ ダメだ」

長門「壊す？」

キョン「お お落ち着け」

長門「邪魔させない」

キョン「れ 恋愛に目覚めたんだろ？」

長門「恋愛と言ってもそれぞれ」

キョン「ふ 普通のはどうですかね？」アセアセ

長門「貴方は涼宮ハルヒと朝比奈みくるによって快樂を得てしまった 普通では勝てないと判断した」

キョン「お 俺は普通が好きだぞ」

長門「そう言つて通常よりも過激な行為を行なつていた」

キョン「か 変化が起きたからじゃないのか」

長門「言い訳」

キョン「と とにかくだ ハルヒには内緒にしてくれ
でなければもう来ない」

長門「私自身もそう望む世界が消滅する可能性が高い」

キョン「頼むぞ信用してろぞ」

長門「私は今から貴方を操作する」

キヨン「え」

なにやら呪文を唱える 景色が変わった 声が出ない
うう眩しい ん？全てがわかる 謎の力の使い方を

目が覚めると裸の長門と抱き合い寝ていた

イツた 何度も何度も何度も何度も射精した 快楽が尋常じゃなかった シュチュ
エーションも様々で自分の思うままの行動が出来た 例えば？時間を止めたりだ
相手は長門限定だったが もう尽きた 動けない

長門「……／／／／」

キヨン「おはよう／／／／」

長門「うん／／／／」

キヨン「凄かった」

長門「うん／／／／」

朝4:00だ 可愛い方の長門になっていた
いきなり気不味い どちらの長門とも
プレーした どっちも良かった

キヨン「帰っていいか？」

長門「あ明日も／＼／＼」

キヨン「だ ダメだ毎日は／＼／＼」

長門「なんで？／＼／＼」

キヨン「好きになっただらどうするんだ」

長門「また来てね／＼／＼」

疲れた 死ぬ 今日学校行かないで寝る

静かに家に入り部屋を開けた ハルヒが居た

目を真っ赤にして 怒っている

バシン バシン ビンタされた 抱きつかれた

ハルヒ「どこ行ってたのよ」ウルウル

キヨン「わ 悪い」

ハルヒ「また私を置いて ううう」

キヨン「すすまなかつた」

ハルヒ「もう絶対に一人にしないで」

ガシツ

キヨン「ああ」

そのまま泥の様に眠ってしまった 古泉すまん

サイコパス

体が重い 愛する彼女からの目覚ましにも反応するのが辛い

お袋に学校を休む事を伝えてもらった

看病すると強く言っていたがお袋が駄目と言ったらしい 親御さんにご迷惑をかける

もつともだ 惜しむ表情が胸に突き刺さった

すまん

携帯が鳴ってるが手に取るのもめんどくさい

ピーンポーン

ピーンポーン

郵便か？悪いが不在伝票を頼む

ピーンポーン ピーンポーン ピーンポーン

人が寝てるのにイライラする

ピーンポーンピーンポーンピーンポーンピーンポーンピーンポーン

ピーンポーン

絶対帰らない意志表示か？このままでは最近のイライラを全て八つ当たりしてしま
う うるさい

ピーンポーンピーンポーンピーン

ガチャ

みくる「こんにちわ♡」

俺は玄関のドアを締めようとした 扉を足で締めれないようにされた

キヨン「具合悪いので寝かせて下さい」

みくる「ダメですよ お見舞いに来たんです♡」

キヨン「ありがとうございます でも今日は寝かせて下さい」

みくる「涼宮さんに言っちゃ キヤアー」

俺は疲れと苛立ちが頂点に達していた 髪を鷲掴みにし玄関に入れ扉と鍵を締めた
鷲掴みにしながら倒れ込んでる先輩に向かつて

キヨン「言ったら殺す」

みくる「ひい じよ 冗談ですよ ど ドツキリですか

もおーです」

ミゾ落ちへ一発

みくる「ゲホツゲホツ」

キヨン「本気です」

みくる「うう絶対許さないです チクってやる」

鷺巣かみにしたまま引きずって風呂場へ連れて行く

俺の右手を懸命に両手で握り悲鳴を上げている

浴槽の溜まった水に顔面を押し付ける

もがいている 一旦顔を出させ息をさせる

みくる「ぷはあーはあはあはあ」

間髪入れずにもう一度突っ込む苦しめばいい 抵抗の力が弱まってきた

キヨン「内緒にしてくださいね？」

みくる「げほっげほっげほっ」

答えない 腹にパンチを一発入れる 崩れ落ちそうだが髪を鷺掴みにしてる

顔は紅く紅潮し噎せている 呼吸は幾分戻ってきたようだ

キヨン「内緒にしてくださいね？」

同じ問いを投げかける

みくる「絶対にはあはあ 許さない 言って 世界を消滅させてやる」

キヨン「続けます」

みくる「お お願い やめて」

また浴槽に突っ込む 抵抗の力がなくなりそうな
ところで顔を引つ張りあげる 制服はずぶ濡れだ
みくる「はあはあご ごめんな さ さい」

お尻を引つ叩く

みくる「許してくだ はい はあはあ」

乱暴にパンティを下げる

キヨン「挿れていいですか？」

みくる「いやいやー」

また浴槽に頭を突っ込む 頭を上げ呼吸を整える前に挿入した

みくる「っーがあ はあ い いた い」

お構いなしに腰を振る また浴槽に顔を突っ込む

バシヤバシヤグチヨグチヨバシヤバシヤ

みくる「ご ごめはあ あ は x s げほっ」

パンパンパンパン

みくる「うう やめて やめてくだ」

キヨン「グチヨグチヨですね気持ちいいですか？」

みくる「い いやあ」

丸くいやらしいお尻を何度も叩く

キヨン「気持ちいいですか？」

みくる「あ んあ きもち いい です」

キヨン「変態ですね」

浴槽に突つ込む 何も言えなくなるようにしてやる

射精したくなってきた 髪を鷲掴みにし啞えさせる

頭を乱暴に前後させ射精した そのまま数分続ける

キヨン「零したら腹を殴る」

みくる「んん」

ゴツクン タラー ドスツ 気を失った シャワーを顔にかける

みくる「ごほっごほっ」

キヨン「おはようございます」

泣いている びしょ濡れの髪を優しくドライヤーで乾かしてやる 俯いている

キヨン「朝比奈さん」

みくる「ひひい」

キヨン「ん？ドライヤーが嫌ですか？」

みくる「そ そそなこと」

キヨン「過去に連れてつてもらえますよね？」

後ろから抱きしめ首へ愛撫する

みくる「む 無理です 上の許可がないと」

拳を振り上げる

みくる「ご ごめんなさい い いつですか？」

キヨン「キャンプの朝です」

みくる「わ わかりました」

キヨン「俺の指示に必ず従うこと」

みくる「ひや ひやい」

キヨン「逆らったらハリハルヒに何かしたら殺しますからね」

ドスツ ゲホツゲホツ

時空を超えて過去に来た…… と思う

集合予定の駅へ向かう道中のようだ 強引に手を引き キャンプ当日朝比奈さんの
向かって来た方向で待ち伏せをする

みくる過去「あれっ あっ」

いきなりミゾ落ちを思いつきり殴った

目が白目を剥いて倒れ掛かってきた 朝早いので人通りがなく助かる

こつちの朝比奈さんは震えている 携帯を奪い

持参した大きなバッグに詰め込む 目的地は学校だ

学校が拘束しやすく近隣にバレにくいであろう

キヨン「この奪った携帯でこつちの俺に体調が悪くキャンプに行けない事を伝えて下さい」

みくる「は はい」

元気がなく虚ろのまま電話を掛け伝えている

もちろん監視の元に

部屋に着きバックを置く 椅子に座らせる様に指示をする

みくる「こ こうですか？」

キヨン「ロッカーにあるロープを持って来て下さい」

身動きが取れないように縛る 目と口にガムテープを貼り ヘッドフォンでラジカ

セから音楽を流す

これでキャンプに行けまい

ドサア

こつちの朝比奈さんが床に倒れた

お出ましか

大人みくる「貴方なに考えてるの？」

気づいたら居た 軽蔑の眼差しがわかる

キヨン「キャンプに朝比奈さんが行かなかつたら恐らく上手く行くと思ひまして」

大人みくる「本気で言ってるのかしら？」

キヨン「他にいい方法がありますか？」

大人みくる「あなたの行動の結果よ」

キヨン「だ だからこうして なんとかしよう」と

大人みくる「犯罪じゃない」

キヨン「え そうですか 俺はハルヒが居ればいいです 朝比奈さんが邪魔をした」

大人みくる「若気の至りよ」

ムカつく 腹へ拳を一発 前に倒れ込む 若気の至りだと 許さん

ロープで手を拘束しガムテープを口に貼る

キヨン「こんな胸元の開いた服装で」

激しく揉み 乳首を舐める 弄り倒す

凄いい抵抗だ 逆に興奮する 手を押さえ付けて 胸をがむしやらに吸う

キヨン「大人になって更に胸が大きくなったみたいですね」

凄いい弾力だ悪魔め 乳首も成長したのかな 吸いごたえがある 抵抗がウザくなってきた

ドスツ ドスツ 腹を再び殴った 嗚咽がガムテープ越しに伝わり静かになった

ヤカンでお湯を沸かす

沈黙が流れ ピューっつと沸騰したようだ

キヨン「これどう思います？」

震えながら目で辞めてと訴える

キヨン「内緒にしてくださいませよね？」

頷く ガムテープを剥がす

キヨン「素直な朝比奈さんですね」

大人みくる「うう キヨン君 まだ間に合うわ」

キヨン「誰が喋れと？」

踝あたりにチヨ口つと熱湯を掛けた 少量だ

暴れ回っている 楽しそうだ そつと優しく抱き寄せ口を奪う 優しくしてると抵

抗が弱い

キヨン「胸にヤカンでアイロン掛けしてみたいですね」
血の気が引いてる 恐怖で後退りしている

股を開きパンストを破く パンティをずらし挿入した
キヨン「声出したらヤカンを胸に置きましようかね」

大人みくる「ん んん」

パンパンパンパン グチョグチョパンパンパンパン

キヨン「未来の俺はハルヒと上手くいつてますか？」

大人みくる「は はい」

キヨン「この行動でどうなりそうですか？」

大人みくる「あ そ あ それは」

顔にビンタをしながら腰を動かす

キヨン「ちゃんと答えて下さい」

大人みくる「あ ん こ この時間軸だ だけなの ま まだわからない」

キヨン「未来に行つて喋れないように舌を切りましようか？」

大人みくる「ほ ほんとなの あ ん」

キヨン「どう報告するんですか？」

大人みくる「無事阻止して 丸く収まりました つて言うわ あん あ あん」

キヨン「んーイマイチ信用出来ないですね」

大人みくる「う ほ ほんとよ」

キヨン「この過去は俺に関係ないんでなんかしたいですね」

大人みくる「ん し 信じて お お願ひ」

涙ながらに訴えてくる いやらしい身体だ 机に乱暴に投げ背後から突く グチヨ

グチヨだ

キヨン「倒れてる朝比奈さんは起きないんですか?」

大人みくる「わ わたしがん はあ 居る時は」

パンパンパンパン

キヨン「拘束しなくていいから楽ですね」

大人みくる「も もうやめて」

キヨン「今日も気持ちいいですか?」

大人みくる「はあh はあ」

キヨン「はあ こっちの朝比奈さんも同じですか」

更に丸く大きいやらしいお尻を強く叩く

キヨン「気持ちいいですか?」

大人みくる「は はい」

キヨン「中に出していいですよね？」

大人みくる「だ だめ ぜ ぜつ だめ おね はあ あんだめ ですよ
く あ」ビクンビクン

適当に中に出してやった ぐったりして泣いている抱き抱え椅子にロープで縛った
うるさいのでガムテープで口に貼る 既に拘束している過去の朝比奈さんの後ろに
置いた

倒れこんでる朝比奈さんも後ろへ

視界に入らないように寄せた

辺りは陽が沈み暗くなってきた三人を見張っていると過去の朝比奈さんが起きたよ
うだ 体を動かさそうとしている

所持品のカバンから睡眠薬を取り出した これをキャンプの時に……

鼻を摘み息を出来なくする 苦しんでいる 口に貼っているガムテープを剥がし息
を吸い込んだ瞬間に口へ入れまたガムテープを貼る

…… 静かになった 家に届ける為に大人の朝比奈さんにバッグへ詰め込むよう
に指示をする カバンに鍵も入ってたし大丈夫であろう

もう一人は一応拘束しロッカーに入れ鍵を締めた

肩にカバンを掛け持つ 家まで大人の朝比奈さんの後を付いていく 従順だ 何かしてカバンの中身を傷付けられるのが怖いのだろう

ガチャ

朝比奈さんらしい部屋だ 可愛いらしくピンクを基調としている いい匂いがする
キヨン「布団に寝かせれば？」

大人みくる「は はい」

キヨン「さて部屋に戻ろうか」

大人みくる「い 嫌」

震えている 優しく抱き寄せる

キヨン「もう一人の朝比奈さん可哀想ですね」

大人みくる「い 行くわ」

キヨン「よかった ご褒美にキスをしてあげます」

チュチュレロチュ レロレロ タラー

大人みくる「トイレ行きたい です」モジモジ

キヨン「いいですよ」

ドアを締めようとするが締めさせない 逃げられるかもしれないからな 中々出ないようだ スカートを上げるように指示をする

キヨン「お腹にパンチしたら出ますかね？」

ジャー

キヨン「凄い勢いですね」

大人みくる「う　うう」

キヨン「そのまま股を開いて下さい」

大人「え」

顔にピンタする　股を自ら開いた　小さいバイブを挿れパンティを履くように指示する

キヨン「さて行きましょう」

大人みくる「た　立てないわ」

キヨン「電源入れてませんか？」

手を引っ張り連れて行く　アパートの鍵を締めて

内股でヨチヨチ歩いている　歩くのが遅いイライラする

試しに電源を入れる　立ち止まって　前屈みで凄い内股だお構いなしに手を引く

キヨン「学校が近くて良かったですね」

大人みくる「お　おねがい　取って」

キヨン「部屋までもう少しですよ」

大人みくる「む むりで す」

キヨン「ここに来る前に朝比奈さんを水攻めしたんですよ」

大人みくる「な なんてk こと を」

キヨン「大人なんでやはりお湯ですかね？」

大人みくる「ひい ご ごめんな さい」

キヨン「ほら出来た 無事到着ですね」

椅子に座らせ拘束する バイブを強めにする 身体が反応している どうやら感じているようだ

キヨン「この強さじゃイけませんよ？」

大人みくる「あん ぬ ぬい て」

ピンタをする

キヨン「この強さじゃイけませんよ？」

大人みくる「た たぶん あ はあ あん」

キヨン「舐めて欲しいですか？」

大人みくる「だ 大丈夫です」

耳元や胸元を愛撫する

キヨン「本当は？」

大人みくる「あっん ん いい いっぱい 舐めて欲しい です」

俺はロツカーの鍵を開けもう一人を出して目の前に置く Yシャツのボタンを丁寧に外し

大人の朝比奈さんを見つめながら乳首を引つ張る

大人みくる「お お ねがい 辞めて」

静寂の中ウイーンウイーン無機質な機械音がする

見てる前で胸を激しく愛撫し吸いまくる

パンティを脱がせ大人の朝比奈さんに白く染みが付いている所を見せた

キヨン「水攻めして中に出した時ですね 舐めて下さい」

大人みくる「うう」

キヨン「美味しいですよね？」

大人みくる「美味しいです」

そのままグツタリしている方に挿入した意識がないのもそえられるかもしれない
グチヨグチヨグチヨ 静寂の中いやらしい音が聞こえ始める 一方は機械で喘いでいる

キヨン「もつとバイブ強くして欲しいですか？」

大人みくる「だ だいじょうぶで です」

パンパンパンパンパン

最大の強さにした 身体が仰け反り

苦しそうだ 内腿を触ってあげる 一見外傷のないタイトなスカートが湿っている

キヨン「気持ちいいんですか？」

大人みくる「ち ちが あん あ い イク」

電源を止めた 身体がビクビクしている

マグロ状態の朝比奈さんもこの胸と締め具合は悪くない

キヨン「こつちを見て欲情してるんですか？変態ですね」

大人みくる「そ そんなこと ない です」

キヨン「また電源入れて欲しいですか？素直に答えた方がいいですよ」

大人みくる「お おねがいます」

電源を落としたままマグロへピストン運動を続ける 無理矢理口へ舌を入れ音を立

てて愛撫する

キヨン「朝比奈さんってHな身体してますよね？」

大人みくる「そ そんなこと ないです」

キヨン「見て下さいこの乳輪 エッチですね」

大人みくる「……………」

キヨン「つまらないですね」

寝ている朝比奈さんへピンタをする

大人みくる「や やめて」

キヨン「キャンプの時にハルヒの前でHしましたよね？」

大人みくる「はい」

ピンタをし 首に手をかける

キヨン「どうでした？」

大人みくる「凄く気持ち良かったです」

キヨン「普通じゃないですね」

大人みくる「キヨ キヨン君だって気持ち良さそうでしたよ」

キヨン「薬を盛るのも中々犯罪ですよね」

大人みくる「こんなことになるなんて」

キヨン「俺は脅されて…… 朝比奈さんが全て悪いんだ」

大人みくる「そ そんな」

キヨン「もういい」

再びパイプの電源を入れる 喘ぎ声が大きくなり始める マグロ状態と拘束悪くな

い

悲鳴にも似た声が聞こえ俺もイツた

キヨン「お掃除お願いします」

そう言つて髪を驚掴みにした

キヨン「どうです？久しぶりの味じゃないですかね？」

大人みくる「……………」

キヨン「何か隠してませんか？」

大人みくる「な なんでもないです」

キヨン「思つたんですよ 朝比奈さんの悪魔つぶりが凄いのでこの関係が未来でも続
いてると」

大人みくる「……………」

キヨン「ん？」

大人みくる「はい」

キヨン「素直ですね ハルヒにはバレてますか？」

大人みくる「バレてないと思います」

キヨン「ダメだとわかつてますか？」

大人みくる「はい」

キヨン「やはり悪魔だ」

辺りは明るくなり始め目的であるキャンプ阻止を果たしたのでそろそろ帰るか
朝比奈さんの首に手を添え抱きしめながら睨み

キヨン「さて帰して下さい」

大人みくる「わ わかりました」

キヨン「お湯で攻められなくて良かったですね」

無言のままいつもの時空を超えた

誰も居ない 朝比奈さんもだ 辺りは灰色に包まれている 閉鎖空間の様だ とり
あえず学校に行くか

コンビニに立ち寄り日付を確認した 合っている

ハルヒの身に何か起きたのか 不安になりつつ足を早める

部室に居ない

おいハルヒと叫ぶ 上手くいく予定だったんだが 誰かに何か言われたのか？
学校を隈無く歩き回る

あつ 居た グランドに走って向かう

キヨン「ハルヒ」

抱きしめる 立っているが反応がない

キヨン「ハルヒ？」

ハルヒ「……………」

キヨン「何があつた 誰かに何か言われたのか？」

ハルヒ「昨日も電話にも出ないで朝方帰宅」

ハルヒとは思えない声の低さだ 恐怖を感じる

キヨン「き 昨日はなすまん」

ハルヒ「今日も学校を抜け出して家に行っても居ない」

キヨン「用事があつてだな」

ハルヒ「隠し事してる」

キヨン「そ そんな事してないぞ」

ハルヒ「ずっと一緒に約束した」

キヨン「も もちろんだとも」

ハルヒ「もういい」

キヨン「すすまんな説明するから」

ハルヒ「もういいいーいーいーいーいーいー」

叫ぶと同時に大音響と凄まじ光の渦に包まれた

キヨ キヨンまだ寝てるかしら 最近毎週来てるから嫌われないか心配だわ 意を

消してチャイムを押しした

ピーンポーン ガチャ

妹「ハルにゃんおはよう」

ハルヒ「おはよう」

妹「そろそろ来ると思ってたの」

ハルヒ「そ　そう　キョン居る？」

妹「まだ寝てるのーハルにやん入ってえー」

そろそろ来るって　また来たと思われてるよ

どどどうしよう　家族にも迷惑かな　でも……

またイチヤイチャスタートよ

あれ　なんか

キヨン「今日も早いな」

ハルヒ「別にいいでしょ」

「はあーなんでこんな返事しちゃうのかしら

キヨン「朝飯食ったか？」

ハルヒ「食べてないわよ」

キヨン「食べるか？」

ハルヒ「食べる」

相変わらず優しいわ

毎週日曜日はキヨンの家で朝食を食べるのが当たり前になっていた

キヨンのお母さんのご飯美味しいのよね

キヨン母「ハルヒちゃんいっぱい食べてね」

妹「はるにやんの服いつもかわいー」

ハルヒ「ありがとう！良かったらおさがりあげるからね」

妹ちゃんよく言ってくれたわ　なのにキヨンときたら何も言ってくれない　つまり
ないわね

部屋

ベツトにダイブ　くんくん　キヨンの匂いだわ

今日も怪し痕跡はないわね　髪を掻き上げるフリをして抜け毛でマーキングよ♡

ハルヒ「続き気になるわねこの漫画」

キヨン「貸してやるぞ」

ハルヒ「重いじゃない」

キヨン「お前ごと家まで自転車で輸送してやるよ」

ハルヒ「暑くなるからいい」

はあー　アホね　帰らなきゃいけないんじゃないアホキヨンだわ

ふふ　ミニスカに視線を感じるわ　狙い通りよ

思い切ってミニスカでうつ伏せ作戦よ♡

コンコン

妹「キヨーン君」

キヨン「どうした？」

妹「お母さんとイオン行ってくるね」

キヨン「ああ 気をつけてな」

妹「ヘーキ」

キヨン「ダメだぞ ニュース見るだろ？世の中危険だ」

妹「はいはい」

ハルヒ「気をつけて行ってらっしゃい」

妹「はるにやんありがとうつ そーいえばお母さんが夕御飯も食べてくつて？」

ハルヒ「もちろんよ」

二人つきりになってしまったわ／＼／＼お母さんナイス もつと見えるように足をバ

タバタさせてアピールよ

ハルヒ「キヨン Hな本隠してるんでしょ」

キヨン「はは ないない 妹も勝手に部屋入るし あり得んな」

ハルヒ「じやー妹居なかつたらあるの？」

キヨン「ないない そんな暇あつたら寝る」

聞いてしまった／＼／＼気になるじやない

ハルヒ「じやーどーやってんのよ」

キヨン「なにがだ」

ハルヒ「あれよあれ」

やばい後悔の念が

キヨン「やれやれ」

ハルヒ「ちやんと答えなさいよね」

なんで私は食い下がるのかしら　でも気になるわ

キヨン「ハルヒはどうなんだ」

ハルヒ「なにがよ」

キヨン「あれよあれ」

ハルヒ「はー変態ね　女の子になに聞いているのよ　サイテー」

キヨン「やれやれ」

ぐっ　キヨンめ　顔が赤くなってるのが分かるわ顔を見れない　話を変えてみる

平
静
に
ね

ハルヒ「そういえばお母さん出かけたけど　あんた昼ごはんは？」

キヨン「残り物やら納豆でいいだろ」

ハルヒ「ダメよしっかかり食べなきや　そんなんじや団活に支障をきたすわ」

女子力アピールチャンスよ

キヨン「つつてもなー」

ハルヒ「しょうがないわね　なんとか用意してあげるわ」

キヨン「そりやどうも　そうゆうことも出来るんだな」

ハルヒ「当たり前でしょ　当然よト　ウゼン」

私の女子力を魅せてやるわ

キヨン「こりや楽しみだ」

ハルヒ「ちよ　そうはいつでも冷蔵庫の中身次第なんだからね」

キヨン「自信ありげだったから」

ハルヒ「つべこべ言わず食べなさいよ　せっかく私が作るんだから」

キヨン「ますます楽しみだな」

ハルヒ「…　はいはい」

ヤバイ　ハードルを上げすぎたかも　でもキヨンは優しいから美味しいって言って

くれるわよね

ちよ　なんで沈黙なのよ

ハルヒ「ちよつとなにか言いなさいよ」

キヨン「罰ゲームだ」

ハルヒ「昼ごはんが美味しくなかったら？」

えー酷くない流石に

キヨン「違う罰ゲームだ」

ハルヒ「は？」

キヨン「だってそうだろ　いつもいつも奢らせられたり雑用をさせられる　理不尽だ」

ハルヒ「SOS団の雑用係なんだからしょうがないでしょ」

キヨン「それが理不尽だ　お前もたまには嫌な思いをしろ」

ハルヒ「嫌だわなんで私が」

怒ってる　嫌われる　嫌だ　いきなりなんなのよ

キヨン「ほー逃げるのか」

ハルヒ「罰ゲームだったらなにか勝負でもするのかしら　一応聞いてあげるわ」

キヨン「俺がなんの罰ゲームをハルヒにさせるか当てるゲームだ」

ハルヒ「私が不利過ぎるじゃない　そもそも答え変えられるし」

キヨン「やれやれそんなズルを俺がするとでも」

ハルヒ「信用出来ないわね」

キヨン「3文字だ」

ハルヒ「なにがよ」

キヨン「罰ゲームだ」

ハルヒ「勝手に進めてるんじゃないわよ」

キヨン「これで後から変えてない事がわかるだろ」

ハルヒ「だから勝手に進めないでよ　そもそもやるって言うてないし」

キヨン「逃げるのか」

ハルヒ「頑なに強引ね　そんなにその罰ゲームをやらせたい訳　サイテー」

キヨン「わからないだろ」

ハルヒ「当たり前じゃない　あんたの出来の悪い脳みその考えた事なんて」

な　なにこの展開　ドキドキするわ／／

何されるのかしら

ハルヒ「んでその罰ゲームは今日出来るもの？」

キヨン「今日実行する」

ハルヒ「部屋で出来るものなの？」

キヨン「室内が望ましいな」

ハルヒ「あんたまさかエロい事じゃないでしょーね」

キヨン「もちろんだ　そんなに信用出来ないかね」

ハルヒ「ん　ま　いいわ　どんぐらい続ける内容よ」

キヨン「特にないがハルヒが嫌になるまでは続ける予定だ」

ハルヒ「サイテー」

キヨン「罰ゲームだからな」

ハルヒ「それは私以外にした事ある？」

キヨン「……ないと思う ほぼないと思う」

ハルヒ「なにその言い方」

キヨン「ほぼないと思う」

ハルヒ「それは私にやらせたら恥ずかしい？」

キヨン「相手によるんじゃないか」

ハルヒ「今日だったらあんたしかいないじゃないの」

キヨン「そうだが 俺は問題ない」

ハルヒ「……」

あ 相手がキヨンなら何でもいいわ／／

三文字つてまさかアルファベット？日本語か聞きたいわ

アルファベットって言われたらどうしよう／／でも嫌な事かあー

キヨン「ギブアップか？」

ハルヒ「うるさいわね 私が不利過ぎるわ 答えの範囲が多い」

キヨン「そうでもないだろ 的確に返答してるが」

ハルヒ「あんた団長であるこの私に罰ゲームさせるんだから あんたも罰ゲームしなさいよね」

キヨン「断るが」

ハルヒ「ダメよ 私はその罰ゲームに臨んでやるわ だからあんたにも罰ゲームよ」

キヨン「じ じゃゲームなし」

ハルヒ「は？一度言つた事を反故する気 もう時間を浪費してるの 貴重な私の時間があんたによつて 逃げられるとでも」

ふふ 安全策を取らせてもらったわ ムカついたら抱きついちゃうんだからね♡

キヨン「ま いいだろう 罰ゲーム実行でいいんだな？」

ハルヒ「別にいいわよ 二人で室内なら他の人に見られないし」

キヨン「だっこ だ」

えーーーーー

ハルヒ「あつそう」

キヨン「腕を伸ばせ」

ハルヒ「はいはい 変なところ触ったら死刑よ」

や ヤバいわ緊張する

キヨン「まさか」

ギユ ダキツ

キヨン 「よいしょっと」

ハルヒ 「……」

キヨン 「恥ずかしいだろ」

ハルヒ 「別に」

だだだっこですって 願ったり叶ったりじゃない

でも恥ずかしいわ／＼／＼人生で一番恥ずかしいかも

キヨンは普通なのかしら余裕みたいね

ちよ／＼／＼耳赤いじゃない イヤラシいわね♡

ナデナデ

ハルヒ 「ちよっとなにするのよ／＼／＼」

キヨン 「す すまん」

ハルヒ 「べ 別にいいわよ」

キヤー―嬉しい過ぎるわ／＼／＼出ちやう出ちやう表情に出ちやうって

ナデナデ

ハルヒ 「……／＼／＼」

キヨン 「……」

ハルヒ「こ　これが罰ゲーム？それともあんたの趣味？」

ふふ　動揺させてやるわ　今日が一世一代の勝負かもしれない　正面にいつてキス

の体勢へ／／／

可愛くウルウルして上目遣いよ

ハルヒ「こつち向きなさいよ」

キヨン「ハルヒに恥ずかしい思いをさせる罰ゲームの予定だった／／／」

ハルヒ「ふーん　ま　別に悪くないわね／／／」

ダキツ

ハルヒ「頭撫でなさいよ」

ナデナデ

ハルヒ「／／／／」

キヨン「ハ　ハルヒっていい匂いする」

ハルヒ「そう」

キヨン「：：：：／／／／／」

ハルヒ「ちよ耳元に顔を擦り付けるな」

キヨン「す　すまん」

カプ

キヨン「!!!」

ハルヒ「へへ」

カプ ペロペロ

ハルヒ「どう?」

キヨン「な な なんともないが」

ハルヒ「じゃ逆も」

カプ カプ カプ ペロペロ ペロペロ

キヨン「//////」

私やつちやつたわ///キヨンったら真っ赤よ

可愛いすぎる

ハルヒ「わ 私にもやってみて///」

キヨン「断る」

ハルヒ「断る事を断る///」

私は何を言ってるのかしら♡

カプカプ

気持ちいい ダメ ずつとして欲しい あ 声出ちやう

ハルヒ「はあ はあ いや ちよ/// キヨ キヨン ぎや逆も///」

首痛い／＼あんもう首全部ベチョベツトカプペロペロ ペロペロ カプ
 ハルヒ「み 耳は だ ダメよ ／＼／＼ あ キモチいい／＼／＼ そんな甘噛み

キョ キョンつてば」

キョン「はあはあすまん 俺も気持ちよくて」

カプカプ ペロペロ チュチュツチュツ

ハルヒ「す すまんて思っでないでしょ もう」プクー

ナデナデ ナデナデ チュツチュツ

ハルヒ「ね、ねーつてば／＼／＼」

トロロン

ナデナデ

キョン「な なに」

ドキドキ心臓の音が聞こえるわ／＼／＼／＼キョンの動機も痛い もうイケル 今

日はイケル気がする

ハルヒ「そ その口は」カア／＼／＼／＼／

キョン「良いのか？」カア／＼／＼／＼／

ハルヒ「こ この罰ゲームは私にだけ？」

キョン「あ 当たり前だ」

ハルヒ「／／／／／／」

ムードでキスおねだりしちゃった♡

チュ　チュ　チュツ　ン　クチュ　クチュ　ネチャ　ネチャ　レロレロ

ハルヒ「あつ　あんつ　ちよ　はあはあ／／／」

トロ〜ン

クチュクチュ　チュツ　レロレロ　ピチャピチャ　チュー

ダエキ　トロ〜

ハルヒ「もつと／／／／／」デレデレ

ナデナデ

キヨン「ハ　ハルヒ　目を瞑って　だつこをずっとしてるから　倒れちゃうかもしれ

ん　危ない」

チュツ　チュツ　テロ〜ン　チュツ　ペチャンコペチャ　クチュ　クチュ

ハルヒ「はあはあ　で　でも／／／／」

や　やばいベツトインされた　もう逃がさないわ

足でロツクよ　私も逃げないからね♡

ダキツ　ギュー　ペロペロ　カプ　ペロペロ　チュー

ハルヒ「あんつ　耳元　あつ　あん　だ　だめ　はあはあ　ああん／／／／／／」

凄い 凄すぎるわ／／好きな人とのキスってこんなに興奮するのね
はあはあ頭がジンジンする

身体が勝手に動いちゃう 特に腰が 嫌じゃないわね もう声が漏れちゃうわ 恥ずかしい／／

ちよ／／優しく触られてるわ いやらしいよ手つきが

太ももヤバいわ／／腰が浮いちゃう なんてなの

でももつと触って

私もいっぱい舐めてやるんだから／／

キョ キョンのアソコが当たっちゃった／／私で興奮してるのかしら ここれで合ってるのよね

硬くなるのよね？

キヨン「ハ ハルヒ？」

ナデナデ

ハルヒ「ん」

キヨン「今日の昼ごはんは世界一美味しいハルヒだな」

カアーーーーーなんて恥ずかしいセリフをもう大好きよ♡ズキュンズキュンよ

ハルヒ「わ 私はキヨ キヨンね／／／／」
チユー

ハルヒ「ね ねキヨン／／／」

キヨン「なんだハルヒ」

ハルヒ「もつと私の身体触りたい？／／／」

キヨン「ま まーな」

ハルヒ「で、でもこれ以上は そ そのー」モジモジ

好きって言って お願い好きって

ナデナデ

キヨン「そそそ そうだな」

ハルヒ「……………／／／／／／／／」

私だけのキヨンにする／／／誰にも取られたくない

キヨン「…………… ハルヒ」

ハルヒ「ん」

キヨン「好きだ 大好きだ 世界でハルヒが一番好きだ」

きやーきやーきたあーきやー

ハルヒ「ん 好き／／／」

ギュー ナデナデ

ハルヒ「そ そのエツチな事したいから？／＼／＼／＼」

キヨン「このまま なにもしなくても ハルヒの事が好きだぞ」

ハルヒ「ほんと？」 チュー チュツ チュツ レロレロ

上目遣いウルウル涙目よ 効果覲面だわ♡

キヨン「本当だ」

ハルヒ「キスしたいから？／＼／＼／＼」

キヨン「違うって ハルヒ まあキスもしたいが まず聞け 俺の本気を信用してないみたいだが、ハルヒは無茶もあつた 性格もなかなかだと思つた だが、なによりも

ハルヒと一緒に楽しいんだよ 別に付き合わなくても今まで通りかもしれん だが表現が難しいんだが

はは 大好きってことだ」

ハルヒ「い 一生？／＼／」

キヨン「もちろんだ」

ハルヒ「私の側から離れたら承知しないんだからねっ」

キヨン「もちろんだ」

ハルヒ「浮気もダメよ 絶対 許さない」

キヨン「まさか 信用した上で俺の事が好きなんだろう？」

ハルヒ「ん 好き／／／」

ナデナデ

ハルヒ「ずっと好き／／／」

チュツ

キヨン「な なあーハルヒ」

ハルヒ「ん」

キヨン「好きな人とイチャイチャするの なんかも気持ちいいよな」

ハルヒ「ふふ」

キヨン「どうだった」

ハルヒ「ふふ」

キヨン「はぐらかすなよ」

ハルヒ「凄かった 頭も身体もジンジンしたの／／／」

キヨン「俺も」

ハルヒ「女の子になに言わせるのよ」

チュツチュツレロレロ

キヨン「気になるじゃん」

ハルヒ「二人だけの内緒よ♡」

キヨン「あーそうだなー」

ハルヒ「谷口とかに言わないでよね」

キヨン「もちろんだ」

ハルヒ「あ あと……一人でするのもダメよ」

キヨン「なにがだ」

ハルヒ「そその あれよ あれ」

キヨン「言わなきゃわからないよ ハルヒ ハルヒの口から聞きたいな」

ナデナデ

ハルヒ「つー……その あ の 日な本とかで一人でするあれよ 浮気だから

私以外の女で一瞬でもそう思ったら浮気だから そ そう だからダメよ／／」

キヨン「わかった ハルヒも一人でしたらダメってことだな？」

ハルヒ「べ 別に私は その し したことはないわよ 興味 ないのよ」

だから聞かないでよね デリカシーがないわね

恥ずかしいんだから

キヨン「そういう事にしよう」

ハルヒ「エロキヨンね」

キヨン「ハルヒはもう俺の彼女だからな　彼女の事は色々知りたいだろ」

ハルヒ「 $\diagup\diagup\diagup\diagup\diagup\diagup\diagup\diagup\diagup$ 」

キヨン「可愛いよハルヒ」

ハルヒ「ね　ねえー」

キヨン「どうした」

ハルヒ「好き」

キヨン「あー好きだ」

ハルヒ「そ　その私の胸みたい？」 $\diagup\diagup\diagup\diagup$

キヨン「恥ずかしい」

ハルヒ「私もよ」

キヨン「見て揉んで耳元みたいにペロペロしたい」

ハルヒ「す　素直ね $\diagup\diagup$ 」

キヨン「俺だけのおっぱいだからな」

ハルヒ「 $\diagup\diagup\diagup\diagup\diagup\diagup\diagup$ 」
でもね　わ　私もHな気分させられて　そ　そ

の我慢出来ないかも」

キヨン「素直なハルヒ可愛いな」

や　やったく　キヨンは私の物　私はキヨンの物

でもさ 最後までやる こ 心の準備はまだ／／／
 だって今日の今日よ／／／

キヨン「いつ 一回立って は 裸にならないか そう産まれたての姿だ」

えー何言ってるのかしらしようがないわね／／／

ハルヒ「見ないでね／／／」

キヨン「バンザイしてみて」

キヤ 私のおっぱい 見てる見る／／／手ぶらで隠さなきや ♡

ハルヒ「キヨ キヨンもバンザイしなさい／／／」

ちよ／／／いきなり そんな あん 舐めないで あっおっぱいに段々と近づいて

る あ ヤバい は 恥ずかしい

ハルヒ「み 見nいああan」

や ヤバいわ ち 乳首 めっちゃ気持ちいい あん 声出ちゃう めっちゃ弄ら

れて舐められて

もう身体が反応凄い ビクビクしちゃう

ハルヒ「あ ああん だd@・め はあh／／／」

お おっぱいも口も凄いよ／／／キヨンだらけ

ハルヒ「k y はx あんはん」

ちよつと／／／内もも そそそんなに触らないで ううービクビクする キヨ今日はその

ハルヒ「わ わsmもキヨンの／／／」

キヨンも乳首気持ちいいのかな？舐めちやうゾ

うん反応してるわ 吸うと え 頭を押し付けられるわ／／／気持ちいいのね 嬉

しいわ ちよつと苦しいケド

ハルヒ「んんn””」

き きた パンツ下ろされちやう あ どうしよう

ち乳首だけであんなに感じちやうのに／／／

ハルヒ「はあjあ もう だ ☒b&p;」

きやーーイキナリ頭突っ込んで舐められる

ああーーきちやう あ もう い イク／／／

ハルヒ「ちよはあkyも もー／／／だ」

ビクンビクン す 凄いこのなにこれ 身体が痙攣してる 勝手に仰け反るわ／／／

／頭がジンジンする

キヨン「い イツたつてやつ？わ わからなくて」

ハルヒ「た たぶn わからnないけど はあhあ／／／」

キヨン「その気持ち良かった？」ドキドキ

ハルヒ「う うん／＼凄く恥ずかしいケド／＼」ウルウル

ハルヒ「う うーキヨンに襲われた／＼」

キヨン「す すまん」

ハルヒ「今度は わ わ 私が／＼」

ハーパンごとパンツを下してやるわ

うわ 大きい

カプツ レロレロ

ハルヒ「仕返しよ／＼」

チュパ チュチュ チュパ レロレロ

えー大きい ぐグロいわね 全部入らないわ

気持ちいいかしら？ こう？

む 無理 無理 抑え付けない ぎゃー凄いで出てくる何度も何度も 溢れちゃう

苦しい

イッたのね？

口も顔もベトベト ちょ なんで髪をアソコに巻き付けてるのよ え なんで？

でも気持ちよさそうな表情ね オエエ もう無理 床に吐いちやった

ハルヒ「げ げほっ げほっ」

キヨン「だ 大丈夫か？」

ハルヒ「辛い状況よ h あはああ」

きや ダツコされた ダツコ好き でもどこ連れてくのー喋れないよおー 匂うわ

シャワーね あー取れてく すごい粘着ね

あつ髪も洗ってくれるのね 気持ちいいわ♡

なんでシャンプーで顔洗うのよ 今度教えてあげなきやね

ボディーソープとスポンジ気持ちいいわね

きやつま先洗われるの恥ずかしい うわー私のアソコ見てるわ／／／／あんなに

さつき舐めたのに

ちよ後ろから抱きつかれて脚を全開にされたわ／／鏡に写ってる 恥ずかしい

でもキヨンとなら／／／

あん そんなまたキス 頭が溶けそう また舐められてる 気持ちいい またおっ

ぱい揉まれて乳首も まって／／／アソコはまだ敏感なのに／／／

ハルヒ「ま m つてよ ま またああん／／／」

ビクンビクンとまたイツようだ 優しく後ろから抱きしめる

キヨン「どこ触られてイッたのかな？」

ハルヒ「はあはあ く クリ／／／」

キヨン「ちゃんと聞きたいな」

ハルヒ「クリトリスよっ／／／」

キヨン「ハルにゃんは何回イッたのかい」

ハルヒ「に 二回も／／／」

す凄いわキヨン 私はもう虜かも 優しく拭いてくれる もう浴室に戻るのね寂し

ドライヤーは自分でか ポォー

上目遣いでバスタオル持つて待つてよお♡きつと可愛いはずよ ほら凄表情よ／

／／
ハルヒ「だっこ／／／」

ナデナデ

キヨン「だっこ好きだな」

ハルヒ「う うん」

歯磨きね ゴシゴシ

部屋

またベットイン 身体が重いわ キヨンったら自分の拭いてるのね／／／毎回あん

な量飲めないわよ／／／あー来た♡もう自然にくつついちゃう

ハルヒ「幸せ／／／」

キヨン「ああ」

ナデナデ チュー チュチュ メ トローン

ハルヒ「……………」

キヨン「……………」

なんか騒がしいわね もうちよつとキヨンと寝かせて

ガチャ

キヨン「シー ハルヒがお昼寝だ」

妹「ほんとだー19:00ごろ ご飯だつてー」

ユサユサ え？キヨン なんて隣に居ないのよ

ハルヒ「んーん！ キヨーンー なんて服着てるのよー」ムツ

キヨン「起きたか」

ハルヒ「む ダッコして」

ナデナデ 優しい♡

キヨン「お袋たちが帰ってきた」

今はどうでもいいわ

ハルヒ「それより ねえー好きって言って／＼／＼」

キヨン「好きだぞ」

ハルヒ「良かった 夢じゃなかったのね／＼／＼」

チュツチュ

ハルヒ「服 着せて」デレデレ

ハルヒ「キヨンは子供何人ぐらい欲しいの？／＼／＼」

キヨン「そうだな／＼／＼3人ぐらいか？」

ハルヒ「そ そうね私も／＼／＼」

キヨン「普通だな」

ハルヒ「そんな時は普通が幸せなのかもー」デレデレ

キヨン「俺が仕事してからな／＼／＼」

ダキッ ダッコ ナデナデ

ハルヒ「キヨン ケータイ見せて」

キヨン「ああ」

ハルヒ「ロツクしてるわ」イラッ

キヨン「落とした時の防犯さ」

ハルヒ「履歴の佐々木ってなんなのよ」ムスツ

キヨン「朝比奈さんも居るじゃないか」

ハルヒ「SOS団はいいのよ もおー浮気」

でもユキもみくるちゃんも可愛いからね 警戒よ

キヨン「仕方ないさ 付き合ったの今日なんだから それに佐々木も大事な友達さ」

ハルヒ「履歴を私で埋めるわ」

キヨン「付き合う前からほとんどハルヒだぞ」

ハルヒ「ダメよ 全部私 これから おやすみ電話とメールよ」

キヨン「ああ そうだな」

クビモト「チユツーーー」

キヨン「!!!」

ハルヒ「ふふ 愛の証」

やっちやっただよ

キヨン「か 鏡 鏡 オーノー」

ハルヒ「なによ不服」

キヨン「み 見えるだろ」アセアセ

ハルヒ「諦めなさい 浮気するキヨンが悪い それに洗濯機のニーソでバレるわ」

キヨン「ニーソは言い訳出来るだろ 水溜りやら川で遊んだって」

ティーシャツアゲー チューニー

ハルヒ「ふふ 諦めなさいって」

キヨン「はああ…… 実は俺もハルヒのオツパイに付けたぞ／＼」

ハルヒ「いやらしー／＼」嬉しい 帰って確認♡

キヨン「しかしだ俺のは俺とハルヒしかわからない」

ハルヒ「ん」

キヨン「今から家族でご飯だぞ」

ハルヒ「あ」

でも別にいいわ 話が早いよね♡

妹「二人ともーご飯だよー」

流石に髪がボサボサね　なんとか手ぐしで

ガチャ

あつキヨンパパだ　初めまして

キヨン父「ところでハルヒちゃんは将来を考えてるのかな　就職とか進学とか」

ハルヒ「特にないですけど大学を考えてます」ニコッ

キヨン父「ハルヒちゃんは成績いいのか？」

キヨン「いいぞ」

ハルヒ「それなりです」ニコッ

キヨン父「良かったな　家庭教師だ」

キヨン母「大学行けるかしらねキヨン　心配だわ」

キヨン「俺はなかなか馬鹿だぞ」

ハルヒ「なんとしても良い大学に入れるぐらいに鍛えてあげるわ」キリッ

キヨン母「良かったわハルヒちゃんが居てくれて」

キヨン「大学行っていいのか？」

キヨン父「なんでだ？」

キヨン「金掛かるだろう」

キヨン父「大学行かせる事は想定内だ」

ガチャ

ハルヒ「ダツコー」

ナデナデ

ハルヒ「お母さんにね 付き合ってるのって」

キヨン「そうか」

ハルヒ「ハルヒちゃんで良かったって いつでも来なさいって」

キヨン「良かったな」

ハルヒ「来週も来るわよ／＼／」

キヨン「ああ」

ハルヒ「お父さんに初めて会ったわね」

キヨン「そうだな」

ハルヒ「将来を聞かれたね ふふ」

キヨン「そろそろ行くか」

ハルヒ「いやー」

キヨン「制服ないだろ それに人生は長い」

ハルヒ「帰れって事ね」

キヨン「仕方ない事もある」

帰りたくないなあーでも初日だしね 親にも迷惑かもしれないし あーキヨンが小さくなつてく

行かないでー 歯ブラシとコップをキヨン家に置こうつと♡

ふふ おやすみメールして寝るわ

独り言

日曜日の早朝

今日も気になつてゐる奴の家に行こうと思つてゐる。

おかげで目が覚めるのが早いわ

風呂上がりで、布団の上でボーっとしてゐる時とか多いと思ふんだけど

意外に朝起きた時なのよね　　今がそう

女子向け雑誌とかにも結構Hに関して載つてゐるのよっ

やっぱり読んじやうわね　　一人で居る時だけよ

クラスの女子でそーゆう話してゐる時あるみたいなんだけど

私、友達居ないし　　作らないし　　仲間は出来た気がするけど　　こーゆう話しする人が

居ないのよ

朝起きて寝ぼけて布団の中で気持ちいい時あるじゃない？

その時Hな気分になりがちね　　あいつの家に行こうって思つてゐるからかも知れないけど

私の場合は好きな人とベットインしてキスをするシユチュエーションで妄想する事

が多いわね

Hした事ないんだけど

ドラマとかでの濡れ場でなんとなく雰囲気把握してるわ

私の場合、まず右の親指 人差し指 中指の三本で右の乳首を優しく摘み気味に触るの パジャマの下からね

そうすると段々と頭とアソコがジンジンしてくるのよ 調子いい時はもう濡れてるかもしれないわ

次はインナーのシャツをガバっと上げて両おっぱいを出してブラのホックを外すわ やっぱりブラは邪魔なのよ

家の音には敏感よ いつでも布団をかけてバレないようにしなきゃね
私はこの状態でまだ揉まないわね

同じ様に左手の三本の指で両乳首を摘み気味に弄るの

この摘んでの気持ち良さは自分が一番分かるかもしれないわ

両手でやるのが実際にHしてる感覚を想像しやすいってか あいつに触られてる気がして……

十分堪能して乳首が勃起してきたら

両乳首を中指で上下に弾くように 乳首をコリコリさせる感じで はつきり言っ

もう濡れてるわね

左指で乳首を摘みながら 右手をパンツの中に入れるの 脇からじゃなくて お腹の方から手を入れるわ

中指でスジを上下になぞって いやらしい音出ちゃうんだけど 家だからなるべく静かに音を立てないようにな

この液を潤滑油にして クリをコリコリ上下させてたまに中指と親指で摘む感じが気持ちいいのよ

この時は左手でおっぱいを揉みながら乳首を摘んでるわ 色々試したんだけど このやり方がスマートかしらね

なんかローターってのが良いみたいなんだけど

手に入れないわよね あいつ持つてるかしら 持つてたら、どう使ってるのかしらね

まままさか私に使う気じゃないでしょうね／／

ケータイでネット見ると広告で行為してる動画とかあるわよね？ 別に見たくなくとも勝手に出てくるじゃない

アソコを舐められるなんて強烈よね

指でこれだからどうなっちゃうのかしら

両膝の裏に手を入れて持ち上げるじゃない

一人でやってみたんだけど 凄いいぢやないわね

あの体勢で舐められたり 男のを挿れたりあり得ないわよね アソコを全開よ 想

像しただけで恥ずかしい

やっぱり最初は痛いつて言うから怖いのよね

たまにね中に指を少し入れてみるんだけど

怖いつてゆーかクリのが気持ちいいし イマイチやり方がわからないのよ

ちよつと話が脱線したんだけどコツはパンツに付かないようにする事ね

すぐ着て誤魔化せる様に全部脱がないで半分ぐらい下げるかな

最後は親指以外の4本の指で上下動かして刺激するの 一定のリズムがいいわ

そうするとね身体のアソコつてか腰が勝手に浮く感じになるのよ

そのまま続けると イくのよね 表現するのが難しいんだけどクルのよ それで腰

辺りがビクビク痙攣気味に…… 体の不思議だわ

あとねカップルとか見ると あっHしてるんだなって 可愛い顔してる女子も盛っ

てるんだなって思う事あるわね 子連れなんて確定だからね

まあーそう思うこともある あんなに可愛い顔して男のモノを啜ってるんだって

これつて中々凄い事じゃない街中に溢れてるわ

でも早い人って中学生の歳らしいじゃない

私はそんな事は全然思わなかったわね

なんか最近好きな人出来たっぽくてーそれからなのよねー

最近なんて日曜日の朝にしてから あいつの家に行ってるわ

段々と楽しみで起きる時間が早くなってきた

迷惑じゃなきゃいいんだけどなー

結構アピールしてるんだけど 全然そんなそぶりがないのよ 家に家族が居るかしら

ね

今日は思い切ってミニスカで行こうかしら

しよせん男よ 色仕掛けで

それよりも私の反応も可愛いくないのよね

あー素直になりたいわ 抱きつきたい

もつとストリートに言ってみようかしら

でもあいつの顔見ると言ったら負けの気がするのよ

私、負けず嫌いだし

この気持ちはなんなのかしらね恋かなー好きなのかなー

本当世の中思い通りにならないわね

とにかく行くこうつと
♡

セカンドロスト

最近気になる事がある

例えば、今日の団活中に私がいかなでキャンプ行きたいって言ったのよ

古泉「ちようど知り合いに経営してる者が居るので聞いてみますね」

キヨン「ダメだ」

ハルヒ「え」

キヨン「キャンプはダメだ」

みくる「え 楽しそうですけどおー」

古泉「キャンプで嫌な思いでもした事あるんですか？」

キヨン「わからない」

ハルヒ「ちよ わからないってなによ 私が提案した事に文句あるわけ？」

あーまたやってしまった

みんなの前だとキヨンへの当たりが強い

癖が治らない 本当はそんな風に思っただけなのに

キヨン「長門はどうだ？」

な　なんでそこで有希に聞くのよ　ムカつくわね

長門「よくないと思われる」

ハルヒ「思われるってなによ」

長門「恐らくよくない」

古泉「それでは　みんなで行きたいのにしましょうか　他に涼宮さん何か提案はございませんか？」

なによ有希まで　でもまあーキョンが行きたくなさそうだからキャンプは諦めるわ

ハルヒ「んー夏だし海ね」

みくる「ひゃー日焼けしそうですねえ」

ハルヒ「日焼け止めクリーム塗れば大丈夫よ」

キョン「それは五人全員で行くのか？」

ハルヒ「当然じゃないSOS団の行事なんだから」

キョン「全員ならいいぞ　たぶん」

たぶん　たぶんって何よ

キョン「長門は？」

長門「わからない」

ハルヒ「わからないって何が？」

長門「わからない」

古泉「涼宮さんと二人ならなんでもどこでもOKですか？」

キョン「そ　そうだな　二人なら構わん」

ヤバイ顔が赤くなる　キョンつては何言つてくれているのかしら

有希のわからないはよくわからないわね

みくる「もおーラブラブですね」

古泉「本当にそのようで　ちなみに民宿やつてる者が知り合いに居るので聞いてみま
すね」

ハルヒ「流石　古泉君　お願いするわ」

古泉「ええ　かしこまりました」

ハルヒ「新しい水着買おうかしら」

みくる「いい　ですね　私も行きますう」

ハルヒ「有希は？」

長門「……考えとく」

キョン「ダメだ」

え　何が？新しい水着買うのが？せっかくキョンの為に可愛い欲しいのに
みくる「ななんですかあー？」

キヨン「わからないけどダメだ」

ハルヒ「あんた訳わからないわよ」

キヨン「確かに」

ハルヒ「どーゆう事？」

キヨン「みんなで行くか 俺と二人で行こう」

ハルヒ「ななな何言ってるのよ／＼／＼」

みくる「涼宮さんよかったですnee」

古泉「本当にどうしたんですか？」

キヨン「わからん でもダメな気がする」

古泉「我々五人か涼宮さんと二人ならいいんですね？」

キヨン「そうだ」

って事があって でもなんでか恥ずかしくて聞かないどいたの

明日はいつもの不思議探索の後にキヨンの家に行くのよ

そ それにね家族が泊まりで留守なんだって

凄く楽しみで

キヨンってば暇なら泊まりに来ないかって

顔赤くしてね 私も赤くなっちゃったわよ

顔が熱いのわかったもの

それでね 考えちゃうわけ この前みたいにHしちゃうのかしらって／／

前は最後までしてないものね 私のバージンは守られてるわ

心の準備はしたつもりなんだけど やっぱり恐いわね

イメトレしようと思っただけだ そーゆう気分になっちゃうじゃない だから考

えないようにしてるの

しかもキヨンの事だから手出してこない可能性があるわ

だからね黒のスケスケのネグリジエ買った

親にバレないように通販したわよ 見られたらきつと卒倒するわ

私が色気プンプンでくっついたら いくらキヨンでもこの前みたいに／／

終わった後に変なキヨンを聞くことにするわ

二人つきりだしね

問題なのが土曜日の格好なのよねー可愛い服着て行きたいんだけど あからさまよ

ねー カバンもあるし

敢えてのカジュアルで行ってからのネグリジエにしようかしら 周りにもイジられ

ちやうし困ったわ

不思議探索

ハルヒ「グループ分けするわよ」

古泉「印付きですね」

キヨン「俺もだ」

みくる「私付いてないです」

長門「……」

キヨン「長門はこっちか」

ハルヒ「私も無印だわ　じゃーお昼に集合ね」

なぜかキヨンが不安げな表情をしている

いつも通りなのに

テクテクテクテク

みくる「涼宮さん　なんか機嫌いいですねえ」

ハルヒ「そ　そうかしら」

みくる「そのカバンに何入ってるんですかあ？」

ハルヒ「なななんでもないわよ」

みくる「あやしいですよ」

ハルヒ「あやしくありません」

みくる「今日終わったら解散ですかあ？」

ハルヒ「そ　そうね」

みくる「キヨン君のお家に行くんですかあ？」

ハルヒ「な　なんでよ／＼／＼」

みくる「顔に書いてますよお♡」

ハルヒ「そそんな事ないわ」

みくる「そうですかあ　じゃ水着買いに行きませんか？」

ハルヒ「ダメよ　キヨンに言われたじゃない」

みくる「なんでダメなんですかねえ？」

ハルヒ「わからないわ　今日聞いてみる」

みくる「やっぱり行くんじゃないですかあ」

ハルヒ「メメメ　メールで　メールするのよ」

みくる「うふふふ　ラブラブですネ」

ハルヒ「そんな事ないわよ」

みくる「いいなあー青春」

ハルヒ「みくるちゃんだって彼氏作れるでしょ　彼氏というよりも雑用係ね」

みくる「わたしはいいんです」

ハルヒ「なんで？」

みくる「秘密です♡」

シユーゴオーラー　　メシウメエーワリカン

部屋

全然襲つて来ない　　なによ　　この前は凄かったじゃない　　私だけ舞い上がって恥
ずかしいわ　　えーつとこの前は確かダッコしてから………　　／／／／

ハルヒ「ダッコしてー／／／」

キヨン「そそそうだな　　後でな」

ハルヒ「今してもらいたいの」

キヨン「で　　でもな／／／」

ハルヒ「じゃージャンケンしよ　　キヨンが負けたらダッコよ」

キヨン「俺が勝つたら？」

ハルヒ「なにして欲しい♡」

キヨン「そうだなー」

なんなのよ　　こんなにアピールしてるのに　　照れてるのかしら　　いつもと変わらな

いわ

せつかく二人きりなのに 時間が勿体無い

でもハルヒ焦つちやダメよ たぶん

ハルヒ「はつきりしなさいよ」

キヨン「んー」

ハルヒ「ねえーした？」

キヨン「な なにをだ？」

ハルヒ「そ その 一人／＼／」

キヨン「俺は絶対浮気しないからな 心に誓ってるんだ」

ハルヒ「私と付き合う前は？ 一人でした？」

キヨン「まあまあ したかもしれん」

ハルヒ「どうやって？」

キヨン「言いたくないんだが」

ハルヒ「気になるの キヨンにしか聞けないし」

キヨン「嫌われたくない」

ハルヒ「私は浮気されなきやキヨンと別れないわよ」

キヨン「でもなあー」

ハルヒ「ワクワク」

「キヨン「あれだ 動画だ」

ハルヒ「へえー」ジトー

キヨン「ほら」

ハルヒ「見てみたい」

キヨン「嫌だ」

ハルヒ「なんでよ」

キヨン「気まずいだろ？」

ハルヒ「キヨンと二人つきりならなんでもいいの」

キヨン「後悔するなよ」

二人でベットのの上に座った 私はさりげなくくつつく距離に身を置いたわ でも万
がーがある キヨンがこのまま何もしてこない恐れが

ハルヒ「ちよつと待って」

キヨン「辞めよう」

ハルヒ「違うの 今日新しいパジャマ買ってきたの」

キヨン「まさか朝比奈さんとか」

ハルヒ「違うわよ通販で なんでみくるちゃんが出てくるのよ」

キヨン「ならいい」

ハルヒ「え」

キヨン「ち違ってでな その ハルヒのパジャマ楽しみだ」

ハルヒ「後ろ向いて♡」

キヨン「こ こうか？」

ハルヒ「絶対見ないでね」

キヨン「ああ／＼／＼」

又ギ又ギ

ハルヒ「今 私は裸です♡」

キヨン「おう」

ハルヒ「見たい？」

キヨン「見たい」

ハルヒ「ダメ」

キヨン「そそうだな すまん」

ハルヒ「まだそのまま」

私は後ろを向いてるキヨンの左腕を谷間あたりに掴んで並んで座った 凄いドキドキする

意地悪しちゃおっと♡

ハルヒ「こっちは見ないで画面だけ見てよ」

キヨン「ななんでだ」

ハルヒ「恥ずかしいの／＼／」

キヨン「恥ずかしいパジャマなのか」

ハルヒ「どうかしら　チラ見もダメよ」

キヨン「じゃ　じゃ再生ボタン押すぞ」

キヨンはTVにケーブルで繋げておいたノートパソコンの再生ボタンを押した

キヨン「……………」

ハルヒ「……………」

大学生を騙して軽トラックの荷台に設置してるテントでお酒を飲ませてHなトークをしている

ハルヒ「ね　ねえ　これってヤラセ？」

キヨン「大抵そうだと思う」

ハルヒ「なんで？」

キヨン「他のにも出てるからな　中にはガチなものもあるかもしれんが」

ハルヒ「そーゆうもん？」

キヨン「ああ」

キスから始まりおっぱいを舐め始めてるわ

今日出会った人同士で キヨンはヤラセって言ってたけどリアルだわ

自然とキヨンの腕を強く握る どんどん激しくなっていく あんなに指が入るの

／／ 声が凄い

私は濡れてきてる事に気づいた Hな気分になってしまったわ キヨンの股間を見た膨らんでる気がする

私は我慢出来なくてキヨンにキスをした キヨンも何も言わずに舌を絡めてきた

ピチャクチャネロ お互いの粘液のいやらしい音が出る 舌を凄く絡めあって吸い付かれる

気持ちいい キヨンが首を愛撫し始めた 私もキヨンの首を舐める 肩紐を下げられた

ハルヒ「このパジャマどお／／／」

キヨン「最高だよ 世界一だ」

ハルヒ「よかった♡」

布団に押し倒された 胸元の愛撫を執拗にしてくる

ハルヒ「あん きゃ はあ あん あ」

キヨン「ハルヒの谷間好きだ」

私はキヨンの頭を谷間に押し付ける そのまま乳首を舐められると思つたら乳輪ばかり舐められる

早く吸つて欲しくて頭をバレないように誘導するのに吸つてくれない 逆の手は乳首を触らないように激しく揉んでる

ハルヒ「な 舐めて／＼／＼」

キヨン「舐めてほしいの？」

ハルヒ「う うん／＼／＼」

キヨン「なんで？」

ハルヒ「キヨンに吸われると気持ちいいの／＼／＼」

腰が浮き始めた まだ乳首にも触れてもいないのに

キヨンは未だに首や胸元の愛撫を続けて内ももを人差し指だけで触ってくる

指がアソコに近づく度に腰が浮く

ハルヒ「お おね が あん は はや く ん／＼／＼」

キヨンは無言で私をダツコした 腰とお尻に手を添えて落ちないようにしてくれてる はやくうー

キヨン「濡れた？」

ハルヒ「お 教えない／＼／＼」

キヨン「なんで？」

ハルヒ「恥ずかしいの／＼／＼」

キヨン「凄く色っぽいよ」

ハルヒ「ふふ♡」

キヨン「続きしたい？」

ハルヒ「したい♡」

キヨン「上目遣いで言ってみて」

ハルヒ「なんて？／＼／＼」

キヨン「舐めてって」

私は恥ずかしかったけど キヨンだから全然OKだった 必殺のウルウルして上目遣いとアヒル口で

でも照れた様に

ハルヒ「きよ 今日 挿れてね♡」

かつてない勢いで吸われた ベットに優しく寝かされてキスされて ちよつと乱暴におっぱいを揉まれて乳首も甘噛みされたり吸われたり

私は喘ぎ声を出してるだけだった 快楽に吞まれてキヨンを抱きしめながら声が大きくなってるのがわかる

身体の色んな所を甘噛みや吸われて跡が付くと思っただけど どうでもよかった
アソコを触られた時に凄い気持ち良くて キョンを抱き寄せてる手に力が入る も
うイク

我慢出来ない キョンにまだイかないでって言われたけど無理 クリ触らないで
イクうー

あれっ

キョン「ハルヒがイク前に挿れたい」

ハルヒ「うん はあはあはあ わたしの 初めてキョンに♡」

焦らされた分 早くイクたかったけど楽しい時間は長い方がいいわよね そう思う
事にした

アソコの先端でスジを上下してくる これ以上クリを刺激しないで イツちやうよ
／／

キョン「初めてで よく場所が 脚持って」

ハルヒ「恥ずかしいよお」

キョン「お願いだ」

ハルヒ「こ ころ?／／」

凄い恥ずかしい このポーズ見た事ある 自分の今の状況が… 自らアソコを全

開にしている

先端が入ってきた それだけでクチヨクチヨいやらしい音をたてる

ハルヒ「き 気持ちいいよ」

キヨン「痛かったら言って」

ハルヒ「ま まだ だい あん じよ あん」

半分ぐらい入ったと思う 気持ちいいのと不安がやってきた キヨンの動きが早く
なってくる

ハルヒ「ぜ ぜんぶ はいった？ あん」

キヨン「まだ半分」

ハルヒ「えん え はあはあ あん もう 入らない よ」

キヨンのアソコが力強くなってく 私は今突かれている もう無理よこれ以上は
十分気持ちいいわ

ブチっ

悲鳴をあげた これが処女膜ってやつね 涙が溢れる 痛い

キヨン「大丈夫か？ 痛い？」

ハルヒ「ちよ ちよつと ゆっくり動いて」ウルウル

キヨン「こんぐらいか」

お腹の下辺りに感触がある キョンのアソコが動いてる だんだんと痛みがひけてくる グチヨグチヨって凄いい音をだして その音が痛みではなく快楽を蘇らせる

ハルヒ「な なれて きたかも あん いい」

キョン「よかった」

再びスピードが上がってきた キョンが指でクリも刺激してくる 穴とクリの両攻めに私はまた溺れていく

一人の時よりも遥かに気持ちいい まだあれ以来イツってないし焦らされて もう身体が限界だよ

ハルヒ「も もう イか あん い ん せて」

キョン「お 俺も」

ハルヒ「イク イク イク ムー」

ビクンビクン ドピュドピュ ドピュ

ハルヒ「はあはあはあ」

ビクビクビクビク

キョン「ご ごめん」

もうよくわからない 凄く熱い お腹の下辺りが

キョンはごめんって言いながら腰を動かし続けて愛撫をしてくる 苦しくて 気持

ちよくて 嬉しい

もうグチヨグチヨよ

そのままダツコされた

ハルヒ「ま まだ入ってるの？」

ウルウル

キヨン「ああ 風呂場に行こっか？」

ハルヒ「う うん もう 動けないよ／＼／＼」

私のバージンは愛する人に奪われた

もう絶対に離さないんだからね

責任取ってもらおう♡

ラブラブ調教

ちよつとね 調子こいちやつたかもしれないわ
ここまでは望んでなかったのに

あの日ね あの日つてのはキヨンの家に泊まった時なの

親が居ないのをいい事にキヨンとHしまくったわ／／

最初は痛かったけどコツを掴んだってか気持ち良くて

さ 最初は私からっただたかもしれないけど どんどんあいつも積極的になってきて
身体を弄ばれたわ／／

色んな体勢で挿れてくるのよ

キヨンのね 気持ちいいとこ発見したっぽいし

あのね あいつフェラしながら乳首を指で弄ると凄い反応するの 腰が軽く浮くの
よ

あつ気持ちいいんだなって

んでAVを流したままだったのよ 夢中だったし

そしたら　なんか女の人を無理矢理って訳じゃないんだけどハードに　んーなんて言うのかしらね

ちよつと強引に　苦しそうなものよ　でも気持ち良さそうなの
でね　興味あつて　あいつに一回やってみてつて言ったの

キヨン「こんなに可愛い彼女には出来ない」

ハルヒ「ちよつと興味あるの／／」

キヨン「でもなあ」

ハルヒ「私が嫌だったら辞めてね？」

キヨン「もちろんだ」

ハルヒ「キヨンは優しいから大丈夫よ♡」

キヨン「じゃ調教だな」

ハルヒ「うわあーいやらしい　もう十分調教されたわ／／」

キヨン「なんか興奮してきたぞ」

ハルヒ「や　やつぱ男つて　なんてゆーか独占欲とか征服願望かしらね」

キヨン「世界征服を企んでるのはハルヒだろ」

ハルヒ「キヨンを征服よ♡」

キヨン「女の人こそ　3Pや襲われたみたいなの願望があるみたいなの聞いた事ある

ぞ」

ハルヒ「どどうなのかしらね 雑誌のアンケートとかも何かの策略の気もするけど」
キヨン「実際ちよつとハードな事に興味あるんだろ？」

ハルヒ「た たしかに でもキヨンだからよ／＼／」

それから特に何もなくて学校を通つてたの

学校のキヨンは普段と変わらないわ

愛の証のキスマークがあるけどね♡

私の身体中にもあるわよ 全身吸われたの

昼休みにお弁当を二人で食べてたら

キヨン「明日の朝七時ごろに部屋に来てくれ」

ハルヒ「ん なんで」

キヨン「お楽しみだ」

ハルヒ「ハードルを自ら上げたわね」

キヨン「嫌ならいい」

ハルヒ「嫌じゃないわよ♡」

キヨン「ああ」

ハルヒ「私わざわざ早起きするんだからね 相当面白い事なのよね？」

キヨン「さてどうだろうな」

私は心当たりがなかった。忘れてたし半分冗談だった。

まさかあいつが学校でHな事してくる訳ないし。プレゼントかなあ／＼／

でも昼休みに渡せるしね。こんな事言われたの初めてで楽しみだわ♡

翌朝言われた通りに学校に行った。もうキヨンが居たの。いつもの優し感じがない。

ハルヒ「おはよ」

キヨン「ああおはよ。ここに座って」

不気味さを感じた。

ハルヒ「な。なにかなー」

キヨン「これを付けろ」

いきなりアイマスクを出されて私は言われた通りに付けたわ。やっぱりプレゼント

ね。きつと驚かせる作戦よ。

次は何も言わないで指で口を開けられて

口の端に何か付けられて頭に縛られたわ。

閉じれないのよ。涎が溜まってくるの。

そしたら顔を上に向けられて。液体が入ってきて

苦しくて　でも声が出せなくて

キヨン「こぼさないで飲みな」

ハルヒ「んん　あ」

次々に垂れてきて　私の唾液と凄い量で　でも頑張つて飲んだの

キヨン「いい子だ」

頭を撫でられて褒められたわ

手を後ろ手にされて何かに縛られたの　感触的にネクタイで

次は首を舐めてきたのよ　耳も甘噛みされて

首が疲れたから　顔を正面にしようとしたら

ガツて髪引つ張られて

キヨン「上向いてつて言つたよね」

ハルヒ「へも　つはれて」

キヨン「言う事聞けないのか？」

ハルヒ「ほひんなことなひれふ」

首を優しく舐められながらYシャツのボタンを丁寧に外されてくの　ブラを下にさ

げられて乳首が出てるわ　恥ずかしい

ピピッ

え カメラ？ なんの音？ 上向きで苦しくて声を出せない
ハルヒ「あ あめ」

ちよつとも顔を戻そうとすると髪を引つ張られる なんなのよ

乳首を何かで挟まれた 冷たくてビクツとしたわ

なにかぶら下がってるの

ブーーンって 乳首に振動が伝わってきて

ぶら下がってるのを引つ張たりしてくるのよ

最初は優しくかったんだけど 強く引つ張られて…

痛い感覚で だんだん気持ちよくなってきた

きつと大人のおもちやつてやつね

引つ張られながらスカートの中に頭を突っ込んで来たのよ

内ももを痛い愛撫してきて 甘噛もされて

たまに顔の一部がアソコに触れるのよ 気持ちよくて 早くアソコ弄って欲しい

／／ もう我慢出来ない

しばらく続けられたわ 学校の事なんて忘れて

早くイカせて欲しかった キョンののが欲しくてしょうがなかった 身体が仰け反つ

ちやうの

パンツさげられた時にいよいよ嬉しかったの

でもねスジの上　つまりねクリ辺りに何かを貼られてパンツをまた履かされちゃったのよ

特にないまま口のを外されて　喋れると思ったたら口にキヨンのアソコが入ってきたわ

頭を手で掴まれて腰を動かしてくるのよ

苦しくて溜まつてた唾液がどんどん溢れて零れちゃってる

今度はゆっくり奥まで入ってきて　吐きそうになるの　でも辞めてくれないの

ハルヒ「げほおげほお　はあはあはあ　ううう」

抜かれたと思つたらまた突つ込まれて　ゆっくりと奥に

ハルヒ「げほお　ももう　むりい　げほっ」

顔を下に向けたら　また髪掴まれて　突つ込まれて

でね　動き止まつたの　抜かれて

でも口の先端に当てられて　舐めた方がいいのかな？

私は自ら先端を舌でペロペロ舐めてね啜えたの

自分で頭を前後にさせてキヨンが気持ちいいのかなって　口の中でも舌を絡ませて

それでね自分で奥までどこまでいけるか
ゆっくりと啜えてくの

そしたらね キヨンが頭を撫でて褒めてくれるのよ

嬉しくて どんどん奥に ちよつと苦しくなったから

抜いて

ハルヒ「げほっ つーはあはあ カプ」

その間も乳首のおもちやを引つ張られて刺激してくるの

また自分で奥まで何度も何度も

一番奥まで入れた時に頭を手で固定されて

苦しい

精子が喉に直接入ってきて イガイガするのよ

でね抜くと思つたらゆっくり浅く動かかれて

私は懸命に舐め続けて飲み込んだわ だって零すなって言うんだもん

また頭を撫でられて褒められた♡

ハルヒ「くるしかったよお」

キヨン「よく出来たね」

キヨン「たら気持ち良かったのね 乳首に留めてたのを外されて

ブラをセットして シャツのボタンも閉めてくれたわ

アイマスクも外されて 手の拘束も解かれて

辺りがボヤけて見える 腕が痛い

キヨン 「自分のアソコ触ってみな」

ハルヒ 「う うん」

キヨン 「パンツ濡れてるか？」

ハルヒ 「うん」

キヨン 「ローター付けたからな」

ハルヒ 「外してよ／／／」

キヨン 「ダメだ」

ハルヒ 「嫌よ」

髪掴まれて机に頭を抑えられて スカートを捲られたの

ハルヒ 「きや」

バシン バシン

キヨン 「言う事聞けないのか？」

ハルヒ 「嫌だよ」 ウルウル

バシン バシン

キヨン「ローター付けたままでいい？」

ハルヒ「うん」ウルウル

お尻を叩かれた 痛かったよお 嫌だつて言つたらまた叩かれた

ハルヒ「ねえダッコして」

キヨン「おいで」

ダキツ ナデナデ

ハルヒ「♡♡♡」

キヨン「歯磨こうか」

ハルヒ「うん」

私たちは3時間目からシレッと合流した 遅刻だ

あたかも最初から居ました感じを出した

私はパンツの中にローターを付けられている

そもそもパンツが濡れてて気持ち悪い キヨンったら強引なのよ

学校で襲われるなんて思わなかったわ しかもなんかハードだし ううバレちゃう

よ

授業の半ばローターが動き出した 幸いにも音はほとんどしない

私はパニックだった さつきイツてないからこの刺激はマズイ 凄い内股になっ
ちやう

だんだん気持ち良くなってきたの

授業中にあり得ないよおー 止めてよ

外したらきつと怒られる キョンに叩かれたくない

あつヤバいかも モジモジしちやう 授業中にイツちやうかも 周りを見ても誰も

異変に気づいてないわ

あつ本当に…… イク イクってあつ イクー

ビクビクビクビク

後ろの席で良かった 私はバレないように黙ってるのに必死だったわ

授業が終わった

ハルヒ「キョン辞めて」ヒソヒソ

キョン「なにが？」

ハルヒ「なにかってあれよ／＼／」

キョン「ん？」

ハルヒ「なんで意地悪するの」ウルウル

キョン「前に言ってたじゃないか」

ハルヒ「で でもおー」

キヨン「今日一日調教だ」

ハルヒ「うう 今日だけ？」

キヨン「ハルヒが希望したらしてあげるぞ毎日」

ハルヒ「毎日はむりい／／／」

セキニツケー

またローターが動き出した さつきより振動が強い

机にうづくまつて 耐える

次は昼休みだからこれを耐えれば／／／ 身体がビクビクする もう無理 イク

イカせて 止められた

うう弄ばれてる

「昼休み私はいつも通りのフリをしてキヨンのネクタイを引つ張つて部屋に着いた
大分無理したわよ すぐに抱きついて

ハルヒ「もう無理」

キヨン「気持ちいいのか？」

ハルヒ「……うん」

キヨン「お弁当食べよ」

ハルヒ「う うん」

何事もなかったようにお弁当を食べる ローターが弱く振動を始める
何か喋ろうとすると睨まれる

モジモジしたまま食べ終わった

お弁当を片付けたら 机に置かれて股を全開にされた

キヨン「溢れ出てるな」

ハルヒ「も もうむり」

キヨン「舐めてあげるね」

ハルヒ「あ あん」

内ももに垂れた愛液を舐めて綺麗にしてくれる

アソコは舐めてくれない

ハルヒ「アソコも舐めて」ウルウル

キヨン「まだダメだ」

ハルヒ「ななで意地するのよ」

バシン バシン

ハルヒ「うう 痛いよ」

キヨン「次の体育終わったら 倉庫で待ってろ」

ハルヒ「うん」

キヨン「いつも通りにするんだぞ」

ハルヒ「わかった」

キヨン「ノーブラでノーパンな」

ハルヒ「む 無理よ」

ローターが強く振動する 前屈みになって机に寄りかかっている またスカートを捲られてお尻を叩かれた

ハルヒ「あん いたい あん い」

スカートを握って内股で耐える もう嫌だ

教室に戻って周囲の目を盗んでパンツを脱いで

ブルマを履いた ドキドキする

ブラも外して シャツを被る 外した下着をカバンに突っ込んで 何食わぬ顔で体育館について

今日はバレエだった 逆にバレエに集中してた方が

楽だった 汗が出る 暑いけど上着のジャージを着ている 乳首がバレちゃうから

隣で男子もバレエしてる 体育座りをしながらキヨンを見ていた

今日のキヨンは恐怖を感じた　言う事をちゃんと言わないとお尻を叩いてくる　この前見たAVもお尻叩いてたわね　変な事言わなきゃ良かったわよ

また私の番だ　全力でバレーボールをアタックする

疲れた　垂れてくる汗を腕で拭く　またローターが振動する最初は気づかなかつた　だんだんに強くされた

もう無理　私は代わってもらって　うづくまる

教師「大丈夫か？」

ハルヒ「だ　だいじょうぶです」

教師「でも　保健室行くか？」

ハルヒ「だいじょうぶです」

バレちゃうよ　もう嫌あ

言われた通りに授業が終わって倉庫で待つ　蒸し暑い　キヨンが来た　抱きつく
汗だくだけど関係なく

ローターが微弱に振動する　執拗に舐めてきた

ハルヒ「だ　ダメ　あ　あ　い　あせ　かいて／／／」

キヨン「全身舐めて綺麗にしなきゃな」

本当に全身舐められた また気持ちよくなってくる

マットの上に抱き寄せられて私が上になった

体育着を捲られて乳首を舐められる

ブルマの上から手でローターを押し付けられた

ハルヒ「イ イク あ イ あー ぐー」

キヨンの服を思い切り握った イク時凄く苦しくて今までになく辛く身体が重い
動けない この空間も息苦しくて暑苦しい

飛び箱に押し付けられて 挿れられた ブルマが汚れちゃう 履いたままずらされ
て

ハルヒ「あん あ まだ ダ メ あん あん はあ だめ」

私はだらしなく飛び箱に寄りかかって 立ってるのがやつと 片方の腕を引つ張られ
突かれ続けている

穴の方でイッた事ない でも快樂が凄い アソコの穴でもイクの？

ハルヒ「ま また あん い はあ いあん イ クかも」

キヨン「イッていいぞ」

ハルヒ「イ イク ー」

ビクンビクンビクビク

ハルヒ「ちよ ま もう むり あん はあ あん」

ローターが強く振動する ダメまた もう 苦しい

マツトに投げられた 力が入らない

脚を上げられて挿れてきた キスをしながら

この体勢だとローターが強く押し付けられる

ハルヒ「ま あんまた」

ビクンビクンビクン

抵抗出来ないまま ブルマを脱がされて飛び箱に片脚をのせられた 立てなくて

キヨンに抱きつく

指で激しくクチヨクチヨと攻められる

ハルヒ「だ もう で てる だめー」

なにこれ 私の愛液が激しく飛び散る 床がびしょびしょだ もう頭の中がぐしや

ぐしや

そのまま正面から挿れられて 抱きついたまま片脚を上げて もうしがみつくので

精一杯

キヨン「中に出していい？」

ハルヒ「あ ん い あん いいよだして」
ドピュドピュドクドク

また出された 熱い もうどうでもいい

キョンが待ってろってどっかに行つた置いてかれた 悲しかった でも体が動かな

い

私はマットに寝転がって待つ

アソコを触って指を見た…… アソコも精子が溢れてくる

目を瞑って寝る 疲れた こんなの見られたら終わり

何分経ったかしら戻って来ない

このまま放置されても…… 絶望だわ 寝てしまった

ガラガラー

ビクツ キヨンだった私のカバンと制服持って来てくれたみたい
優しく抱き寄せられてタオルで身体を拭いてくれた

キヨン「どうだった？」

ハルヒ「もう無理」

キヨン「ご希望だったからな」

ハルヒ「辞めてっていったじゃん」ウルウル

キヨン「こんな日もあるさ」

その後のキヨンはいつもみたいに優しく大好きなキヨンだった
そのまま学校を抜け出してキヨンの部屋で一緒に寝ちやった♡

ラブラブ調教2

あれから暫くHをしていない キヨンの家には家族が居るし そーゆーシチュエー
シヨンにならなかつたわ

そもそもHし過ぎだったのよ

毎日会って キスをして電話やメールをする

Hしなくても私は幸せだったキスは出来るしね♡

でも、キヨンが心配だわ 女の身体を知ってしまった 私が教えたんだけどね／／
浮気されたらどうしよう キヨンに限ってそんな事ないわよね

前に疑問だった事を聞いてみた

ハルヒ「ねえーみくるちゃんと水着買いに行つちやダメなの？」

キヨン「ああ」

ハルヒ「有希とは？」

キヨン「…… たぶん大丈夫かな」

ハルヒ「なによそれ じゃー古泉君とは？」ニヤニヤ

キヨン「いいぞ」

ハルヒ「なんでよ」

キヨン「古泉とほいいいぞ二人で」

ハルヒ「水着よ／＼／」

キヨン「水着ってか全てにおいてだな」

ハルヒ「どおーゆうことよ キャンプだって」

キヨン「わからないんだが キャンプはダメだし 朝比奈さんと二人にならないでくれ」

ハルヒ「だからどーしてなの？」

キヨン「すまん わからないんだ」

ハルヒ「みくるちゃんの話が嫌いなの？」

キヨン「嫌いじゃないが二人つきりはダメだ 俺の側に居ろ」

ハルヒ「そ そばに居る♡」

キヨン「ならいいい 今まで通りでいいんだ」

よくわかんないけど 側に居ろだつて／＼／

ハルヒ「ねえーあとね」

キヨン「どうした」

ハルヒ「そお そのー」

キヨン 「言いにくそうだな」

ハルヒ 「うん」

キヨン 「じゃ言わない方がいい」

ハルヒ 「ねえーつてば」

キヨン 「言いたいんじゃないか」ヘラヘラ

ハルヒ 「もう心配してあげたのに」

キヨン 「ありがとう流石ハルヒだ」

ハルヒ 「聞く気ないじゃない」プク

キヨン 「怒ったらすぐに言ってくるから大事な事じゃないんだろ？」

ハルヒ 「だ 大事よ」

キヨン 「言ってみたまえ」

ハルヒ 「あのね」

キヨン 「のね」

ハルヒ 「しょーもないわ」

キヨン 「そうだな」

ハルヒ 「最近Hしてないね」

キヨン 「そ そうだな」

ハルヒ「溜まってるの」

キヨン「なにがだ」

ハルヒ「あれよあれ」

キヨン「わからんが心配する事はないぞ」

ハルヒ「ホントー？こんな魅力的な彼女が近くに居るのに」

キヨン「ああ」

ハルヒ「本当わ？」

キヨン「まあそうゆう気分ならHしたいさ」

ハルヒ「今は？」

キヨン「いいのか？」

ハルヒ「ダメ♡」

キヨン「学校だしな」

ハルヒ「学校はもう嫌よ」

キヨン「はははははは」

ハルヒ「笑い事じゃないわよ」
プク

キヨン「さて午後の授業行くか」

ハルヒ「移動教室めんどくさいわね」

午後からは情報っていうパソコンを使った授業だ

私は嬉しい事があった キヨンと一つのテーブルで二人で横並びなのよ

教室と同じ並びなんだけど私達は一番後ろで横は居ない 5、6時間目に二時間だ

カチャカチャカチャ

みんな言われた課題を打ち込んでる

私は余裕だから適当に打ってキヨンばかり見ていた

間抜け面 たまーにカツコいい時があるんだけどね

暇だし溜まつてるキヨンを刺激して観察よ♡

Yシャツのボタンを開けてブラが見えるようにした 寄り添って

ハルヒ「ねえねえ見て」ヒソヒソ

キヨン「ああ今日も可愛いぞ」

ハルヒ「それだけ？」

キヨン「それだけ」

襲ってこないのを知ってた こんな所で出来ないしね／／／ でも反応が薄くて嫌

な感じだった

せつかく可愛い女の子が構ってちゃんしてるのに

おっぱいを寄せて谷間を見せる

ハルヒ「キヨンに揉まれて大きくなつたみたい♡」
ズキユン

何か枷が外れた音が聞こえた気がする

キヨンが授業中にもかかわらず胸元に頭を突っ込んできた

谷間をペロペロ舐めてくる これだけなら可愛いと思って頭を抱きしめちゃった

失敗だった キヨンのエンジンに火を付けてしまった ブラをずらして乳首を吸つてくる

ビツクリして声が出そうだったけど堪えた

ハルヒ「も もうおわ うぶ」

手で口を抑えられる 周りにはバレてない

カチャカチャ静かなキーボード音が教室に響きわたる

教師も黙って座ってた

乳首を吸ったり甘噛みしたり愛撫される

終わったと思つたら間髪入れず逆側も攻められた

口を押さえてた手で逆側も揉まれたり引つ張つたりされる

ハルヒ「だ だめ こ あ これあん いじうは」

睨まれる 怖い この前と同じ目をしている

このままじやまた乱暴にされる あれは嫌よ

私は頑張つて突き放した 音を立てないように

胸元を両手で隠す

キヨンは黙つてパソコンに向いた 怒らせちゃつたみたい 後で謝ろうと思つた

キヨンを見る 目を合わせてくれない

私はイライラしてきた 無理に決まつてるじやない アホね ふんつ 頬杖を付く

沈黙が流れる 私もパソコンを打ち込み始めた

油断した キヤスター付きの椅子を引かれて

抱きしめられた後に足下に追いやられた

抵抗したかったけど音が出るからで出来なかつた

長机のテーブルは前にも仕切りがあつて周りからは見られない それを利用された

顔を太ももで挟まれる 恐くてキヨンの顔を見れない 後悔している

どうしたらいいかわからないで そのままで居た

顔を挟んでる内ももの力が強くなる

キヨンも前を向いてるみたいで顔が見えない

腕が伸びてきた 手を引つ張られ股間の上に置かれる そのまま何もしてこない

私はまた意味がわからないで黙つていた

髪を引つ張られて乱暴にされる

嫌だよ

手を握られてチャックをおろしてきた

この場でなんて無理よ 顔が苦しい

苦しさから逃れるためにキヨンのズボンに手を入れた 小さい

初めて小さい時触ったかも 弄ってたら大きくなってきたズボンから出てきた

私は手で握って上下に動かす

辺りは相変わらずカチャカチャカチャと騒音が響きわたる バレる前に早く出して

この窮地を脱出しよう

手の速度を早める シコシコ

いきなり手を握られ机の足元に追いやられる

苦しい なによっ

教師「涼宮さんはどこかしら？」

キヨン「体調悪いみたいで保健室に行つたようです」

ハルヒ「……………」

教師「あらそう 次からはちゃんと言いなさい」

キヨン「わかりました」

焦った 顔が汗ばんで脇の汗が垂れたのがわかった
足音が遠のく

髪を引つ張られた 目の前に大きくなったアソコが再び現れる 私はバレる恐怖で
動けなかった

なぜか鼻を摘まれる

.....

息が出来ない 口を開けて息をしようとしたらアソコを

口に突つ込まれた

頭を乱暴に前後される

ハルヒ「うう うーむ い」

無視されて両手で前後され続ける 息が苦しい 涎が椅子に垂れてしまってる

大きい 辞めてお願い 目に涙が溜まる

キヨンは私の顔を見た 頭の拘束を解かれて パソコンを打っている

私は自らキヨンのアソコを舐め始めた 舐めたり啜えたり 机から顔だけ出して
早く出してもらいたくて動かし続ける

おもいつきり吸いながら頭の動きを早くする

そうするとキヨンのアソコが膨張してきたのが分かった

なるべく音を立てないようにしてもグチヨグチヨと音が鳴る

周りに異変は感じない 奥まで啞えて吸い続ける

奥の状態で頭を固定された苦しい 咳き込んだじやう

ギリギリの所で解放される

また奥 もう無理よキヨンの太ももを叩いた解放して

全然手を緩めてくれない さらに膨張してきた

もう口に入れないよ 苦しい

抱き寄せられる 見られちゃうよ バレちゃうつて

キヨン「机の下で自分のアソコ触ってみな」

そう言つてまた押し込まれた 嫌よ 無理 無理

髪を引つ張られて

キヨン「早くしろ またローター付けて欲しいのか」

ハルヒ「は はい」ウルウル

キヨン「俺に見えるようにな」

私は机の下で股を広げて パンツを横にずらした

こつちからはキヨンの顔が見えない

代わりケータイが向けられた さいあくう

抵抗出来ないのので大人しく自分でアソコを弄り始める

濡れていた

片手でパンツをずらして片手の指でクリに刺激を与える　今までにない状況だ
家でオナニーしてる時より濡れてアソコからどんどん愛液が出てくる　呼吸が出る
のを堪えて触り続ける

相変わらずケータイはこちらに向けられている

絶対に後で消してやるんだから

机の中が狭い頭を横にして続ける

私は変態になってしまったのかしら　こんな状況でも濡れるなんて

しかし身体はだんだんと気持ちよくなってくる

ダメ　イツちやう　動画に撮られてるのに

教師「はい　今日は」

キーンコーンカーンコーン

教師「ここまで」

キリーツレイ　ザワザワザワザワ

キョン「行くぞ」

手を引つ張られる　いつもとは逆　私は振り返る事が出来なかつた

屋上の踊り場に立たされた　後ろ向きにされたパンツを下げられた

グチヨ テロー

キヨン 「糸を引いていやらしいな」

ハルヒ 「うう見ないで」

キヨン 「スムーズに入ったぞ」

ハルヒ 「あん いきなり おくまで」

パコパコパコパコ グチヨグチヨ

ハルヒ 「あつあつあん いい あん」

キヨン 「さつきイッたか？」

ハルヒ 「ま まだ ん んあ です」

携帯を目の前に置かれて動画が流れる

さつきの私だ 画面から目を背ける

頭を掴まれて画面を見せられる

ハルヒ 「おね ん はあはあ あん がい ん します」

キヨン 「ちゃんと見なきゃダメだぞ」

ハルヒ 「やめて ん」

キヨン 「クリ触つてあげるね」

バックで突かれながらクリを刺激される

ハルヒ「イ イグ イクうー」
ビクンビクン

ハルヒ「ちよ とまって まだ はあはあ」

力が入らなくて前屈みになった それでも後ろから突かれ続ける

バシン バシン

叩かないで 痛い 辞めて 恐怖で声が出ない 抵抗すると意地悪される

キヨン「声出すなよ」

バシン バシン

叩かれる度に身体がビクツとなる お尻を鷲掴みにして穴を広げられながら突かれ

る

床に倒された

強引にシャツを上げて揉まれる ブラわずらされておっぱいを出された ブラのか
ら乳首が見える

乳首を引つ張られる 長い 私の身体を弄ぶ

また挿入された

両手は恋人繋ぎで身動きが出来ない

乳首を吸われながら突かれて感じてしまう

ハルヒ「ま また」

キヨン「俺も」

ビクンビクン ドピュドクドクドピュ ビクビク

イツた後も暫く挿れたまま突かれる

愛液と精子が私の中で溢れ出す

抜かれた

ハルヒ「あっ」

キヨン「待ってろ」

……… また放置された 身体がダルい また目を瞑る

カツカツカツ 階段を登ってくる音が聞こえる 身構えた

キヨンだった 飛びつく

キスをされて ナデナデしてくれた優しい♡

キヨン「気持ちよかったな」

ハルヒ「うん／＼／」

ナデナデ

キヨン「また抜け出して帰ろっか」

ハルヒ「うん♡」

パンツに精子が垂れたのを確認して

キヨンと学校を抜け出した♡

ハルヒ「帰ったら一緒にシャワーね／＼／」

海よ

私はキヨンに報復する事に決めた。

別に彼氏が求める事だからいいんだけど、あの野獣の様な行動はリスクが伴うわ。

むしろ学校では我慢しなさいよね 全くもおー

ハルヒ「決めました」

キヨン「どうした」

ハルヒ「当分の間はHな事禁止です」

キヨン「そ そうか わかった」

ハルヒ「あら素直ね」

キヨン「ハルヒが決めた事ならテコでも覆らないだろ？」

ハルヒ「そ そうよ」

キヨン「ならそれでいい」

なによなによ 学校であんな事やこーんな事しといて これじゃ報復攻撃になつて
ないわ

もつとグイグイくる予定だったのに

でも溜まってくれば我慢出来ないわよねきつと♡

ハルヒ「イ イチャイチャするのも禁止だからね」

キヨン「ああわかった」

ハルヒ「ホントーに？」

キヨン「ああしようがない」

ハルヒ「ホントのホントーに？」

キヨン「イチャイチャしたいのか」

ハルヒ「あんなにかとしたくないわよ」

キヨン「へいへい」

またやってしまった。本当はキヨンとイチャイチャしたいのに

ダツコしてもらいたい チューしたい 頭をナデナデしてもらいたい……

そこは普通イチャイチャはOKだろ

とか言つてきなさいよね そしたら、しよーがないわねーつてなるのにー

もおーいい開き直りよ

ハルヒ「それじゃ学校行くわよ」

キヨン「ああ」

ハルヒ「お母さんのお弁当受け取らなきや」

キヨン「今日はハルヒ食べれないのか」

ハルヒ「ふふ残念／＼／」

やっぱり欲しいのね私の事が♡

放課後 団活

古泉「前にお話した民宿なんです、シーズン中で部屋が一つしか空いてないそうなんですよ」

ハルヒ「五人で一部屋つてことね 私はいいけど」

みくる「私もいいですよ♡」

ハルヒ「有希は？」

長門「問題ない」

古泉「逆に我々が目のやり場に困りそうですね」

キヨン「そうだな しかし古泉が居るならいいぞ」

古泉「え 今なんておっしゃいました？」

キヨン「全員ならいいってことだ」

古泉「…… そうですか 持ち物は水着ぐらいですかね」

ハルヒ「今からみんなで購入に行きましようよ」

キヨン「今からか？」

みくる「いいですねえ」

長門「問題ない」

古泉「それではバスで行きましようか」

シヨツピングモール

ハルヒ「ね これとどっちが可愛いかしら？」

みくる「どっちも似合いますね」

ハルヒ「難しいわね」

みくる「キヨン君に聞いてみましょう」

ハルヒ「キヨンはどっち？」

キヨン「んー」

お気に召さないのかしら可愛いのに

キヨン「こ これなんてどうだ？」

白色のビキニで下にはフリフリが付いてるやつ

キヨン「だったらこーゆうの好きなのね♡」

ハルヒ「いいわね 可愛いかも」

キヨン「白も似合うぞきつと」

ハルヒ「白の服なんてしょっちゅう着てるじゃない」

キヨン「パジャマの黒が強烈だからな」

みくる「何が強烈なんですかあ？」

古泉「僕のこれはどうです？」

キヨン「なんでもいいさ」

古泉「……」

ハルヒ「有希はこれがいいわよ」

長門「そう」

みくる「可愛いですう」

私の水着姿に我慢出来るかしら♡ 次の休みまで長いわ 早く海に行ってお披露目よ

古泉「それでは解散ですね」

みくる「みなさんお疲れ様でしたあ」

長門「……」

キヨン「それじゃ」

ハルヒ「キヨン行きましょ」

キヨン「今日も泊まってくのか？」

ハルヒ「当たり前でしょ」

キヨン「後ろに乗れい」

ハルヒ「とおー」

チリンチリン

ハルヒ「ねえー」

キヨン「なんだ」

ハルヒ「今日のパジャマは水着で寝ようかしら」

キヨン「なんでだ」

ハルヒ「海で襲われないように耐性付けてあげようと思って♡」

キヨン「……………悪くないな」

キイーーー

ガチャ

キヨン母「おかえりなさい」

キヨン「ハルヒ泊まってくから」

ハルヒ「ただいまー」

キヨン母「ハルヒちゃんお弁当美味しかった？」

ハルヒ「いつも美味しいです」

キヨン母「明日も作ってあげるからね」

キヨンの家族は温かく私を受け入れてくれてる

着替えのストックは勝手にタンズに入れてあるわ

初めはちよつと抵抗あつただけど下着まで

洗濯機に入れて洗ってもらってる

図うずしいと思われるかもしれないんだけど

でもキヨンと一緒に居たいから メンタルよ

ハルヒ「もうこんな時間ね」

キヨン「寝るか明日も学校だ」

ハルヒ「ふふ着替えなきや」

キヨン「貸してみろタグ取ってやる」

ヌギヌギ

ハルヒ「どお? / /」

キヨン「なにいきなり全裸になってるんだ」

ハルヒ「Hな事禁止よ♡」

キヨン「わかってるさ」

ハルヒ「じゃーん」

キヨン「全裸よりいいな」

ハルヒ「むう」

キヨン「似合ってるぞ」

ハルヒ「あとわ?／／／」

グイグイ

キヨン「可愛いぞ」

ハルヒ「これパッド入ってるわね」デレレ

キヨン「それがどうした」

ハルヒ「見ていつもより谷間が／／／」

キヨン「凄くいい」

ダキツ

ハルヒ「ダメよ♡」

キヨン「ああ」

ハルヒ「谷間に顔埋めてああじゃないわよ／／／」

キヨン「ああ」

ハルヒ「もうダメえ」

キヨン「ハルヒ可愛いよ」

ハルヒ「でも今日はダメなの あん♡」

ダキツ

ハルヒ「これで身動きとれないでしょ♡」

キヨン「そうだな」

サワサワ

ハルヒ「み 水着の耐性付けなきやね／／／」

キヨン「凄く興奮するぞ」

ハルヒ「ダメだつて♡」

キヨン「耐性付ける為に色んなところ見とかなきやな」

ハルヒ「いやらしいよー／／／」プク

キヨン「ちよつと四つん這いになってくれ」

ハルヒ「こ こう？／／／」

キヨン「そうだ」

ジロジロ ジー

ハルヒ「恥ずかしいよー／／／」

キヨン「そのまま」

ジロジロジー

ハルヒ「下から覗きこまないでよ／／／」

キヨン「本当に谷間凄いな」

ハルヒ「セ　セクシー？／／／」

キヨン「凄く」

ハルヒ「好き？」

キヨン「ああ世界一」

ハルヒ「しようがないんだから♡」

キヨン「もつとお尻を突き出して」

ハルヒ「こ　こう？／／／」

チュ　チュー　チュ　トロ〜ン

あつヤバい　キスはだめ

キヨン「次は自分で足を持ち上げて」

ハルヒ「い　嫌よ／／／」

キヨン「手伝ってあげるからな」

キャ　恥ずかしい／／／アソコ全開じゃない

見過ぎよ

キヨン「これまた凄く」

ハルヒ 「ダメエ／＼／」

キヨン 「はみ毛してないか確認しなきゃな」

ジー

ハルヒ 「ちよダメだつて／＼／」

キヨン 「うん大丈夫だ」

チュ レロレロカプ

ハルヒ 「ももを舐めないで／＼／」

キヨン 「こら動くな」

ハルヒ 「は 恥ずかしいよおー／＼／」

キヨン 「そのままな」

ハルヒ 「うう後ろから抱きしめないで／＼／」

キヨン 「こつち見上げてごらん」

ハルヒ 「ん」

キヨン 「上目遣いが本当に可愛いな」

ハルヒ 「へへ／＼／」

サワサワ

ダメ いやらしく触らないで

チュ　チュ　レロレロ　カプ　クチュ　チュ

キスしないでよ　これ以上は私も／／／

ハルヒ「ダメなおー♡」

キヨン「彼女にキスも禁止なのか？」

ハルヒ「いいケド」

チュチュレロレロ

あん　ジンジンする♡

ハルヒ「二人で横になりたい／／／」

キヨン「こうか？」

ハルヒ「うん♡」

チュチュ　チュー

優しく抱かれてキスしてイチャイチャするのが

一番好きだわ♡

あん気持ちいい　いやらしい　触らないで　全然私の水着姿に耐えてないじゃないやな

い

ハルヒ「私のおっぱい好き？♡」

キヨン「もちろんだ　形もハリも弾力もパーフェクトだぞ」

ハルヒ「ね ねえー」

キヨン「うん？」

ハルヒ「キヨンは上を脱いで／／／」

キヨン「なんでだ」

ハルヒ「わたしも耐性付けなきや／／／」

キヨン「そうか？」

ハルヒ「うん 脱がせてあげるね／／／」

又ギ又ギ

ハルヒ「だーからあー谷間に顔埋めないで／／／」

キヨン「刺激的なんだ」

レロレロチュ

ハルヒ「あつ ホントにい あん♡」

キヨン「乳首も好きだぞ」

ハルヒ「私の乳首コリコリするわよね？／／／」

キヨン「ああ」

ハルヒ「どお？／／／」

キヨン「世界一さ」

ハルヒ「よかったあ♡」

キヨン「吸いたい」

ハルヒ「今日はダメなの／＼」

キヨン「なんでだ」

ハルヒ「Hな事禁止だって言ったじゃない／＼」

キヨン「わかった」

ゴローン

なんでよもう終わり？もつと来ると思ったのに

私も乳首舐めたいのにいー

でも言う事ちゃんと聞くのね♡

身体は素直にビンビンになってるじゃない／＼

ハルヒ「今日は水着姿の耐性よ 脱がさないで♡」

キヨン「そうだな 可愛いぞ♡」

ダキツ チュ

ハルヒ「好き♡」

チュンチュン

寝ちやったわ……肌と肌が触れ合って気持ちいい

昨日あんなにイチヤイチヤしてたのにしてないから／＼／
我ながら凄い谷間ね ホントに揉まれて大きくなつたかも 水着もワンサイズ大き
くなつたし

キヨンのせいなんだからね／＼／

でも私からじゃ禁止の意味がないわね

悶え死んでしまえー♡私も我慢するからね♡

ダキッ チュー

学校

キーンコーンカーンコーン

ハルヒ「今日も家に行つていい？」

キヨン「ああ泊まるのか？」

ハルヒ「うん」

カチカチポチポチ

ハルヒ「ちよ私の前で携帯いじらないでよ」プク

キヨン 「お袋にメールしたのさ」

ハルヒ 「そそうなのね」

キヨン 「夕飯の準備とかあるだろ」

ハルヒ 「迷惑かしらね」

キヨン 「ハルヒもそんな事気にするんだな」

ハルヒ 「当然よ」

キヨン 「お袋もハルヒと後片付けとかするの好きみたいだぞ」

ハルヒ 「ホントー？よかった もっと家事手伝う」

キヨン 「いいかもな」

ハルヒ 「今日も水着ね」 ヒソヒソ

キヨン 「最高にツライんだが」

ハルヒ 「ふふ狙い通りよ」

キヨン 「しかし幸せだ」

ハルヒ 「なかなか恥ずかしい事言うわね」

キヨン 「ここは学校なのにな」

ハルヒ 「そうね」

キヨン 「周りの痛い視線もなくなったな」

ハルヒ「きつと飽きたのね」

キヨン「ハルヒは家居る時みたいに好きって言わないな」

ハルヒ「学校だと流石にね」ツン

キヨン「みんな驚くだろーな」

ハルヒ「なにが？」

キヨン「ハルヒのデレっぷりに」

ハルヒ「そんな事ないわデレてないし」

キヨン「そうだな」

ハルヒ「そんなに？」ヒソヒソ

キヨン「凄く可愛いんだぞ」

ハルヒ「そんな事言われて別に嬉しくなんてないわよ」

あー好き 可愛いだつて 幸せ ♡

人前じゃ無理よ／／キヨンと隣の席になりたいわね

パーティーションで見えなくされて

そしたら学校でも授業中でもイチャイチャ出来るのにね ♡

今日の夜も水着でイチャイチャしたの 〃〃〃

ネグリジエの時よりは我慢してるわね♡

ビンビンなのがバレバレよ／＼／

私もHな気分の日々が続く

ここまで来たなら意地でもしないわよ

ガタンゴトンガタンゴトン

ハルヒ「ぬるくて気持ちいいわー」

長門「しよっぱい」

古泉「本当ですわね」

キョン「日差しが眩しい」

みくる「日焼け止めクリーム塗らなきゃ♡」

ハルヒ「私が塗ってあげるわ」

みくる「お願いしますう」

長門「ご飯」

ザッブーン キヤツキヤキヤツキヤ

有希つてば浮き輪で浮きながら読書つて凄いスキルね

キヨンと古泉君は早速休憩してゐるわね 許さないわ

ハルヒ「このイカダの浮輪で沖まで行きましょ」

キヨン「沖は無理だろ」

ハルヒ「つべこべ言わずに引つ張りなさい」

古泉「かしこまりました」

長門「引つ張つて」

ザッブーン ザッブーン

キヨン「はあはあ疲れた」

みくる「フアイトですう♡」

キヨン「地味に長門が重い」

古泉「よく引つ張られながらフランクフルト食べられますね」

長門「問題ない」

ハルヒ「わー深そうね」

キヨン「足が着かなくなってきた」

ハルヒ「キヨン 古泉君もつとよ」

キヨン「やれやれ」

ハルヒ「このまま韓国よ」

古泉「今度は船でも借りましょうかね」

ハルヒ「いいわねクルージング」

キヨン「ハルヒも手で漕げよ」

ハルヒ「私は船長よ」

ピンポンパンポーン

ソコノゴニンソレイジヨウハキケンデス
モドツテクダサイ

キヨン「危険だとさ」

古泉「確かに深いですね」

ハルヒ「そんなに？」

キヨン「行くぞおー それっ」

バシャーーン

みくる「きやあー」

ハルヒ「ぎやー あっぶあつぶ」

ニギイ

ハルヒ「もぉーいきなりひっくり返さないでよ
しよっぱい」

みくる「らすけへくさあい」

キヨン「朝比奈さん」

みくる「ゲホッゲホッ」

キヨン「朝比奈さん大丈夫ですか？」

みくる「ひっくりしましたあ」

ギュー

ハルヒ「なななななに抱き合ってるのよ」

キヨン「すみません／＼／＼」

みくる「わわたしも／＼／＼」

古泉「賑やかですね」

長門「ユニーク」

ハルヒ「いいから離れなさいっ」

キヨン「危なかつたからな戻ろう」

みくる「うふふふ♡」

キヨン「大丈夫ですか？飲んじやいました？」

みくる 「しょっぱいですよおー もおー♡」

キヨン 「すすみませんノリで」

みくる 「キヨン君もそーゆう事するんですねえ♡」

キヨン 「ハルヒだけ落とせばよかったです」

みくる 「私もいいんですよ♡」

キヨン 「ん？」

みくる 「うふふふ♡」

キヨン 「なんですか？」

みくる 「内緒ですよ♡」

ハルヒ 「そこいつまでもイチヤイチャしないで戻るわよ」フンッ

私のキヨンに近いのよ ムカつくわね キヨンも鼻の下伸ばしちやって なんなの

よ

私だって溺れかけたのにー

古泉 「お待ちどうさまです」

キヨン 「焼きそばか」

みくる 「美味しいですよ♡」

長門「うまうま」

キヨン「そうですね」

ハルヒ「フンツ」

キヨン「他に何か食べるか？」

ハルヒ「いない」

みくる「ソフトクリーム食べたいですう♡」

キヨン「買いに行きましょう」

ハルヒ「私も行く」

古泉「みなさんの買ってきてあげますね」

ハルヒ「流石古泉君」

キヨン「いらないんだろ？」

ハルヒ「いるわよ うるさいわね」

ううーイライラした態度しちやった 最悪

キヨンもめんどくさそう 抱きついて仲直りしたいよおー
優しいから許してくれ
るのに

でも今は出来ない どーしよ 空気悪くしちやった
みんなの前で素直になれないわ

ハルヒ「そろそろ行きましょ」

古泉「簡易シャワーを浴びてきましようか」

キョン「そうだな」

みくる「ベトベトですう♡」

長門「ヒリヒリする」

テクテクテク

みくる「私の胸当たっちゃいました？」ヒソヒソ

キョン「すみません不可抗力で／＼／＼」

みくる「どうでした？♡」

キョン「ななにがですか？／＼／＼」

みくる「なんでもないですう♡」

だーかーらー近いの二人共

みくるちゃんじやなきやぶっ飛ばしてるわ

普段なら間に入るのにー

私ってば一人でスタスタ歩いちゃって

テクテクテク

ハルヒ「混んでるわね」

古泉「あそこ空きましたね」

みくる「そこもです」

キヨン「長門空いたぞ」

長門「そう」

ハルヒ「次が空かないわね」

シャー——

キヨン「空いた」

ハルヒ「行こ♡」

キヨン「二人でか？」

ハルヒ「早くうー混んでるのよ」

シャー——

ハルヒ「気持ちいいわねベトベトだったから」

キヨン「うつぶ いきなり顔にけるな」

ハルヒ「あはははは 仕返しいー」

キヨン「声が大きくぞ」

ハルヒ「ごめんなさい」

キヨン「なにがだ？」

ハルヒ「なんでもない ごめんなさい」

キヨン「斬新だな」

ダキツ

チュー チュパ チュパ チュツ

ダキツ

キヨン「イチャイチャ禁止だろ」

ハルヒ「今はいいのっ」

キヨン「早く出るぞ」

ハルヒ「歩けないダツコして♡」

キヨン「今度な」

ハルヒ「もおーもつと／＼／」

チュー チュ レロレロ カプ チュー トローン

キヨン「もつと唾液出してみて」

ハルヒ「ここう？／＼／」

ネバータラー

チュクチャ シュー

キヨン「だらしなく床に垂らしてごらん」

ハルヒ「うん／＼／」

タラー

ダキツ

キヨン「ついたぞ 舐めて綺麗にしてごらん」

ハルヒ「うん♡」

チュチュレロレロ ナデナデ ダキツ

キヨン「そろそろ行くぞ」

ハルヒ「嫌だぁー♡」

キヨン「愛してるから行くぞ」

ハルヒ「うん♡」

テクテクテク

古泉「それではこちらです」

みくる「The 民宿ですねぇ」

キヨン「ホテルなんかより全然いいな」

ハルヒ「民宿に泊まる機会が少ないからね」

古泉「蚊取線香が雰囲気を出してますね」

長門「スイカ食べる」

キヨン「スイカ美味そうだな」

ガラガラ

ハルヒ「狭いわね」

古泉「四人部屋に五人ですからね」

みくる「ギューギューですう♡」

キヨン「部屋を取れただけで良しとしよう」

民宿主「スイカどおぞー」

ハルヒ「冷たくて美味しいわ」

長門「モグモグ」

ハルヒ「花火しましよ」

古泉「蚊取線香借りてきます」

みくる「きゃーむむ虫」

キヨン「このこの」

みくる「流石ですうー♡」

長門「ゲホッ」

キヨン「大丈夫か長門」

長門「問題ない」

バチバチバチ

キヨン「うおっあつぶねー」

ハルヒ「キャハハハ」

古泉「夏の風物詩ですネ」

キヨン「打ち上げ花火いくぞー」

ハルヒ「待って離れるから」

ヒュ~~~~ ドンッ

ハルヒ「待ってって言ったじゃない」

キヨン「ははははは」

古泉「綺麗ですネ」

みくる「音がこわいですう」

ハルヒ「キヨンもつと派手なのよ」

キヨン「市販のじゃ無理だろ」

長門「任せて」ヒソヒソ

キヨン「おお マジか？」

長門「マジ」

キヨン「いくぞおー」

ハルヒ「お願い」

みくる「ひゃー」

ヒュ〜〜 ドンツ バンツ パチパチ ドンツ ドンツ

パンツ パラパラ ドンツ ヒュ〜ドンツドンツヒュ〜ヒュ〜ヒュ〜ドンツドンツ

ドンツドンツ

ハルヒ「すごい」

みくる「ひゃー」

古泉「その辺の花火大会レベルですね」

キヨン「おい長門やり過ぎだ」

長門「問題ない」

キヨン「ご近所さんが集まってくるぞ」

長門「夏だから」

キヨン「いやしかし」

長門「あの夏休みよりいい」

キヨン「そうだな」

ハルヒ「凄いわーお腹にドンツて響いた」

みくる「音大き過ぎですう」

古泉「特等席でしたね」

ハルヒ「戻ってトランプしましよ」

部屋

ハルヒ「8切りよ」

みくる「うー」

キヨン「またハルヒの勝ちかよ」

古泉「強いですね」

長門「次は負けない」

キヨン「大貧民だから強いカード2枚だぞ」

長門「問題ない」

キヨン「問題あるだろ」

ハルヒ「早く切ってちょうだい」

シャツフルシャツフル

古泉「これは手厳しい」

ハルヒ「ふふ ジョーカーから2からの4よ」

みくる「うへえ」

キヨン「大富豪様強過ぎだろ」

古泉「私も上がりです」

長門「……………」

キヨン「長門の連敗地獄だ」

ハルヒ「疲れたーそろそろ寝ましょ」

みくる「私も疲れました」

キヨン「怒涛の一日だったな」

長門「学校の放課後にリベンジ」

ハルヒ「受けて立つわ」

キヨン「学校でもやるのかよ」

ハルヒ「ふふ大貧民の長門さんトランプ片付けてちよーだい」

長門「……………」

キヨン「俺は端っこがいいな」

古泉「僕もです」

ハルヒ「じゃー私キヨンの隣」

みくる「チツ」

古泉「電気消しますよ」

カチツ

ハルヒ「真っ暗がいいわ」

古泉「かしこまりました」

カチツ

ゲコツゲコツゲコツ

カエルの鳴き声が聞こえるぐらい静かね　ふかふかの布団が気持ちいいわ

みんな寝たかしら？

暗闇に慣れてきた　疲れてるのに目が覚めちゃった　キヨンの布団に侵入しちゃ

おっと

モゾモゾ　ダキツ

あー落ち着く　でもみんな居るしこれ以上わね

.....

寝れない

キヨンのTシャツの中気持ちいい

やっぱり生肌ねすべすべだわ キヨンったら乳首触ると興奮するのよね

触っちゃおうかなー♡

チラッ

みんな寝てるわよね？

サワサワ・・・コリコリ

乳首立ってきたわ……

起きないわね 二人つきりだったらもう舐めちゃうのに ふふH禁止だったわね

でも溜まってるはずよね

どうしよつかない♡

ゴロン

キヤ横向いてきた 抱きしめられてる ドキドキするバレちゃうよおー

音出さなきや大丈夫かな チュチュペロペロ

ふふ乳首攻撃よ

気持ちいいでしょ 知ってるわよ♡

この状況興奮するわ スリリングよ

ヤバいドキドキする

チュチューカミカミペロペロ

暗くて表情見えないわ 逆も舐めちやお♡

あー美味しい もつともつと モゾモゾ

キヨンったら気持ちいいのね 乳首に顔を抑え付けてくるわ ちよつと苦しくして

くるのよ／／

もお♡しようがないわね いっぱい吸ってあげる

チュパチュパレロレロカプチュパ

ゲホツゲホツ ンー

ビクツ：：：： みくるちゃんかしら これ以上はまずいわね 邪魔よ全く

キヤツ 大きくなってるじゃない 最近Hしてないから元気ね♡

Hを何度してもキヨンののは元気だけど♡

今日は乳首だけで我慢して チューカミカミカプ

抱きしめられるの好き♡

あん お尻触らないで 身動きできない あんもおダメだつて♡

舐め続けてあげるわね♡

モジモジ

お尻とパンツをすべすべ触りすぎよ そんなに私の事好きなのね
 ……

視線を感じるわ 誰かしら でも振り返れない

キヨンの乳首吸ってるからね♡ずっと吸つちやえる／／／

やっぱりこれ以上はマズイはね

私ったらしたくなってきちやった／／／

どうしよう この状況いいかも優越感が♡

でもバレたくないわ

外行こうかしら でも外は嫌だなあ やっぱり布団でイチヤイチヤしながらHがい

いのよね

うう部屋以外だとキヨン乱暴気味だし

キヤツ お尻から指でワレメを… あん声出ちやう

濡れてるかも あつ気持ちいい 興奮する

今日のキヨンは優しい乱暴してこない 好き♡

あつ

チューレロレロ チュー

もうキスしたらスイツチ入っちゃうよ あん

なんでキスって興奮するのかしら／／／

モゾモゾ チュチュチュー チュパチュパ

キスながーい幸せ♡ あっブラのホック外しちやダメよ本当に本当にバレちゃうっ

て／／／

ビクッ ビクッ

そんなゆつくり乳首触らないで ／／／

なんかいつもより敏感かも あん いい そこ 吸って欲しいよおー／／／

でも声出したらバレちゃうから

頭を誘導したら吸ってくれるかしら

ソーーーー

!!! あん うっ あん すぐ気づいてくれた／／／

乳首気持ちいいのお 私の感じるの把握されちゃってる

そんなチュパチュパしないであん もっともっと

ギューー

わ わたしも指で触ってあげるんだから／／／

大きくなってる 舐めてあげたいけど どうしよう

流石に無理だわ 怖くて後ろ向けない でもこのまま続けたい 腰動いちやうよー

あん アソコも指で またイカされちやう／／／

きよ今日は音立てないでアソコをなぞってくるわね

いつもいつもいやらしい音立てて私に卑猥な言葉を投げかけて意地悪してくるのよ

指で糸引いてるとか言っちゃって／／／

しょうがないじゃんね 濡れちやうのよ

キヨンと抱き合ってキスするだけで感じちやうの

あん 無理かも イキたい イク 優しく触られるだけでも凄く気持ちいい／／／

あん わたし も最近してな

あん してないから／／／

もう気持ちいいとしか言いようがないわ／／／

きちやう きちやう イク イク ” あん イクー

ギューー

ビクンビクン ビクビク

はあはあ 待って もうイッたから もうダメ 手を止めて 指入れないで あん

掻き混ぜないでよ／／／

そ　そこ　それ　そこヤバイ／／／

もうしがみつただけでやっど

あつ　に　二本はダメだつて　あん　いい　ん　あ　また
イク　またイク　まだ　さつき　はやいつて

ビクンビクンビクンビクン

グデー

はあはあ　キヨンの乳首に口を押し当ててて声が漏れないように耐えたわ

もお♡

私の水着姿が刺激過ぎたかな／／／

我ながら魅力的過ぎるかしら　外歩いてるとジャガイモ達が振り向いてたわね
でも残念　キヨンだけなの　わ・た・し・わ♡

そ　そんな上に乗せてなににする気よ　布団の音出てるつて　こんな静かなのに
布団被つてもバレるわよ　ま　まさか挿れないわよね

あん　挿れて欲しいけど♡

短パン脱がされちゃった／／／

こんな姿見られたら　で　でもね欲しいよ／／／
グチヨ

ううーあん　全部入っちゃった／／／
いつもより大きいかも

キヨンもこの状況興奮してるのね／／／

ヒソヒソパコパコ

あん　気持ちいい　久しぶりのキヨン　ゆっくりで音は大丈夫そうね　ゆっくりの
が気持ちいいかも／／／

最近は乱暴に突かれたし　愛を感じるわ

はあはあ　また　やばい　中でも　いくかも　はあはああんあ

クチヨ　グチヨ　クチャ　グチヨ

もうされるがまま

チラッ

えーえーえーえー

みくるちゃんこつち見てるじゃない　お　起きてるわよ

暗くてかわかるわ　指啜えてるわよ　なんでよ

ちよ片手がモゾモゾしてるわ ま まさか

あんちよ スピードアップしないで 気持ちいいけど

ち 違くてそれどころじゃない あん ちよ

タンマタンマ

布団で遮音よ ガバツ

ハルヒ「お いねがい そと いこう」ヒソヒソ

キヨン「大丈夫だつて」

ハルヒ「ダメ／＼／」

キヨン「言う事聞けないのか」

ハルヒ「違うの／＼／」

キヨン「気持ちよくないか？」

ハルヒ「凄くいい／＼／」

キヨン「凄く濡れてるな」

ハルヒ「し してなかったから／＼／」

キヨン「イッたる？」

ハルヒ「う うん／＼／」

キヨン「俺もイカせてくれ」

ハルヒ「うん♡ ち ちがくて／／」

キヨン「もうちよつと速い方がいいか？」

ハルヒ「う うん／／」

パコパコパコ グチヨグチヨクチャクチヨ

キヨン「どうだ？」

ハルヒ「す凄くいい♡」

キヨン「喋れるもんな」

ハルヒ「イチヤイチャしながら挿れられるの好きなの♡」

キヨン「激しいのも好きだろ？」

ハルヒ「う うん／／でも乱暴なのは嫌い」

キヨン「本当は乱暴なのも好きだろ」

ハルヒ「う うん／／キヨンにだったら縛られてもいい♡」

キヨン「可愛いぞ」

ハルヒ「あん い 声出ちやう／／」

キヨン「ゆつくりしよう」

ハルヒ「うん／／」

キヨン「ハルヒはなんでも受け入れちやうな」

ハルヒ「キヨンだけなんだからね♡」

キヨン「今度はどんなのしたい？」

ハルヒ「あん あれ以上は あん ないわよ／＼／」

キヨン「学校のどうだった？」

ハルヒ「凄く激しかった／＼／」

キヨン「そうか」

ハルヒ「で ん あ また あん 今の方が好き♡」

キヨン「布団に垂れちやうな」

ハルヒ「キヨ キヨンが激しいの」

キヨン「舐めあいっこしよ」

ハルヒ「バレちやうよ／＼／」

キヨン「布団被ってるから大丈夫さ」

ハルヒ「で でも／＼／」

ナデナデ

キヨンのを啜えた あん 大きい 私の汁でベトベト レロレロチュ

キヤ 私のも舐めて…… ちよ 指入れるの反則よ

モゾモゾ

あん いっぱい出てくるわね 吸っても吸っても

あつ お尻広げ過ぎよ あ そんな 吸い過ぎ

音が……

ヤバいみくるちゃんの事を言うの忘れてた

でも続けたい 見られてる 周りに有希も古泉君も居るのに

凄い態勢よ 布団取られたら絶望的だわ

でもね気持ちいいの♡

キヨンの美味しいわ レロレロチュ あん だから吸い過ぎ またそいあん

はあはあ ンチュ ネロ

簡単にイカせないんだからね／／／

キヤ 後ろから横向きで／／あん 乳首いい ん 引っ張

あんまたコリコリされてる

ちよこのま あ

グチヨ

また ん ん おっぱい弄られながら挿れられちゃった／／／

後ろから抱きしめられて ん 好きかも あ

手で口塞がれちゃった♡ 声出ちやうつて ん いい

あん いいよ これ好き／／／

あ 脇 舐めないで／／／ ダメ ん 気持ちいいの ダメ

脇は恥ずかしい／／／あん ん ダメえ

え？みくるちゃんと目合っちゃった ヤバい 視線が

ん ダメ 止まって／／／

みくるちゃん ちょ やっぱ自分で触って あん もお

古泉君と有希は大丈夫そうね

ん あ あん 気持ちいいの でも あ みくるちゃん指しやぶって ん なんな

のよ はあはあ キヨンは渡さないわよ あ また ん イ やっぱイツん ああ

ん あん

グチヨグチヨ布団の中で／／／あ もう

キヨン 「また一緒にイこう」 ヒソヒソ

ハルヒ 「う うん／／／」

あ みくるちゃん見過ぎ ダメえー

キヨン 「中に出すぞ」

ハルヒ 「ん あ あん 中に出して♡」

ビクンビクン　ドロ　グチヨ　ブキユブキユドクドク
グチヨグチヨ

グデー

チュチュー

ハルヒ「気持ちよかった／＼」

キヨン「シー」

グチヨグチヨグチヨグチヨ　ギユ

ハルヒ「ね　ねえー」ヒソヒソ

キヨン「なんだ」

ハルヒ「みくるちゃん見てるの」

キヨン「え」タラー

ハルヒ「布団で隠して」

キヨン「おおう」

バサッ

チュー　チュ　レロレロ　チュ

キヨン「本当か？」

ハルヒ「うんずつと」

キヨン「……………」

ハルヒ「もおどろくの／＼／」

キヨン「よしっ気づいてない事にする」

ハルヒ「目が合ったわ」

キヨン「うむ」

ハルヒ「そ　それにね　見てオナニーしてたかも」

キヨン「な　なに」

ハルヒ「想像したら殺すわ」

キヨン「シナイデス」

ハルヒ「いい子いい子」

ナデナデ　ティツシユ拭き拭き

キヨン「黙って寝よう」

ハルヒ「そそうね」

……………

チラツ　みくるちゃん寝たわね　寝息立ててる

明日からどうしよう 知らぬ存ぜぬで通せるかしら

ギユ チユ チユ

えつ あん また まださつき きや

グチヨグチヨパコパコ

ななんで さつき あんなに私の中に出したじやない／／／

あん また♡

ハルヒ「ちよちよつと／／」ヒソヒソ

キヨン「ハルヒに意地悪されて まだ」

ハルヒ「またしたいのね?♡」

キヨン「ああまた出してあげるからな」

ハルヒ「うん♡」

次の日、私とキヨンとみくるちゃん眠そうだった
みくるちゃんの視線が羨ましそ
うに感じたかもしれないけど気づかないフリをした

ガタンゴトンガタンゴトン

ハルヒ「今日も泊まりに行っている?／／／」

キヨン「ああいいぞ」

ハルヒ「今日は水着を着て日な事してあげる♡」